

# 1 共同研究

## 【概要】

「共同研究」は、歴博が大学共同利用機関として、国内外の研究者の参加を得て実施する研究プロジェクトであり、研究課題は日本の歴史と文化に関する今日的動向を踏まえて設定されてきた。その特徴は、1981年に歴博が設置されて以来、歴史学、考古学、民俗学及び関連諸科学の連携による学際的で実証的な研究に基本を置いてきた点にある。歴博が取り組む共同研究には、基幹研究（Principal Research Project：本館の取り組む中心的な研究）、基盤研究（Fundamental Research Project：考古・歴史・民俗の資料に基づく実証的で学際的な研究）がある。また、若手研究者育成という面から、開発型共同研究（Developmental Research Project：対象は本館の任期付き助教）および共同利用型共同研究（Collaborative Access Type Joint Research：若手を主体とする外部研究者を対象とした館蔵資料および分析機器・設備を利用した研究）を行っている。この他、人間文化研究機構が実施する基幹研究プロジェクト、機構共創先導プロジェクトおよびU-REAL異分野融合・新分野創出プログラムを進めている。

歴博は大学共同利用機関としての共同利用性を高め、大学等の研究・教育に供するため、2017年度から開発型共同研究を除くすべての共同研究（基幹研究、基盤研究、共同利用型共同研究）の全面公募を行っている。

【人間文化研究機構基幹研究プロジェクト】プロジェクトには「機関拠点型」、「広領域連携型」及び「ネットワーク型」がある。機関拠点型としては「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」、広領域連携型としては「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」、「同位体による年代・古気候・交流史研究」、「延喜式のデジタル技術による汎用化」、ネットワーク型としては「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を実施しており、いずれも6年計画の2年度である。

【人間文化研究機構機構共創先導プロジェクト】研究成果の共有化や地域・社会との共創を推進するために2022年度から開始された。海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進するための在外資料研究の一拠点として、「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」を実施している。

【U-REAL異分野融合・新分野創出プログラム】大学共同利用研究教育アライアンス（IU-REAL）のもとに、4機構（人間文化研究機構、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構）間の連携により新たな分野の連携や創出を見いだすことを期待し、法人の枠を越えた異なる研究分野の研究者の自由な発想による研究を推進するもので2023年度から開始された。2023年度は「概念の多様性を包含するナレッジグラフによる分野横断型知識構築および活用に関する研究」が3年計画で開始された。

【基幹研究】基幹研究は、本館の取り組む中心的な研究テーマのもとに、学際的研究を実施する共同研究である。2022年度からは「環境や交流からみた日本歴史の動的研究」という研究テーマのもとで「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—」、「東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像」、「先史から近代における日朝交流史像の再構築—航海・港市・交流に生きた人びとの視点から—」の3本の基幹研究ランチが実施されている。また、2023年度からは新たに「生と死をめぐる歴史と文化」という研究テーマのもとに「高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究」、「死者への行為が形成する認識と社会変容」のランチが開始された。2021年3月に終了した研究課題は、「水と人間の日本列島史」の1件である。

【基盤研究】基盤研究は、基盤研究1（課題設定型）、基盤研究2（館蔵資料型）、基盤研究3（歴博研究映像）からなる。基盤研究1は、考古・歴史・民俗資料の研究資源化、高度情報化を主要な目的として実施する学際的な研究であり、新しい研究視点、研究手法などの研究基盤の新構築を目指す共同研究である。基盤研究2は、本館の収蔵資料を対象として研究計画を提案する共同研究である。そして、基盤研究3は、「歴博研究映像」の制作・研究活用に関する共同研究である。2023年度は、基盤研究2として「小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究」の1件を3年計画で開始した。2023年3月に終了した研究課題は、「秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究」、「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」、「高度情報化による古代中世の

寺院および荘園の総合的研究 ―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―の3本である。

**【共同利用型共同研究】** 共同利用型共同研究は大学院生やポストドクターなどを含む外部の若手研究者を対象として、館蔵資料および分析機器・設備を利用し取り組むものである。2023年度は「『年中行事』の基礎的研究」、「イソガネの形状と機能に関する研究」、「雑誌『SOGI』から見る近年の葬儀の変化についての研究」、「近代日本農村における家事科教育に関する歴史的研究」、「『頼資卿改元定記』の利用とその伝来に関する研究」、「『三大考』論争関係資料の調査研究」の6本が実施された。

共同研究担当 小瀬戸恵美・中村 耕作・田中大喜

## 2023年度 国立歴史民俗博物館共同研究計画一覧

研究種別	研究課題	年度（西暦）					
		'20	'21	'22	'23	'24	'25
機構基幹研究プロジェクト	(1) 機関拠点型基幹研究プロジェクト 日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究（歴博研究部 准教授 後藤真）						
	(2) -1 横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して（主導機関：国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館）フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発（歴博・民俗研究系 准教授 川村清志）						
	(2) 広領域連携型基幹研究プロジェクト (2) -2 人新世に至る、モノを通じた自然と人間の相互作用に関する研究（主導機関：総合地球環境学研究所）同位体による年代・古気候・交流史研究（歴博・情報資料研究系 教授 坂本稔）						
	(2) -3 異分野融合による総合書物学の拡張的研究（主導機関：国文学研究資料館）延喜式のデジタル技術による汎用化（歴博・歴史研究系 教授 小倉慈司）						
(3) ネットワーク型基幹研究プロジェクト 歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業（歴博研究部 教授 三上喜孝・歴博研究部 准教授 天野真志）							
機構共創先導プロジェクト	(4) 日本関連在外資料調査研究 外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用（歴博・情報資料研究系 教授 日高薫）						
基幹研究	(1) 交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—（北海道博物館 学芸主幹 鈴木琢也 他14名 副代表 歴博・考古研究系 教授 林部均）						
	(2) 東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像（明治大学文学部 教授 佐々木憲一 他17名 副代表 歴博・考古研究系 教授 松木武彦）						
	(3) 先史から近代における日朝交流史像の再構築—航海・港市・交流に生きた人びとの視点から—（歴博・民俗研究系 准教授 松田睦彦 他11名）						
	(4) 高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究（歴博・民俗研究系 教授 山田慎也 他13名）						
	(5) 死者への行為が形成する認識と社会変容（歴博・考古研究系 准教授 上野祥史 他12名）						
基盤研究	(6) 秦漢時期の文字使用をめぐる学際的研究（東京学芸大学先端教育人材育成推進機構 准教授 下田誠 他10名 副代表 歴博・考古研究系 准教授 上野祥史）						
	(7) 映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討（京都産業大学文化学部 教授 村上忠喜 他13名 副代表 歴博・民俗研究系 准教授 川村清志）						
	(8) 近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究（明治学院大学専任講師 田中祐介 他11名 副代表 歴博・研究部 教授 三上喜孝）						
	(9) 中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究（歴博・歴史研究系 准教授 田中大喜 他10名）						
	(10) 高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究—額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に—（早稲田大学 准教授 下村周太郎 他17名 副代表 歴博・歴史研究系 教授 仁藤敦史）						
	(11) 小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究（千葉大学大学院 教授 阿部昭典 他11名 副代表 歴博・考古研究系 准教授 中村耕作）						
	(12) 歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に（多摩美術大学 非常勤講師 春日聡 他7名 副代表 歴博・民俗研究系 教授 内田順子）						

研究種別	研究課題	年度（西暦）					
		'20	'21	'22	'23	'24	'25
共同利用型共同研究（当該年度実施）	(13) 『年中行事』の基礎的研究（京都精華大学 講師 堀井佳代子/歴博・歴史研究系 教授 小倉慈司）						
	(14) インガネの形状と機能に関する研究（横須賀市自然・人文博物館 学芸員 瀬川渉/歴博・民俗研究系 准教授 松田陸彦）						
	(15) 雑誌『SOGI』から見る近年の葬儀の変化についての研究（國學院大學研究開発推進機構 ポスドク研究員 宮澤安紀/歴博・民俗研究系 教授 山田慎也）						
	(16) 近代日本農村における家事科教育に関する歴史的研究（京都大学農学研究科 研究員 徳山倫子/歴博・研究部 准教授 樋浦郷子）						
	(17) 『頼資卿改元定記』の利用とその伝来に関する研究（明治大学大学院文学研究科 博士後期課程 中島皓輝/歴博・歴史研究系 准教授 田中大喜）						
	(18) 「三大考」論争関係資料の調査研究（佐賀大学地域学歴史文化研究センター 准教授 三ツ松誠/歴博・研究部 准教授 天野真志）						

## 【機構基幹研究プロジェクト】

### （1）機関拠点型基幹研究プロジェクト

日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究  
2022～2027年度  
(研究代表者 後藤 真)

### （2）広領域連携型基幹研究プロジェクト

（2）-1 横断的・融合的な地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して（主導機関：国立歴史民俗博物館，国立民族学博物館）  
フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発  
2022～2027年度  
(研究代表者 川村 清志)

#### 1. 目的

本プロジェクトは、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的な地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」の歴博ユニットとして組織された。本研究会では、地域の知恵や歴史が凝縮された伝統文化を取り入れ、持続可能で多様性にみちた社会のあり方を、保存科学、人類学、民俗学、歴史学、生態学、言語学などの横断的な領域から検証し、社会／文化の創発に積極的に参与することを目指している。

ここで本研究が対象とする地域文化とは、聞き取りや参与観察によって見聞きできる民俗文化だけでなく、文書・画像資料やデジタル資料を含めて同時代において潜在的に文化資源たりうる全ての領域を想定する。それらの文化資源を再発見したり、地域を活性化していこうとする実践と、そこに関わる研究者や学芸員などの営みを対象化しつつ、一連の文化の構築に協働で参画したいと考える。この作業の基盤として、個人や地域社会が有する文化資源のアーカイブ化を目指し、基礎資料の公開と活用への道筋を具体的に描くことを目的としている。

次に現代の文化表象の特質として、地域文化を「文化財」や「文化遺産」へと格付ける言説と社会制度を捉え直す。とりわけ、「世界遺産」や「無形文化遺産」などの世界システムと連動する文化をめぐるポリティックスが、個々の地域社会をどのように再編成していくかに着目する。研究会では、これらの言説空間を文化ナショナリズムや「伝統の創出論」に還元するのではなく、運動の総体を現代における文化の生成過程として客体化しつつ、そこで生まれる地域との往還や個々の主体的な営み、そこに関与する知識人の役割について検証していく。博物館や大学という文化の再編に関わらざるを得ない立場からの創造的な展開を目指していきたい。

第3に現代の地域文化のもう一つの特徴として、アートによる地域文化の再表象に注目し、実践的なアーティストとの協働作業を構想したい。アートという「外部の価値観」を持ち込む営みが、地域の文化資源を再発見し、地域の人たちとコラボレーションしていく可能性を検証する。アートをめぐる実践は、文化資源をめぐる言説とは一

線を描くようでありながら、地域社会の現場では、しばしば同じ対象をターゲットとして展開したり、観光・開発といった「活用」の場においても相似的な表象を示すことがある。とりわけ、博物館・美術館に所属する立場からも、両者の差異と相同性について改めて論じる必要があるだろう。

## 2. 今年度の研究計画

2023（令和5）年度

- ① 研究会，4回程度（発表者：毎回，2～3人），6月，8月，10月，12月頃の開催予定
- ② 気仙沼市の共同調査（7月から12月），石川県能登地域の共同調査（6月から2月），沖縄県のアーカイブズ調査
- ③ 愛媛県歴史文化博物館，愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センターとの共催での特集展示の実施
- ④ 上記特集展示を受けた小シンポジウムの実施
- ⑤ 日本アーカイブズ学会研究集会でのシンポジウム開催
- ⑥ 石川県珠洲市と相互の包括的な連携・協力を推進するための協定を締結

## 3. 今年度の研究経過

研究会の2年目は、研究成果の公開として1200年の歴史を有するとされる四国遍路の歴史と現在について、愛媛県歴史文化博物館、愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センターとの共催で特集展示「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」（2023年9月26日～2024年2月25日、国立歴史民俗博物館第4展示室、展示延べ日数：123日）を開催し、入館者数は60,755人であった。会期中はギャラリートークを7回行ったほか、公開シンポジウム「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」（2024年1月21日、国立歴史民俗博物館）を開催し、33名の参加があった。また、国文研ユニットと連携して、地域の歴史・文化と密接に関わりあう博物館におけるアーカイブズの収集・保存の取り組みや、市民との連携・協働による共有化や活用をテーマに日本アーカイブズ学会研究集会「地域の歴史・文化とアーカイブズ—博物館の活動を中心に」（2024年2月12日、オンライン）を共催し、両ユニットの共同研究員が各々の調査研究の成果について報告を行った。当日はアーカイブズ関係者および学会員以外の博物館関係者など77名の参加者があった。

次に、社会発信の活動として、石川県珠洲市と相互の包括的な連携・協力を推進するための協定を令和5年6月19日付で締結し、奥能登国際芸術祭2023のスズ・シアター・ミュージアム分館（STM分館）における展示の計画・立案・演説を実施し、地域の歴史・文化を表象する展示を通じた社会発信の支援を行った。本芸術祭の来場者数は、51,136名であった。会期中には、地域住民を対象にSTM分館に収集されたモノの記憶とそれにつながるストーリーから連詩をつくるワークショップ「<いまばらしの>贈りもの」をアーティストらと企画し、実施した。このほか、西日本豪雨で被災した愛媛県野村町にて災害復興と文化財・文化遺産活用ミニシンポジウム「歴史・文化を活かした地域と復興を考える」（2023年12月9日、本家緒方蔵）にて報告を行い、被災後の地域文化の記憶の継承と復興をテーマに住民との意見交流を行った。

さらに実践的な活動として、気仙沼市と相互の包括的な連携・協力を推進するための協定に基づき、東日本大震災で被災した尾形家資料をはじめとする地域の文化資源を「けせんぬま遺産」として活用する事業にも協力するとともに、被災した尾形家資料の整理・保全のための調査を気仙沼市教育委員会と連携して実施した。このほか、写真資料のアーカイブズ調査を実施し、韓国国立民俗博物館とデジタルネットワーク構築と運用および写真資料の資源化と公開・活用に関わる検討を目的とした合同研究会研究会（2024年1月24日、韓国国立民俗博物館坡州館、オンライン併用）を実施し、日韓のそれぞれの取り組みの紹介とそれぞれの課題に対する国際交流を行った。

## 4. 今年度の研究成果

書籍・論文

川村清志「地域文化における創発とは何か—フィールドサイエンスの再統合が目指すもの」、『新たな社会の創発を目指してvol.1 横断的・融合的地域文化研究の領域展開—新たな社会の創発を目指して』86-101, 人間文化研究機構, 2023年10月

川村清志, 中村耕作『REKIHAKU顔・身体をもつ道具たち』, 国立歴史民俗博物館, 2024年2月

川村清志「地域社会における近代教育と生業への参加過程—戦前の宮城県気仙沼市の事例から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第246号, 123-144, 2024年3月

佐々木重洋「「ブッシュの霊魂」の物質性と融即の美学」『社会人類学年報』49号pp.1-22, 2023年12月

高科真紀「地域社会における記憶の継承と記録の利活用—エリザベス・サンダース・ホームを事例に」『国立歴

史民俗博物館研究報告』第246号, 2024年3月

高科真紀「写真がつなぐ地域の記憶：戦後沖縄写真アーカイブズの公開と活用に向けて」『新たな社会の創発を目指してvol.1 横断的・融合的な地域文化研究の領域展開—新たな社会の創発を目指して』102-113, 人間文化研究機構2023年10月

佐々木重洋, 井上宗一郎, 山中海瑠, 犬山市史編さん委員会専門部会『犬山市史 資料編』の民俗部門(祭礼等)執筆箇所29項目入構済み(他の項目と調整中), 『犬山市史 平成篇』, 編集中

#### 口頭発表

胡光「四国遍路の歴史と世界遺産化運動」, シンポジウム「四国遍路文化遺産へのみちゆき」[フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発], 国立歴史民俗博物館, 2024年1月

大本敬久「病と死から見た四国遍路の民俗」, シンポジウム「四国遍路文化遺産へのみちゆき」, [フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発], 国立歴史民俗博物館, 2024年1月

大本敬久「西日本豪雨からの復興と地域文化の再構築」日本アーカイブズ学会2023年度研究集会「地域の歴史・文化とアーカイブズ—博物館の活動を中心に」, 日本アーカイブズ学会, 2024年2月

兼城糸絵「文化を「財」にすること」, 共同研究会「フィールドサイエンスの統合と地域文化の創発」第4回研究会, 2023年12月

川村清志「今年度計画と珠洲市(奥能登国際芸術祭関連)での収蔵展示について」共同研究会「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」, 「フィールドサイエンスの統合と地域文化の創発」第1回研究会, 2023年5月

川村清志, 大崎清香, 阿部海太郎「くいまばなし」の贈りもの」, 奥能登国際芸術祭2023, 2023年10月

川村清志「災害からの復興と地域文化—宮城県気仙沼と石川県能登の取り組み—」, シンポジウム「歴史・文化を活かした地域と復興を考える」, 野村の地域文化をつなぐ会, 2023年12月

川村清志「いま, コレクションについて考える～人はなぜ集めるのか?～」パネリスト, シンポジウム「いま, コレクションについて考える～人はなぜ集めるのか?～」, 千葉県立中央図書館, 2023年12月

川村清志「アート・文化財・民俗資料—芸術祭の実践を通して」, 共同研究会「フィールドサイエンスの統合と地域文化の創発」第4回研究会, 2023年12月

川村清志「通過視頻録製研究, 保存と利用」国際シンポジウム「無形文化遺産映像記録の方法論—台日の現状把握を通して—」, 国立歴史民俗博物館, 2024年2月

佐藤知久「創造のためのアーカイブ:京都市立芸術大学芸術資源センターの取り組みから」, 共同研究会「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」第2回研究会, 2023年7月

島立理子「いま, コレクションについて考える～人はなぜ集めるのか?～」モデレーター, シンポジウム「いま, コレクションについて考える～人はなぜ集めるのか?～」, 千葉県立中央図書館, 2023年12月

島立理子「千葉県立中央博物館の画像資料の整理と公開」日本アーカイブズ学会2023年度研究集会「地域の歴史・文化とアーカイブズ—博物館の活動を中心に」, 日本アーカイブズ学会, 2024年2月

田井静明「芸術祭と瀬戸内海歴史民俗資料館, これからの民俗資料収集」, 共同研究会「フィールドサイエンスの統合と地域文化の創発」第4回研究会, 2023年12月

高科真紀「沖縄県内の写真資料の活用に関する動向と課題—比嘉康雄アーカイブズを中心に—」, 歴博共同研究「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」, 「日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究」2023年度第1回人文情報ユニット研究会, 2023年6月

高科真紀 第71回全国博物館大会分科会1「デジタルアーカイブと博物館DX」コーディネーター, シンポジウム「博物館法改正元年—つながり, 交差する—」報告者, 第71回全国博物館大会, 日本博物館協会, 2023年11月

高科真紀「地域の歴史・文化をひらくアーカイブズの可能性—沖縄県伊江島・阿波根昌鴻の写真を中心に—」, シンポジウム「歴史・文化を活かした地域と復興を考える」, 野村の地域文化をつなぐ会, 2023年12月

高科真紀, 蓮沼素子「比嘉康雄アーカイブズの資源化と公開・活用の課題」韓国国立民俗博物館, 国立歴史民俗博物館, 「デジタルネットワーク構築と運用の課題」および「写真資料の資源化と公開・活用の課題」に係る研究会, 2024年1月

蓮沼素子「地域の文化資源としての漫画家アーカイブズの管理と活用—矢口高雄アーカイブズを中心に—」共同研究会「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」フィールドサイエンスの統合と地域文化の創発」第2回研究会, 2023年7月

#### その他

阿久津美紀, 高科真紀, 蓮沼素子「民間所在アーカイブズにおける写真の公開・活用時の被写体への配慮に関する

る諸課題—比嘉康雄が写した地域写真を中心に」『DNP文化振興財団 学術研究助成紀要』Vol.5, DNP文化振興財団, 2023年11月

川村清志「特集展示解説シート「四国遍路, 文化遺産へのみちゆき」」国立歴史民俗博物館, 2023年9月

川村清志, 高科真紀, 伊藤静香「気仙沼遺産についての助言, 尾形家資料の保存・管理」宮城県気仙沼市教育委員会, 20231120~20240114

高科真紀 分科会1「デジタルアーカイブと博物館DX」『博物館研究』令和6年3月号, 日本博物館協会, 2024年3月  
佐々木重洋, その他, 「花祭会館展示資料の作成と追加」, 名古屋大学文学部, 東栄町教育委員会, 202402  
佐々木重洋, その他「花祭の保存・伝承に関する助言等」, 花祭の未来を考える実行委員会, 202304~202402

## 5. 研究組織 (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

### 館内

- 天野 真志 本館研究部・准教授
- 内田 順子 本館研究部民俗研究系・教授
- 上野 祥史 本館研究部考古研究系・准教授
- 川邊 咲子 本館研究部・特任助教
- ◎川村 清志 本館研究部民俗研究系・准教授
- 高科 真紀 本館研究部・外来研究員
- 山田 慎也 本館研究部民俗研究系・教授

### 館外

- 磯本 宏紀 徳島県立博物館・人文課
- 内山 大介 福島県立博物館 学芸課
- 胡 光 愛媛大学法文学部・教授
- 大本 敬久 愛媛県立歴史文化博物館・学芸課
- 兼城 糸絵 鹿児島大学法文学部・准教授
- 萱岡 雅光 リアス・アーク美術館・学芸員
- 佐々木重洋 名古屋大学文学部・教授
- 島立 理子 千葉中央博物館・企画調整課長
- 田井 静明 瀬戸内海歴史民俗資料館・館長
- 蓮沼 素子 大仙市総務部総務課アーカイブズ 副主幹
- 日高 真吾 国立民族学博物館・教授
- 皆川 嘉博 秋田公立美術大学・教授
- 山下 裕作 熊本大学文学部・教授
- 山内 宏泰 リアス・アーク美術館・館長

## (2) -2 人新世に至る, モノを通じた自然と人間の相互作用に関する研究 (主導機関: 総合地球環境学研究所) 同位体による年代・古気候・交流史研究 2022~2027年度 (研究代表者 坂本 稔)

### 1. 目的

自然の中を生きる人類は, 環境中の多岐にわたる資源を利用して生活してきた。資源の中には, 食料資源となり身体に刻まれるものと, 人間により道具などに加工され利用される資源がある。古代においては, 身近な環境中から得られた資源を利用し, 食物資源や生活に必要な物品を得ていた。その後, 交易を通して資源の移動が行われ, より広域から得られる資源を利用するようになった。産業革命を経て, 化石燃料という時間軸をまたぐ資源を利用するようになり, 現代ではグローバルな空間軸をまたぐ資源を利用している。

本研究では, 身体や物質に含まれる元素の濃度および同位体比を分析することで, 自然と人間の関わりについて時間軸と空間軸を横断する研究を行い, 物質文化から見た現代の地球環境問題につながる人間の資源利用形態の変容について明らかにする。自然における元素の同位体分布は, 地質および生態系の動態を理解することが必要である。資源の利用や移動を解析する手法としては, 食料資源や水資源を象徴する身体に含まれる軽元素(炭素・窒素・

硫黄・水素・酸素など)と、地質由来資源を象徴する身体や器物中に含まれる重元素(ストロンチウム・鉛・ネオジウム・鉄・マグネシウム・亜鉛など)があるが、これらに含まれる同位体情報を用いて、自然と人間の相互作用を研究することができる。本研究においては、完新世以降の人間のあゆみを元にし、人新世(人類世)と称される現代における資源利用について考え、地球環境問題の根源となる自然と人間の相互作用を扱う新たな人間文化研究のプラットフォームを構築する。

本研究は、総合地球環境学研究所を主導機関とし、国立歴史民俗博物館を機構内参画機関とする。また、東京大学総合研究博物館をはじめとする機構外の機関・部局とも連携して研究にあたる。本研究においては、「テーマ研究」として国立民族学博物館との共同研究も合わせた「古代アンデス研究」を取り上げる。さらに、現在の共同メンバーだけでは想定できない幅広い研究を行うために、公募研究を行う。公募においては機構内を優先するが、機構内にとどまらず、大学共同利用機関法人の役割を果たすために機構外からも受け付ける。

## 2. 今年度の研究計画

歴博ユニット「同位体による年代・古気候・交流史研究」においては、時間軸に沿った高解像度同位体分析を実施し、緻密な時空間分布を人類史研究に応用する。酸素同位体比年輪年代法を充実させ、較正曲線の整備に充てる。大気中の<sup>14</sup>C濃度の地域差と微細変動を解明し、炭素14年代測定の高精度化を実現する。食性および海産資源の見積に必要な安定同位体比分析と各地の陸・海産物の炭素14年代測定を進め、人骨を含む動物資源の年代測定に資する。鉛原料の利用は各時代の文化的・社会的背景の影響が大きいので、鉛同位体比から、モノの動きや活用状況から人間文化のあり方を解明する。

データベースれきは「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース」は元報告書の検索を目的としているが、報告書に掲載があれば炭素の安定同位体比、及び奈良文化財研究所の全国遺跡報告総覧に基づく位置情報が入力される。継続的なデータの投入を進め、アイソスケープへの展開やローカルリザーバー効果の評価に応用できないか、検討を進める。

## 3. 今年度の研究経過

並行する諸研究と連動しながら、日本産樹木年輪の年輪計測と酸素同位体比分析、単年輪の炭素14年代測定を継続した。具体的には、三重県桑名市出土ケヤキ、長野県飯田市出土ヒノキ、三重県津市専修寺ヒノキ根継材、岐阜県瑞浪市大湫神明神社スギ倒木である。

令和5年度当初予算による概算要求「超高精度年代・環境解析用同位体分析システム」が採択され、年度末までに分析機器の導入が行われた。システムを構成する「超高精細全自動3D撮像装置」は細胞単位での年輪計測を自動化し、高時間解像度による気候情報の抽出が期待される。「軽元素安定同位体分析装置」は歴博を国内3番目となる酸素同位体比年輪年代法の拠点として位置付けるものである。「全自動グラフィット調製装置」は加速器質量分析法による炭素14年代測定(AMS-<sup>14</sup>C法)における測定資料(グラフィット)の効率的な調製を行うものであり、測定機関と連携をしながら運転条件を整えつつある。

## 4. 今年度の研究成果

大阪府和泉市と泉大津市にまたがる池上・曾根遺跡の大型木造建物の柱根の、酸素同位体比年輪年代法による年代判定を実施した。柱根の一つが示す紀元前52年という年輪年代は今回の測定でも支持されたものの、他の材を含む総合的な年代観については発掘を担当した地元自治体との慎重な検討を続けている。

ゲノム解析から様々な出自のヒトが含まれていることが明らかとなった。鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土人骨のストロンチウム同位体分析を実施した。解釈にはなお時間を要するものの、現時点での到達点をとっとり弥生の王国シンポジウム「続々・倭人の真実—見えてきた青谷上寺地遺跡の人々—」(2024年3月15日、鳥取市)で一般向けに報告した。

「遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベース」については、科研費による研究と連動して英語化を実現した([https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/esrd\\_en/db\\_param](https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/esrd_en/db_param))。成果はオープンアクセスの英文誌に掲載された(DOI: 10.5334/joad.115)。

2023年10月20・21日の「文化財科学会第40回記念大会」、ならびに2023年12月21日に総合地球環境学研究所で開催された「第2回人・モノ・自然シンポジウム」にて、本研究の内容と進捗を紹介した。

## 5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

歴博ユニット「同位体による年代・古気候・交流史研究」



- ◎坂本 稔 本館研究部・教授  
 齋藤 努 本館研究部・教授  
 ○箱崎 真隆 本館研究部・准教授  
 篠崎 鉄哉 本館研究部・プロジェクト研究員  
 中塚 武 名古屋大学大学院環境学研究科・教授  
 工藤雄一郎 学習院女子大学国際文化交流学部・准教授

(2) - 3 異分野融合による総合書物学の拡張的研究  
 (主導機関：国文学研究資料館)  
 延喜式のデジタル技術による汎用化  
 2022～2027年度  
 (研究代表者 小倉 慈司)

1. 目的

多様な情報を有し、「古代の百科全書」とも言える『延喜式』について、国際標準に準拠した写本画像・校訂本文・現代語訳・英訳が連動するデータベース「デジタル延喜式」を作成・発信し、日本古代史のみならず東アジア史や科学技術史等、様々な分野からの『延喜式』利活用を目指す。

本共同研究は、第三期「異分野融合による「総合書物学」の構築」の継続プロジェクトである「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」の歴博ユニットである。同プロジェクトは第四期では特に人文情報学に重点を置いて進めることとなった。そこで本ユニットでは『延喜式』の校訂本文作成・現代語訳・英訳に重点を絞り、TEIによるネット公開を第一の目標に掲げることとする。

構成メンバーは今期は若手中心とし、史料を写本にまで遡って検討したり、新たな史料を発掘する能力を持つ研究者の育成も心がけることにする。あわせて法政大学国際日本学研究所と連携して延喜式関係論文目録の充実も図っていく。『延喜式』をもとにした異分野研究については、東京医療保健大学・東海大学と交流協定を結びつつ、外部資金を獲得して進めていきたい。

なお、校訂本文は全巻のネット公開、現代語訳は4分の1程度、英訳については10巻程度の公開を目標とする。

2. 今年度の研究計画

本文検討・英訳・TEIの分科会を開催し、校訂・本作成、英訳作業を進める。今年度は校訂本文を6巻程度、現代語訳を2巻程度、英訳を2巻程度ネット公開することとする。またネット公開システム「デジタル延喜式」を改良し、延喜式関係論文目録データベースのデータ増補を進める。本文検討会・TEI検討会をそれぞれ2～3回程度開催する。

3. 今年度の研究経過

今年度は担当者間の個別の打ち合わせを中心に進めることとし、本文検討会・英訳検討会の開催は全体研究会のみとした。TEI検討会は2回開催した。一方、新たに比較史検討会を開催し、イギリス史を専門とする熊本大学名誉教授鶴島博和氏を共同研究員に加えることとした。

- 6月25日 TEI検討会 於歴博+オンライン 参加者9名
- 7月17日 比較史研究会 オンライン 参加者13名
- 9月6日 TEI検討会 於歴博 参加者7名
- 3月10日 金漆研究会 於明治大学 参加者10名
- 3月17日 全体研究会 於歴博 参加者15名
- 小倉慈司「今年度の成果と来年度について」
- 戸村美月・渡辺美紗子「延喜式TEI化作業について」
- 前野智哉「『延喜式』巻一の標注 一京博本と鈴鹿本に載る新出標注に関する考察」
- 山口えり「太政官式と陰陽寮式について」
- 古田一史「典薬・近衛式本文校訂作業報告」
- 三舟隆之「延喜式の古代酒醸造再現実験」
- 中村覚「Domesday Bookの可視化システムの開発」
- 鶴島博和「Domesday Book とその神話」

#### 4. 今年度の研究成果

今年度は本文校訂について巻9・10・21・22・24・32を、現代語訳について巻9・10・22・39を「デジタル延喜式」にて公開し（2024年3月31日）、あわせて「デジタル延喜式」システムの改良や既存データの修正等をおこなった。また巻9・10・21の校訂本文および巻37および39内膳の英訳を『国立歴史民俗博物館研究報告』244集（2024年3月製作）に掲載した。小倉編『国立歴史民俗博物館研究報告』244集には29本の論考を収録している。2024年2月18日にはNHKテレビ「おはよう日本」における実践女子大学『源氏物語』装束再現プロジェクトの紹介において「デジタル延喜式」の画像が使用された。

[https://www3.nhk.or.jp/news/special/sci\\_cul/2024/02/special/kenkyushitsu/murasaki-shikibu/](https://www3.nhk.or.jp/news/special/sci_cul/2024/02/special/kenkyushitsu/murasaki-shikibu/)

延喜式関係論文目録は、1月30日に36,748件を追加公開し、合計114,658件となった。

この他、5月19日に歴博友の会歴史学講座において講演「幻の古代塗料「金漆」を探して」をおこなった。またRAとして雇用していた大学院生が来年度より大学に就職することとなった。

以下に研究協力者も含めた論文等の主要研究成果を掲げる。

小倉 慈司, 平城京大寺院における僧侶の生活—西大寺食堂院と僧房をめぐって、『古代寺院の食を再現する—西大寺では何を食べていたのか—』, 吉川弘文館, 20230410, ISBN978-4-642-04673-2, pp.13-26

小倉 慈司・倉本 一宏・加藤 友康編『『小右記』と王朝時代』, 吉川弘文館, 20230501, ISBN978-4-642-04674-9  
早川 万年, 「語部は美濃に八人」考, 郷土研究岐阜 創立50周年記念論集, 岐阜県郷土資料研究協議会, 20230701, ISBN978-4-905687-75-7, 査読有り

神戸 航介, 平安中後期の国家財政, 『撰関・院政期研究を読みなおす』, 思文閣出版, 20231110, ISBN978-4-7842-2066-3

小倉 慈司, 撰関時代の神祇信仰はどのようなものだったのか, 『平安時代はどんな時代か—撰関政治の実像』, 小径社, 20231201, ISBN978-4-905350-18-7, pp.228-240, 査読有り

三舟 隆之, 『古代人の食事と健康』, 同成社, 20240110, ISBN978-4-88621-020-0, 207p.

小倉 慈司, 神社と神戸, 『新視点 出雲古代史 文献史学と考古学』, 平凡社, 20240117, ISBN978-4-582-46913-4, pp.126-141

三舟 隆之, 新造院と仏教施設—出雲の古代寺院, 『新視点 出雲古代史 文献史学と考古学』, 平凡社, 20240117, ISBN978-4-582-46913-4, pp.142-157

稲田奈津子, 遺物が物語る古代の文化交流, 『深化する歴史学』, 大月書店, 20240124, ISBN9784272510153, pp.26-31

山口 えり, 日本古代の災害認識と「理運」-〈術数文化〉は古代を生きた人々にどのような影響を与えたか, 水口幹記編『東アジア的世界分析の方法』, 文学通信, 20240228, ISBN978-4-86766-029-4, pp.106-111

小倉 慈司編, 『国立歴史民俗博物館研究報告』244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN0286-7400, 査読有り

小倉 慈司, 写本の再調査による大日本古記録本『小右記』の補訂, 『『小右記』と王朝時代』, 吉川弘文館, 20230501, ISBN978-4-642-04674-9, pp.25-46

山本 橘香・山口 えり, 江戸時代の旅行書物の移り変わり, 広島国際研究29, 広島市立大学, 20240200, ISSN1341-3546

三輪 仁美, 日本古代「国母」考, 日本歴史910, 吉川弘文館, 20240220, ISSN0386-9164, pp.1-16, 査読有り

小川 宏和, 古代の鵜飼と贄, 『日本書紀の成立と伝来』, 雄山閣, 20240225, ISBN978-4-639-02965-6, pp.327-349

小倉 慈司, 『延喜式』巻九・一〇の校訂, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.43-136, 査読有り

清武 雄二, 『延喜式覆奏短尺草写』の租本形状, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.383-399, 査読有り

三輪 仁美, 『延喜式』巻二一校訂(稿), 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.137-165, 査読有り

小川 宏和, 『延喜式』の韓櫃に関する覚書, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.367-382, 査読有り

仁藤 敦史, 格式からみた国の等級, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.247-265, 査読有り

稲田奈津子, 韓国における金漆・黄漆研究の現在, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.509-536, 査読有り

三上 喜孝, 「客作見」に関する二, 三の考察, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.323-328, 査読有り

古田 一史, 『延喜式』からみた考選文の申送手続き, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.225-236, 査読有り

神戸 航介, 大嘗祭用途調達制度と行事所, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.167-186, 査読有り

井上 正望, 古代・中世移行期の天皇と神事の理念・実態, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.199-205, 査読有り

余語 琢磨, 延喜式にみる酢の原料・醸造過程・関連具について一甕を用いる醸造元の民俗考古学的調査と伝統的酢造りの自然科学的研究の分析から, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.537-574, 査読有り

小風 尚樹・中村 覚・渡辺美紗子・戸村 美月・小風 綾乃・後藤 真, 相互運用可能な歴史資料情報の構築に向けて—『延喜式』TEIとIIIFを事例として, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.495-508, 査読有り

早川 万年, 九世紀飛騨における神階昇叙の背景, 飛騨市歴史文化調査室報5, 飛騨市歴史文化調査室, 20243025

早川 万年, 2023津田左右吉に関する二つの展示, 美濃加茂市民ミュージアム紀要23, 美濃加茂市民ミュージアム, 20243031, ISSN, 2758-7088, 査読有り

小倉 慈司, 幻の古代塗料「金漆」を探して, 歴博友の会歴史学講座, 国立歴史民俗博物館, 20230519

小路 鈴華・山口 えり, 江戸時代における広島和紙産業: 地域の伝統文化を学ぶ一例として, 史学研究316, 広島大学, 20231029, ISSN0386-9342

小倉 慈司, 古代律令祭祀制度の成立と展開, 神道宗教学会令和5年度学術シンポジウム「社会の復元力と神・まつり〜古代・中世移行期と祭礼の発生・展開を軸に〜」, 国学院大学, 20231202

石川 智士, 魚を食べ続けるために, 京都府立大学和食文化研究センター【和食文化連続講座】どうなる? 水産資源? ?, 京都府立京都学・歴彩館大ホール, 20231223

小倉 慈司, 古代の年号と天皇, 駿台歴史講座, 駿台学園中学・高等学校, 20240120

小川 宏和, 古代葛飾と『高橋氏文』, 葛飾区郷土と天文の博物館, 20240224

山口 えり, 回顧と展望 平安時代の文化, 『史学雑誌』132-5, 史学会, 20230500, ISSN 0018-2478

清武 雄二, 葛飾の流行神, 令和5年度企画展 The ご利益, 葛飾区郷土と天文の博物館, 20231209, pp.50-57

清武 雄二, 「立石様」の信仰とご利益, 令和6年度企画展 The ご利益, 葛飾区郷土と天文の博物館, 20231209, pp.105-110

小倉 慈司, 川畑勝久著『古代祭祀の伝承と基盤』, 古代文化75-4, 古代学協会, 20240300, ISSN0045-9232, pp.109-111

早川 万年, 延喜式卷三(臨時祭)校訂をめぐって, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN0286-7400, pp.33-41, 査読有り

Alessandro Poletto, Procedures of the Bureau of Medications: Annotated English Translation of Scroll 37 of the Engi Shiki, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館244, 20240329, ISSN2759-453X, pp.441-493, 査読有り

三舟 隆之・佐藤つかさ・田村真亜子・細野 朱里, 古代の「索餅」とその再現の諸問題, 国立歴史民俗博物館研究報告244, 国立歴史民俗博物館, 20240329, ISSN2759-453X, pp.575-588, 査読有り

小川 宏和, 武蔵野美術大学所蔵の民俗資料—府中・東大和・青梅市収集資料を中心として—, 多摩のあゆみ190, ぎょうせい, 20230531, pp.44-51

山口 えり, 日本文化の世界への発信, 呉青山高校キャンパス見学模擬授業, 広島市立大学, 20230726

清武 雄二, お稲荷様とご利益—江戸時代の半田稲荷神社—, ラジオ番組「まなびランド」, FMかつしか, 20230906

##### 5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

◎小倉 慈司 本館研究部・教授

○後藤 真 本館研究部・准教授

仁藤 敦史 本館研究部・教授  
 三上 喜孝 本館研究部・教授  
 石川 智士 京都府立大文学部学・教授  
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授  
 井上 正望 埼玉学園大学・特任講師  
 小川 宏和 武蔵野美術大学美術館・図書館民俗資料室・学芸員  
 小口 雅史 法政大学文学部・教授  
 神戸 航介 宮内庁書陵部編修課・研究員  
 清武 雄二 葛飾区郷土と天文の博物館・専門調査員  
 小風 尚樹 千葉大学人文社会科学系教育研究機構・助教  
 鈴木 蒼 宮内庁書陵部編修課・研究員  
 鶴島 博和 熊本大学名誉教授  
 中村 覚 東京大学史料編纂所・助教  
 西川 明彦 宮内庁正倉院事務所・調査室員  
 早川 万年 岐阜大学教育学部・非常勤講師  
 三舟 隆之 東京医療保健大学医療保健学部・教授  
 山口 えり 広島市立大学国際学部・准教授  
 余語 琢磨 早稲田大学人間科学学術院・准教授  
 Joan R.PIGGOTT 南カリフォルニア大学・教授  
 Alessandro Poletto セントルイス・ワシントン大学・専任講師  
 古田 一史 本館・RA

### (3) ネットワーク型基幹研究プロジェクト 歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業 2022～2027年度 (研究代表者 三上 喜孝)

#### 1. 目的

本事業は、機構、東北大学及び神戸大学（以下「連携3 機関」という）が事業の中核となり、日本各地の大学や地域に設立されている歴史資料ネットワーク（以下「資料ネット」という）等と連携して、災害時におけるレスキュー活動を含む歴史文化資料の保存・継承を実施する相互支援体制を構築し、地域の歴史文化資料調査・保存研究活動を軸とした全国広域ネットワークを構築するとともに、歴史文化研究分野における教育・人材育成促進に向けて環境整備を行う。また、これまで連携3 機関が中核となって推進した高度な研究蓄積と多様なネットワークを活かして新たな地域社会の歴史文化研究を推進し、その歴史文化の基盤を、研究者だけでなく地域全体で認識する。併せて、資料保全の実践を通して地域社会の課題を抽出し、多様な資料の持続的な保存・継承・活用に向けた基盤構築を進め、歴史文化の継承と創成を担う研究・教育推進拠点を形成する。ネットワークを活用した研究成果を元に、全国の資料ネット等と連携して自治体や社会との協働・共創を推進し、地域と歴史文化の新たな関係を提起する。さらに、情報発信として展示活動を実施するとともに機構や機構内機関の情報基盤を中核としたデータ連携を促進し、新たな地域研究を担うプラットフォームを構築する。これにより、地域歴史文化の構築研究に資するとともに、資料保全の新たなあり方や、大学共同利用機関法人として、それらの地域文化基盤を研究者と地域で共有する事業へとつなげていく。さらに、研究成果の教育活動への活用を進めるとともに、地域を軸とした成果の発信を推進する。

#### 2. 今年度の研究計画

これまでに各拠点で形成した大学・資料ネット等とのネットワークを基盤とし、地域における歴史文化の基盤を、研本プロジェクトは、これまでに各拠点で形成した大学・資料ネット等とのネットワークを基盤とし、地域における歴史文化の基盤を、研究者だけでなく地域全体で再認識する。これにより、地域歴史文化の構築研究に資するとともに、大学共同利用機関法人として、資料保全のあり方や、それらの地域文化基盤を研究者と地域で共有する事業へとつなげていくものである。さらに、研究成果の教育活動への活用を進めるとともに、地域を軸とした成果の発信を推進することを目的としている。

本年度は、全国の資料ネットとの連携強化に向けて「全国史料ネット研究交流集会」を東京都・一橋大学で開催するとともに、大学等との連携・協議を進めるための「地域歴史文化大学フォーラム」をオンラインにて開催する。また、歴史文化資料をめぐる国際連携強化に向けて国際シンポジウムを開催し、資料保全に関わる国際交流を推進するとともに、資料保全をとりまく課題抽出や問題解決にむけた各種研究会・ワークショップを開催し、地域歴史文化資料の保存・継承のための基盤整備を進める。

さらに、各拠点が主体となって首都圏・北日本・西日本各地域の歴史文化資料をとりまく諸状況を協議し、大学や博物館、資料ネット等と連携した地域研究・教育基盤の構築にむけた議論を進める。

### 3. 今年度の研究経過

#### ①研究会・シンポジウム等

全国の資料ネット等と連携基盤を構築・運営するための全国資料ネット研究交流集会（2月）、資料保全を展開する大学等との連携強化をはかるための地域歴史文化大学フォーラム（3月）を実施した。また、防災関係者との連携および防災活動における本事業の役割を検討するために「防災推進国民大会2023」（10月）にポスターを出展した。さらに、6月にプロジェクト研究会を宇都宮大学で開催するとともに、首都圏大学関係者との連携協議を目的とした「歴史文化資料保全首都圏大学協議会」を3月に群馬県立女子大学にて実施した。これら研究会・シンポジウムは計5回である。

#### ②ワークショップ等

泉大津市立図書館と連携した公開講座「地域の歴史・文化再発見講座」を実施し（9月、10月、11月、12月、1月、2月、3月）、山形大学と連携して山形文化遺産防災ネットワーク研修会を共催事業として実施した（5月、7月、9月、11月、1月、3月）。また、宮崎県高鍋町（9月）およびパルテノン多摩ミュージアム（12月）と連携して自治体職員および学芸員等向けのワークショップを開催した。さらに、兵庫県立御影高等学校と連携してワークショップを開催した（10月、11月、3月）。以上のワークショップ等は計18回である。

#### ③調査活動

2019年台風19号で被災した川崎市市民ミュージアム（神奈川県川崎市）被災古文書の救出・応急処置作業を支援した。同台風で被害を受けた資料の救済活動を実施する長野市立博物館に対しても応急処置の支援・技術指導をおこなった（11月、3月）。2018年に発生した西日本豪雨により被害を受けた被災古文書等の持続的支援として広島県立文書館で技術指導をおこなった（10月）、また、2024年1月に発生した能登半島地震に対して、被災地域関係者および文化財防災センター等と連携して対応し、金沢市にて現地作業を予定する関係者向けの技術指導を行った（2月）。

#### ④教育活動

福島大学行政政策学類が実施する「コア・アクティブ科目」に協力して授業を実施し、山形大学人文社会科学部課題演習とも連携して共催授業を実施することで、各地の大学教育における資料保存・継承の実務とその意義について解説をおこなった。

#### ○研究会・シンポジウム等の開催

歴史文化NW歴博拠点「共創的資料保存の構築に向けたネットワーク研究拠点」第2回研究会（2023年6月3日於：宇都宮大学）

防災推進国民大会 2023でのポスター出展（2023年9月17日・18日 於：横浜国立大学）

第10回全国史料ネット研究交流集会 in 首都圏（2024年2月17日・18日 於：一橋大学・オンライン）

地域歴史文化大学フォーラム（2024年3月20日 於：オンライン）

歴史文化資料保全首都圏大学協議会（2023年3月24日 於：群馬県立女子大学）

### 4. 今年度の研究成果

#### 1) 研究成果の概要

プロジェクトの3年目にあたる本年度は、これまでの成果を踏まえてさらなる社会共創に向けた活動を実践し、各地での資料保存・継承に向けた課題解決および新たな研究・教育活動の展開に向けた調査を中心に進めることができた。さらに、当初の予定通り研究会やシンポジウムを実施するとともに、各大学や博物館・図書館等との

連携を通して予定を上回る規模でワークショップを開催し、地域資料の保存・継承を軸に多角的な共創的事業を進めることができている。

## 2) 主な著書・論文

- 2023年10月 『REKIHAKU特集：歴史をつなぐ』, 天野真志・吉村郊子編, 国立歴史民俗博物館, p.112  
 2024年3月 『地域歴史文化のまもりかた 災害時の救済方法とその考え方』, 天野真志・松下正和編著, 文学通信, p.295  
 2023年4月 「日本における明治維新时期研究は民主主義をどうとらえたか」, 三村昌司, 『アジア民衆史研究』28, pp.36-51  
 2023年12月 「那須地区における自然災害伝承碑の登録とその課題」, 作間亮哉, 『那須文化研究』37, pp.31-34  
 2024年3月 「応急処置を終えた被災資料の整理・保存と活用—広島県立文書館における榎林家文書への対処を例として—」, 下向井祐子, 『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』20, pp.95-108

## 3) 主な研究会・シンポジウム等

- ・第10回全国史料ネット研究交流集会 in 首都圏 (2023年1月28日・29日 於：宮日会館・オンライン, 第10回全国史料ネット研究交流集会実行委員会との共同主催, および特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表：奥村弘)との共催)

### 【2月17日】

- 木部暢子 (人間文化研究機構)「主催者挨拶」
- 久留島浩 (第10回全国史料ネット研究交流集会実行委員会)「主催者挨拶」
- 第1セッション「首都圏地域の特質と災害対策」
- 第2セッション「資料ネット活動を取りまく諸活動」

### 【2月18日】

- 第3セッション「資料保存・継承の現場」
- ポスターセッション
- 緊急報告会～2024年1月1日 能登半島地震に関わる緊急情報交換会～
- 総合討論「首都圏地域における資料保存・継承の化膿性」
- 若尾政希 (人間文化研究機構・一橋大学)「閉会挨拶」
- 奥村弘 (神戸大学)「閉会挨拶」

- ・地域歴史文化大学フォーラム「東海地域の文化財保護体制を考える」(2023年3月20日 於：オンライン, 特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(代表：奥村弘)との共催)

- 若尾政希 (人間文化研究機構)「主催者挨拶」小野塚航一「趣旨説明」
- 大塚英二 (愛知県立大学)「東海歴史資料保全ネットワークの大学での活動」
- 可児光生 (美濃加茂市民ミュージアム)「地域資料の保存と博物館協会～岐阜県博物館協会の事例～」
- 木口亮 (沼津市明治史料館)「静岡県の文化財防災体制の経緯と現状」
- 松下正和 (神戸大学)「コメント」

- ・2023年度歴史文化資料保全首都圏大学協議会「群馬県域における資料保存・継承の現在」(2023年3月24日 於：群馬県立女子大学, 群馬県立女子大学群馬学センターとの共催)

- 若尾政希 (人間文化研究機構)「開会挨拶」
- 天野真志 (国立歴史民俗博物館)「趣旨説明」
- 鈴木耕太郎 (高崎経済大学地域政策学部)「「縮小」する民俗事象—群馬県内の祇園祭・天王祭を中心に—」
- 小嶋圭 (群馬県知事部局文化財保護課)「群馬県の文化財防災のこれまでとこれから」
- 築瀬大輔 (群馬県立女子大学群馬学センター)「ぐんま史料ネットを含む地域連携における大学の役割について」
- 「総合討論」(司会・天野真志)
- 三上喜孝 (国立歴史民俗博物館)「閉会挨拶」

## 4) ワークショップ

- ・泉大津市立図書館主催「地域の歴史・文化再発見講座2022」(本事業協力 於：泉大津市立図書館) 2023年9月14日 松岡弘之 (岡山大学)「地域の歴史を未来につなぐ—役所の古い文書編—」
- 2023年10月12日 中尾真梨子 (奈良県立橿原考古学研究所)「実は身近な保存科学のお話」

- 2023年11月9日 小野塚航一(国立歴史民俗博物館)「帳簿史料からみる泉大津の荘園—法隆寺領珍南荘の世界—」
- 2023年12月14日 川邊咲子(国立歴史民俗博物館)「そもそも民具ってどんなもの?—歴史・文化を語る民具資料の可能性—」
- 2024年1月11日 川内淳史(東北大学)「明治時代のコロナ流行!?! 「ロシア風邪」とは」
- 2024年2月8日 天野真志(国立歴史民俗博物館)「淀川洪水にみる明治期の災害情報」
- 2024年3月14日 工藤航平(国立歴史民俗博物館)「源氏物語と江戸文化—古典を楽しむ江戸の人びと—」
- ・山形文化遺産防災ネットワーク2023年度研修会(本事業共催 於:山形大学)
- 2023年5月27日 松田泰典(東洋美術学校)「文化財は人が紡ぎ、人が愛し、人が守る~救済ネットワーク活動が地域遺産を次世代へ伝える~」  
講義+ディスカッション・実技
- 2023年7月8日 「下張り文書に学ぶ紙資料の救済方法」
- 2023年9月10日~12日 「下張り文書はがし&っせいり集中作業」
- 2023年11月25日 天野真志「歴史文化資料の保存と救済」+実技
- 2024年1月20日 「下張り文書に学ぶ紙資料の救済方法」
- 2024年3月22日 「下張り文書はがしとデジタル資料調査」
- ・2023年9月7日宮崎県高鍋町「災害時を想定した資料保全シミュレーションワークショップ」(本事業協力 於:たかしんホール高鍋町中央公民館)
- ・2023年12月11日~12日 パルテノン多摩ミュージアム主催「被災資料クリーニング研修会」(本事業協力 於:パルテノン多摩)

## 5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

(館外)

- 阿部 浩一 福島大学行政政策学類・教授
- 今村 直樹 熊本大学永青文庫研究センター・准教授
- 植松 暁彦 山形県埋蔵文化センター・専門調査研究員
- 岡田 靖 東京藝術大学大学院美術研究科・准教授
- 甲斐由香里 三重県総合博物館・学芸員
- 河瀬 裕子 泉大津市立図書館・館長
- 黄川田 翔 文化財防災センター・研究員
- 小関悠一郎 千葉大学教育学部・准教授
- 坂本 達彦 國學院大学栃木短期大学日本文学学科・教授
- 作間 亮哉 那須歴史探訪館・学芸員
- 佐藤 琴 山形大学附属博物館・准教授
- 佐藤 宏之 鹿児島大学法文教育学域・准教授
- 下向井祐子 広島県立文書館・文書等整理従事員
- 高山 慶子 宇都宮大学共同教育学部・准教授
- 中尾真梨子 奈良県立橿原考古学研究所・技師
- 西村慎太郎 国文学研究資料館・教授
- 東野 将伸 岡山大学社会文化科学学域・講師
- 日高 真吾 国立民族学博物館・教授
- 平野 哲也 常盤大学人間科学部・教授
- 檜皮 瑞樹 千葉大学文学部・准教授
- 堀田慎一郎 東海国立大学機構大学文書資料室・特任助教
- 堀野 周平 鹿沼市教育委員会事務局文化課・主任主事
- 三村 昌司 防衛大学校人文社会科学群・准教授
- 宮間 純一 中央大学文学部・教授
- 山口 悟史 東京大学史料編纂所・技術専門職員

(館内)

- 天野 真志 本館研究部・准教授(※歴博拠点代表)
- 小野塚航一 本館研究部・特任准教授(2022年10月より)川邊 咲子 本館研究部・特任助教

工藤 航平 本館研究部・准教授  
 久留島 浩 本館研究部・特任教授  
 後藤 真 本館研究部・准教授  
 中村 耕作 本館研究部・准教授

◎三上 喜孝 本館研究部・教授（※プロジェクト代表）

## 【機構共創先導プロジェクト】

### （４）日本関連在外資料調査研究

外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用

2022～2025年度

（研究代表者 日高 薫）

## 【基幹研究】

### （１）交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化—その成立・展開過程—

2022～2024年度

（研究代表者 鈴木 琢也）

#### 1. 目的

古代北海道に展開したオホーツク文化（5～9世紀）・擦文文化（8～12世紀）は、本州の古代国家あるいはサハリン、千島列島、大陸などの諸文化との交流のなかで様々な影響を受けながら独自の文化を形成してきた。本研究では二つの文化が周辺国家・諸文化との多様な交流、さらにはその背景となる環境や社会との関わりのなかで、どのような文化的影響を相互に与え合いながら変容をとげ、アイヌの文化へと移行していくのかということ、すなわちアイヌの文化への移行過程を交流及び環境や社会変化という視点から再構築することを目的とする。

オホーツク文化・擦文文化の実態を記す同時代の文献史料は極めて少ない。そこで、本研究では考古学的なモノ資料の分析をふまえて、人・モノの移動や交流の実態を把握し、文献史料の検討と合わせてその実像を再構築する。具体的には、（１）本州からオホーツク文化・擦文文化に搬入された鉄製品、須恵器、鈿帯金具、銭貨等、その対価として本州にもたらされた毛皮類、海産物等に関する考古資料・文献史料の分析・検討をもとに、本州の古代国家・東北地方北部と、オホーツク文化・擦文文化との相互交流の様相を明らかにする。（２）北からの視点としてサハリンや大陸などからオホーツク文化・擦文文化にもたらされた青銅製品、軟玉、ガラス玉等を検討し、文献史料の検討も合わせて、北方諸文化との交流及び隋・唐、渤海などの大陸諸国家が両文化に及ぼした影響を明らかにする。そして、このような交流の展開と、オホーツク文化・擦文文化における集落動態や文化要素の変化などとの関係を検討し、多様な交流に促された二つの文化の変容を追究する。（３）考古学と文献史学からの検討を両輪としつつ、アイヌの文化についての研究視点を加え、アイヌの文化のなかにオホーツク文化・擦文文化の交流のあり方や文化要素などがどのように受け継がれたのかということを追跡することによりアイヌの文化への移行過程について検討を加える。また、（４）年代研究や環境復元に酸素同位体比年輪年代法を導入し、その検討の精度を高めるとともに、その研究基盤を構築し、環境がオホーツク文化・擦文文化の社会や交流、文化変容、アイヌの文化への移行過程に及ぼした影響を分析する。

このように、本研究ではオホーツク文化・擦文文化をめぐる南・北交流の様相と、その交流を契機とした社会変化や文化変容の実態を学際的な研究手法により分析し、アイヌの文化への移行過程を追跡する。そして、本州から大陸に及ぶ広域的な北東アジア交流史のなかにオホーツク文化・擦文文化の歴史的な展開、アイヌの文化への移行過程を位置づけることを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

本プロジェクトでは考古学、文献史学、環境の3分野から研究を実施し、年3～4回の研究会でその研究成果の



共有を図り、それらを総合化して研究を進める。考古学では北海道自治体の研究者をゲストスピーカーとして適宜加える。

- ① 擦文文化に搬入された本州産・大陸産製品の調査・集成・分析作業を実施する。
- ② アイヌの遺跡に搬入された中世初期の本州産・大陸産製品の調査・集成・分析を実施し、オホーツク文化・擦文文化の交流の様相やアイヌの文化要素（伝統的アイヌ文化）との比較検討を行う。
- ③ 『通典』边防・流鬼、『新唐書』流鬼伝など中国の史料に記された「流鬼」（オホーツク文化集団）に関する記事や、『旧唐書』靺鞨伝・黒水靺鞨伝、『新唐書』黒水靺鞨伝・渤海伝、『宋会要』、『遼史』などに記された北方諸集団に関わる記事を整理し、オホーツク文化とサハリン・大陸との交流の様相を検討する。
- ④ 北海道内の東西の差異といった地域的な環境変化等を復元するため、道内の遺跡出土木材から新たにデータを獲得して年輪酸素同位体比分析を実施するとともに研究の基盤を構築する。

### 3. 今年度の研究経過

令和5年度は巡検を含めた研究会を4回開催した。また、関連資料調査は4回実施した。ほぼ今年度計画の①～④に沿うかたちの研究報告・調査を実施したが、とくに遺跡動態と生業、動・植物利用の変化からみたオホーツク文化、擦文文化の社会の変化および地域間交流・気候環境との関係に重点をおいた。また、アイヌとのかかわりで「アイヌ史」という新しい視点も見えてきたので、それらについても目配りした。

第1回研究会 2023年6月24日 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

澤井 玄 「擦文文化の動態—遺跡立地の変化からみる擦文文化の生業—」

福井 淳一 「動物遺存体や骨角器等からみたオホーツク文化、擦文文化における生業や食生活についての研究現状と課題」

國木田 大 「土器付着炭化物の同位体分析からみたオホーツク文化、擦文文化の動・植物利用について」

第2回研究会 2023年8月24日 北海道博物館

鈴木 琢也 「北の縄文世界と国宝展の内容—縄文文化とオホーツク文化・擦文文化の比較—」

・北海道・北東北の縄文遺跡群およびオホーツク文化・擦文文化の出土資料の調査

第3回研究会 2023年11月24日～25日 おいらせ阿光防古墳館

小谷地 肇 「末期古墳からみた北東北太平洋側と北海道との太平洋ルートによる交流」

宇部 則保 「北東北太平洋側（八戸地域）の古代集落・土器の成立と展開」

・おいらせ阿光坊古墳館、八戸市博物館、八戸市是川縄文館において擦文文化の関連資料の調査

・阿光坊古墳群、中野平遺跡（おいらせ町）、丹後平古墳群、鹿島沢古墳群（八戸市）の巡検

第4回研究会 2024年3月30日 北海道博物館

榑田 朋広 「穀物利用からみた擦文文化の交易と地域間交流」

鈴木 琢也 「これまでの共同研究の中間総括について」

第1回資料調査 2023年9月20日～23日

「奥尻島におけるオホーツク文化・擦文文化の遺跡立地と資料調査」

・奥尻津波館・稲穂歴史民俗資料展示室・海洋研修センターにおいてオホーツク文化・擦文文化の資料調査

・青苗砂丘遺跡・米岡5遺跡・宮津遺跡・奥尻空港遺跡・ワサビ谷地左岸遺跡・青苗遺跡・青苗B遺跡の巡検

第2回資料調査 2023年10月12日

「国立アイヌ民族博物館における「アイヌ史」にかかわる資料調査と意見交換」

・国立アイヌ民族博物館で開催された特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ史展—19世紀までの軌跡—」の展示を通しての資料調査

・国立アイヌ民族博物館においてアイヌ史の歴史叙述・時代区分に関わる意見交換・検討

第3回資料調査 2024年2月23日～24日

「東北地方南部における古代国家の視点からみた北方地域との交流に関する資料調査」

・東北歴史博物館で開催された「古代城柵官衙遺跡検討会」に参加し、近年の古代城柵官衙遺跡の調査データの収集と、北方地域との交流についての資料調査

第4回資料調査 2024年3月5日

「伝統的アイヌ文化の継承、アイヌ・アートに関わる資料調査」

・北海道立近代美術館で開催された特別展「AINU ART—モレウのうた—」での資料調査。

・伝統的なアイヌ文化が、現代にどのように継承され、また変化しつつあるのかを具体的に資料調査

#### 4. 今年度の研究成果

今年度の第1回研究会では、遺跡動態、動物遺存体・骨角器、土器付着炭化物等からオホーツク文化・擦文文化の生業や食生活を検討した。擦文文化の遺跡動態・立地と生業の関わりでは、7～9世紀に石狩低地帯、9世紀後半～10世紀に道北部・石狩川中流域に進出しサケ類漁と穀物栽培を行い、11世紀に道東部へ進出しサケ類漁と狩猟へと生業が変化したこと、道東部進出はサケを求める陸獣・猛禽類の捕獲（毛皮類・羽の生産）も目指した可能性を提起した。また、貝塚・魚骨層等出土の動物遺存体の検討から、オホーツク文化（5～9世紀）とトビニタイ文化・擦文文化（10世紀以降）では、魚類の利用が海棲のニシンからサケへと変化したこと、後者では沿岸漁の道具である大型骨角製釣針・大型石錘が消滅することを確認し、10世紀頃を境に沿岸漁が衰退し、生業の様相が変化したことを示した。土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比分析では、オホーツク文化は海生生物の利用が主であること、擦文文化は海生生物が主であるが、札幌市内と常呂川河口でキビ等のC4植物利用の影響が認められることを明らかにした。そして、遺跡動態と生業、動・植物利用等の変化は、寒冷から温暖へという気候変動と関係する可能性を提起した（國木田 2023, 澤井 2023, 福井 2023）。ただ、酸素同位体比年輪年代法等による古気候変動の研究とは、より慎重な比較検討が課題として残った。

第2回研究会では、北海道の縄文文化とオホーツク文化・擦文文化の社会様相や交流のあり方を比較検討した。北海道博物館特別展「北の縄文世界と国宝」の内容に即して、北海道・北東北の縄文遺跡群の気候変動にともなう定住の開始・発展・成熟という社会変化の過程や交流の様相を確認し、その内容をふまえて、縄文文化～擦文文化にかけて、社会状況や気候変動等の影響を受けて、本州との交流のルートが時期ごとに変遷することや、交流の様相に強弱が認められることなどについて幅広い時間軸のなかで議論を行うことができた（鈴木 ほか2023）。

第3回研究会では、北東北太平洋側と北海道擦文文化の末期古墳、集落、土器等を比較し、主に7～8世紀の交流の様相を検討した。北東北太平洋側と擦文文化の末期古墳の構造や特徴は類似しているが、主体部や木棺の構造・特徴に一部違いがみられ、後者には副葬品に馬具類がないことなど差異も認められることを確認した。さらに擦文文化の末期古墳の立地は、北上川流域の末期古墳に類似していることを確認した。また、北海道の擦文集落は、北東北の宇部編年3期（7世紀後葉～8世紀前葉）と同時期に展開することを確認し、両地域の土器にはヘラミガキ調整の卓越、沈線文など類似した要素が多く認められることを明らかにした。この時期には北東北太平洋側に関東系の短煙道カマド、地下式横穴墓、関東系土師器などがもたらされて南からの影響が強くなるため、その影響拡大にともない、関東など→北東北→北海道というように文化的な影響が広がった可能性を提起した（小谷地 2023）。

第4回研究会では、擦文文化の穀物利用、種実貯蔵痕跡等から地域間交流を検討した。穀物利用では擦文文化はキビ、裸性短粒オオムギ（北方系）等が主体、青森はイネ、アワ等が主体で地域差があることを確認した。擦文文化でのキビの卓越は、裸性短粒オオムギ（北方系）の伝播と連動した現象か、石狩低地帯～道東部の地域間交流によるものかという課題も提示できた。道東部の穀物はそこで栽培されたものか、交流によりもたらされたものかも課題となった。また、青森・北海道で10世紀以降に種実貯蔵痕跡が増加することを明らかにした。青森では農業生産の向上や社会的緊張と関係して貯蔵場所を移動可能なように小規模分散化し、北海道（擦文文化）では青森との交流を通じて、その貯蔵技術や貯蔵具と考えられる壺形土器を共有した可能性を提起した（榊田 2023・2024）。

今年度は、遺跡動態と生業、動・植物利用等の変化という側面から気候変動との関係についても検討したが、酸素同位体比年輪年代法による気候変動研究との比較検討が課題として残った。また、オホーツク文化、擦文文化にかかわる個々の資料についての調査・研究の深化に重きをおいたので、文献史学からの研究をあまり進めることができなかつた。次年度の課題であろう。

なお、今年度は本研究の成果の一部を、本館総合展示第1展示室の特集展示「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」で公開した（東京大学文学部未来社会協創推進本部登録プログラム、東京大学文学部「人文学における国際的・社会連携」の推進プログラムとして、大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設と本館との連携展示）。東京大学常呂実習施設と本館の所蔵資料を展示して、本州において、ほとんど知られることのないオホーツク文化と擦文文化を広く来館者に知ってもらい、北海道の歴史を再認識する場をつくることができた（林部・熊木ほか 2023）。次年度以降は、特集展示の資料を使って総合展示にオホーツク文化、擦文文化を組み込む。

具体的な成果物は下記のとおり。

國木田大 2023「土器による調理—土器付着物からの分析事例—」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）

熊木俊朗 2023「オホーツク文化の集落と社会」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）

熊木俊朗 2024「オホーツク文化の変容と終末」『地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡Ⅳ』（北海道文化遺産活用活性化実行委員会）

- 熊木俊朗・榊田 朋広ほか 2024 『オホーツクの古代文化』（新泉社）
- 小谷地肇 2023 「青森県における平安時代墓制の概要」『北東北の平安時代墓制』（北東北三県考古学会合同公開シンポジウム）
- 榊田朋広 2023 「北海道における植物利用研究の現状」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）
- 榊田朋広 2024 「擦文文化後半期壺形土器の研究（中間報告）」『第23回北アジア調査研究報告会 発表要旨』
- 澤井 玄 2023 「擦文社会の動態—遺跡立地の変化からみる擦文文化の生業—」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）
- 鈴木琢也 2023 「本州との交流」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）
- 鈴木琢也ほか 2023 『北の縄文世界と国宝』（北海道新聞社・北海道博物館）
- 鈴木琢也 2024 「交流から探るオホーツク文化・擦文文化とアイヌの文化」『REKIHAKU』011（国立歴史民俗博物館）
- 鈴木琢也ほか 2024 「ポータブル複合X線分析による須恵器の胎土分析—北海道および秋田県資料の比較検討—」『法政史学』101号
- 高島孝宗 2023 「目梨泊遺跡出土刀剣の意義—流水よせる北溟の「金の刀」—」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）
- 林部 均 2023 「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」『国立歴史民俗博物館友の会ニュース』229
- 林部 均 2023 『北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—』国立歴史民俗博物館総合展示第1展示特集展示リーフレット
- 林部 均・熊木 俊朗ほか 2023 『北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—』（東京大学大学院人文社会科学系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設、国立歴史民俗博物館）
- 福井淳一 2023 「北海道における動物利用の特質」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）
- 蓑島栄紀 2023 「「アイヌ史」の時代区分に関する基礎的研究」『考古学ジャーナル』782（ニューサイエンス社）
- 蓑島栄紀 2023 「アイヌ史の時代区分」『季刊考古学・別冊42』（雄山閣）
- 蓑島栄紀 2024 「「アイヌ文化期」概念の形成と展開—近代日本の学知と「アイヌ史」」『〈学知史〉から近現代を問いなおす』（有志舎）

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎鈴木 琢也 北海道博物館・学芸主幹
- 榊田 朋広 札幌市埋蔵文化財センター・文化財調査員
- 笹田 朋孝 愛媛大学法文学部・准教授
- 高島 孝宗 枝幸町オホーツクミュージアムえさし・館長
- 熊木 俊朗 東京大学大学院人文社会科学系研究科・教授
- 白杵 勲 札幌学院大学人文学部・教授
- 伊藤 武士 秋田市立佐竹史料館・事務長
- 小谷地 肇 おいらせ阿光防古墳館・館長
- 亀丸由紀子 北海道博物館・学芸員
- 蓑島 栄紀 北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授
- 手塚 薫 北海学園大学人文学部・教授
- 林部 均 本館研究部・教授
- 内田 順子 本館研究部・教授
- 三上 喜孝 本館研究部・教授
- 箱崎 真隆 本館研究部・准教授

## （2）東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像 2022～2024年度 （研究代表者 佐々木 憲一）

### 1. 目的

本研究は、関東における古墳時代開始の複雑なプロセスに、地域間交流を含めた様々な観点から実証的に迫り、統合的な歴史像を再構築することを目的とする。日本考古学においては、墳丘、埋葬施設、埴輪、集落、土器、鉄製農工具などが個別に研究される傾向が強く、全体的な古墳時代史像になかなか繋がっていない印象を受ける。この基幹研究では、古墳時代開始期をキーワードに、違った考古資料や理論的テーマを専門とする研究者を集め、成果を突き合わせて、一つの大きなモデル構築を目指す。

本研究では、畿内中心史観から脱却し、在地社会の立場からこの課題を検討することをめざす。この立場は本館展示第1室リニューアル・テーマVにおいて、地域の「王」が人びととの相互関係をもとに在地社会を描出しているところであり、本研究ではさらにそれを深化させ、関東地方を対象にその成形過程を主体的に復元する。

そして、東アジアも射程に含め、畿内以上に複雑に展開したと想定される関東の地域間交流のパターンをとらえ、関東の地域社会の歴史的特質を探り、実証的なアプローチを展開する。様々な考古資料、理論、地域を統合することで、関東からみた3～4世紀古墳時代史の再構築を目指す。

## 2. 今年度の研究計画

本研究では、これまで各県（小地域）ごとに個別に叙述されてきた関東の古墳出現プロセスを統合し、総合的に古墳時代社会の形成過程を復元する。広域に適応可能な精度の高い時間軸の設定と、それをもとにした各地の社会動態を対比参照する検討を両輪として、研究を推進してゆく。

精度の高い時間軸の設け方については、具体系に二つの方法論を以て進める。第一に、出現期古墳の編年の併行関係や、古墳出土の埴輪と集落出土の土器の編年を統合することである。第二に、光ルミネッセンス年代測定を導入し、精度の高い年代観に基づいた比較研究を展開することである。

第一の取組みに関しては、分担者が各地で基準資料を検討すること、調査後に十分な整理が果たされていない基準資料を対象にした基礎情報整理の推進を以て実施する。第二の取組みに関しては、年代の指標となる基準資料を対象に、光ルミネッセンス年代測定を主導する酒井祥子（カリフォルニア州立大学ロングビーチ校）が分析を行う予定である。

各地の社会動態を整理し、それを統合した関東地方の古墳時代社会形成とその特質の検討については、年に数次開催する研究会を通じて議論の構築と集約を図る。

## 3. 今年度の研究経過

- 第1回研究会（2023年7月8日 於明治大学）
  - 佐々木憲一 「常陸の古墳時代前期について」
  - 大熊 久貴 「五領遺跡・勅使塚古墳の資料整理状況について」
  - 五領遺跡・勅使塚古墳出土資料の現地検討
- 第2回研究会（2023年9月2日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）
  - 研究分担の進捗報告と総合討議
  - 西川 修一 「南関東の古墳時代の集団関係—考古資料に即して考える—」
  - 松木 武彦 「人類史・世界史事象としての「古墳」の出現」
- 第3回研究会（2023年10月21日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）
  - 古屋 紀之 「南関東の弥生後期～終末期の様相と出現期古墳の成立」
  - 深澤 敦仁 「上毛野の西東比較」
  - 北條 芳隆 「大廓 エクスパンション2023」
- 第4回研究会（2023年12月3日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）
  - 日高 慎 「多摩川流域前期古墳の築造立地と渡河地点・船着き場—古墳はなぜそこで造られたのか—」
  - 青木 敬 「関東地方における古墳の出現と歴史的意義—墳丘の分析を中心として—」

## 4. 今年度の研究成果

- ・五領遺跡出土資料の検討：古墳時代前期の北武蔵における標式資料となる五領遺跡出土資料について、佐々木・福田を中心に遺物の基礎情報の整理を実施した。五領遺跡には、日本各地の系統の土器が認められるか、非在地の土器を模倣、在地製作されたことが改めて確認された。また、今回の整理において、明治大学が調査したエリアには東海系統の土器がほとんど見られないことが判明しつつある。
- ・勅使塚古墳出土資料の検討：五領遺跡出土資料の整理と平行して、明治大学では勅使塚古墳出土土器の整理作業を進めており、その検討において駿河・伊豆の「大廓式」超大型壺の模倣品、「大廓系土器」の存在が判明した。「大廓系土器」の東国における広域分布に関する近年の研究に寄与することが予見される。
- ・山梨県中央市二子塚古墳の出土遺物の検討と炭化物の年代測定
- ・論点の集約：古墳出現のプロセスについては、研究会で活発な議論を継続しているが、地域を超えた現象を説明するモデル構築には至っていない。東国においては前方後方墳が前方後円墳に先だって出現したとこれまで考えられてきたが、常陸地域においては、常陸梵天山古墳の近年の発掘調査が示唆するように、大型前方後円墳が常

陸南部を差し置いて、まず常陸北部に出現したようで、従来の仮説の修正を迫れそうである。

#### 5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

- 青木 敬 國學院大學文学部・教授  
 上野 祥史 本館研究部・准教授  
 内山 敏行 とちぎ未来づくり財団・調査課副主幹  
 酒井 祥子 カリフォルニア州立大学ロングビーチ校  
 ◎佐々木憲一 明治大学文学部・教授  
 城倉 正祥 早稲田大学文学学術院・教授  
 白井久美子 千葉県立房総のむら・主任上席研究員  
 高田 貫太 本館研究部・准教授  
 滝沢 誠 筑波大学人文社会系・准教授  
 田中 裕 茨城大学人文社会科学部・教授  
 西川 修一 興南高等学校・非常勤講師  
 日高 慎 東京学芸大学教育学部・教授  
 深澤 敦仁 群馬県立歴史博物館・学芸係長  
 福田 聖 埼玉県埋蔵文化財調査事業団・調査部副部長  
 古屋 紀之 横浜市埋蔵文化財センター・所長  
 北條 芳隆 東海大学文学部・教授  
 ○松木 武彦 本館研究部・教授  
 若狭 徹 明治大学文学部・専任准教授  
 (五十音順)

### (3) 先史から近代における日朝交流史像の再構築—航海・港市・交流に生きた人びとの視点から— 2022～2024年度 (研究代表者 松田 睦彦)

#### 1. 目的

近年、歴史認識を端緒とした日本と韓国との政治的対立が激化している。そこでの議論は、近代以降の日本による朝鮮半島の植民地支配を、日本列島と朝鮮半島との史的関係性を象徴的に示すものとみなし、国家あるいは民族を単位とした両者の葛藤が継続的に存在してきたかのような印象を与えるものである。しかし、これまで歴史学が明らかにしてきた列島と半島との関係は、そうした単純なものではない。

たとえば、弥生時代に入ると朝鮮半島各地から渡ってきた人びとによって九州北部に水田稲作や金属器が伝えられ、交流が本格化する。古墳時代に倭や古代朝鮮の諸社会（高句麗、新羅、百濟、馬韓等）が成立すると海上交通に長けた集団が交流を担い、5世紀には朝鮮半島西・南海岸で「倭系古墳」が営まれる。また、7世紀末からの日羅間の外交を契機に、9世紀には日本海沿岸に到着した新羅商人の自律的な動きが活発化する。古代末から中世初頭には高麗王朝下の朝鮮半島と九州北部・壱岐・対馬の地方官衙との交流に加えて私的な交易も行われており、これが「前期倭寇」へと接続する。14世紀に朝鮮王朝が成立すると倭寇問題は収束に向かうが、日本列島から朝鮮半島を目指す人が増加する。近世には、外国との私的な往来が禁止されるが、密貿易や密漁は行われていたと考えられ、近代に入ると外交交渉と軌を一にしながら、あるいはそれに先駆けて漁民等が朝鮮半島を目指すことになる。

すなわち、国家の成立以前から多くの人びとが対馬海峡（朝鮮海峡）を渡っており、国家の成立以降も、国家の枠にとらわれない人びと、あるいは、国家の動きと連動しながら独自の交流を試みた人びとが多く存在したことが明らかとなっているのである。もちろん、国家による公式な交流や侵略等の葛藤が日本列島と朝鮮半島、それぞれに与えた文化的・社会的影響は大きい。ただ、その陰でこれまで等閑視されてきた名もなき人びとによる交流の影響には計り知れないものがある。本研究が目指すのはこうした人びとによって紡がれた日朝交流の歴史であり、その通史的な把握である。

以上の観点から、本研究では弥生時代から近代に至るまでの日本列島と朝鮮半島との交流の歴史を、これまで考古学・文献史学・民俗学等の個別分野において積みあげられてきた研究成果の接合を図ることによって、通史的に明らかにすることを目的とする。とくに、本研究では国家や民族を単位とした交流ではなく、みずから海を渡った

人びと、あるいは、そうした人びとと直接交流を持った人びとを対象とし、通史的観点からその交流の実態を描き出す。具体的には、日本列島と朝鮮半島との間を往来した人びとの交流の目的、造船や航海の技術、航路や寄港地、やり取りされた文化や技術について、時代ごとの変動や持続の様相を強く意識しながら通史的に明らかにする。

従来、日朝交流史に関する研究の成果は、時代や方法論で区切られた個別分野で発表され、その中で共有されてきたため、日本列島と朝鮮半島それぞれに生きた人びとの交流が通史的に描き出され、検討されることはなかった。本研究は、先史から近現代までを対象とする研究者を多く擁する歴博の特徴を活かすと同時に、これまで歴博が築いてきた韓国の研究機関や研究者とのネットワークを最大限活用することで、これまで細分化されていた日朝関係史を接合して総合的に把握することで、新たな日朝関係史研究のあり方を学界および社会に提示することを目指している。また、従来の日韓の歴史学における時代区分にとらわれることなく、日朝交流史独自の時代区分の設定も試みる。

## 2. 今年度の研究計画

各自が巨済島および鎮海湾沿岸を共通フィールドとした調査・研究を進めると同時に、個別フィールドにおける研究を進める。研究会を年3回開催し（日本1回、韓国1回、オンライン1回）、巡見も行う。

## 3. 今年度の研究経過

2023年8月27日から30日までの4日間の日程で、韓国全羅南道における現地調査を実施した。27日は光州広域市に所在する大韓文化財研究院において研究打ち合わせを行なった。28日は羅州市の旧市街地において近代の日本人住居等を見学し、29日は木浦市の近代歴史館や国立海洋文化財研究所の見学を実施した。この現地調査には日本人メンバー5人、韓国人メンバー6人の計11人が参加した。

2024年2月3日には、歴博において研究会を開催した。藤尾が「渡来系弥生人の出自」、高田が「古墳時代に海を渡った倭人たち」と題して発表した。

また、2月24日、25日の日程で佐賀県唐津市、糸島市および福岡県福岡市における現地調査を実施した。24日は末盧館、新町遺跡展示館、伊都国歴史博物館等を、25日はやよいの風公園、福岡市博物館、福岡市埋蔵文化財センター等を調査した。この現地調査には日本人メンバー5人、韓国人メンバー3人が参加した。

なお、個人調査としては、他経費による調査ではあるが、韓国全羅南道麗水市の巨文島および草島における近代日本人漁民に関する資料調査を6月に松田が、羅州市の柳谷里前方後円墳の調査および海南郡の倭型古墳、外島1・2号墳の調査を7、8月に高田が実施した。

## 4. 今年度の研究成果

今年度はこれまでに、5世紀から6世紀にかけての榮山江流域や海南半島における倭との人の往来をあとづける古墳の調査が実施された。古墳を専門とするメンバーにとっては、最新の発掘である柳谷里前方後円墳を現地で確認できたことの意義が大きかった一方で、専門分野を異にするメンバーにとっては、今から1500年前の日朝交流を実感することのできる貴重な機会となった。

また、木浦および、榮山江をとおして木浦とつながる羅州では、19世紀末の木浦の開港で多くの日本人が居留することになった様相を、建築物や博物館展示をとおして確認したが、古墳が造営された時代と近代とで日本列島から来た人々の活動地域が共通することについて、議論が交わされた。

北部九州の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての朝鮮半島とのつながりを示す遺跡および出土した遺物を展示する博物館等を調査することで、先史時代における日朝間の濃厚な関係を確認することができた。

昨年度、韓国慶尚南道の巨済島において現地調査を実施したが、その成果を含んだ報告を7月1日・2日に國學院大學で開催された中世学研究会第5回シンポジウム「船の中世—沈没船・積荷・人」において松田がおこなった。報告題目は「民俗学から見た船・人・信仰—近代における朝鮮海出漁を例として」である。

## 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

イ・チャンヒ	釜山大学校・副教授
イ・ヨンチョル	大韓文化財研究院・院長
オ・チャンヒョン	木浦大学校・助教授
キム・ジョンスン	羅州市文化財チーム長
ゴン・ヒョクチュ	民族文化遺産研究院・院長
荒木 和憲	九州大学・准教授

久留島 浩	本館研究部・特任教授
○高田 貫太	本館研究部・教授
藤尾慎一郎	本館研究部・教授
◎松田 陸彦	本館研究部・准教授
三上 喜孝	本館研究部・教授
山下 優介	本館研究部・助教

#### (4) 高齢多死社会における生前から死後の移行に関する統合的研究 2023~2025年度 (研究代表者 山田 慎也)

##### 1. 目的

本研究は、高齢多死社会に突入した現代において、老いを含めた生前から死後までの人々の営為を、統合的に捉えるために学際的観点から検討し、現代日本社会の生と死の観念と諸相を明らかにすることを目的とする。

日本では世界の中で最も高齢化が進行し、今後死亡人口は増大していくことが予測され、2040年には年間168万人が死亡する多死社会を迎えることとなる。同時に人口減少も進んでいき、高齢者の割合は今後もさらに増加していくことも予測されている。また生涯未婚率の上昇や家族観の変化によって、単身世帯が増加し、引き取り手のない死者の増大など、従来の高齢者と死を巡る文化は大きな変容を余儀なくされている。

こうした生前から死後の過程において、老年期となると介護者や福祉行政などの対応がなされ、さらに病気や障害となると医療者による治療が行われ、多数の人々は病院で死亡している。死亡後から葬儀まではおもに葬儀業者が対応し、納骨などは墓石霊園業者に依頼することとなる。このようにあらゆる過程において専門家への依存度が高くなっているのが、現代社会の特徴である。

そこで第1に、生前から死後の過程において専門家への依存度が高まった道程を明らかにし、その要因と包含する課題について歴史的に遡りつつ分析を行う。ここでは、専門性の深化と、家族や地域といった従来のコミュニティとの関係の変化に留意しつつ、その変容の実態を明らかにする。特に死にゆく過程については、従来ガン患者や小児患者などの研究に限定されており、高齢者の病院・施設死という最もメジャーな死を対象とすることで、その全体像を把握することが可能となる。

第2に、それぞれの過程における専門家の介在によって、より高度なケアなどの実践がなされるようになる一方、前後の段階の専門家との連携は必ずしも十分ではなく、時には分断が生じている。特に生前の段階では高齢者は地域包括ケアシステムにより介護や福祉、医療の連携は基本的になされるようになってきたがそれでも十分とはいえない。まして死後の段階では、基本的に近親者を通して葬儀業者の対応となり、例外的に身寄りのない場合に行政が関与する。しかし単身世帯に増加により、生前の介護の段階から死後の諸事も見据えた対応が必要となってきたが、現実には大きく分断されており、生前と死後を架橋する必要が実際には生じている。このような状況は研究分野においても同様で、生前は社会福祉学や医学、人類学、社会学等が、また死後は民俗学や宗教学、文化人類学などの葬送研究であり、相互の連携は十分ではない。よって統合的な検討が社会の実践においても、研究においても必要である。

第3には、このような架橋を行う新たな概念の構築である。今後の社会状況に合わせ、生前から死後への移行についての連続的、統合的視点が必要である。本研究では健康年齢がおり、介護が必要となった時期から死に至り葬儀、埋葬、納骨の期間だけでなく、その後の供養や追悼までの、生前から死後の移行プロセスの包括的な概念の構築によって連携した対応が可能となり、安らかに老いと死を迎え、残された関係者も安心してその人を見送り、追悼していくことができる。これにより現代社会に生者と死者の新たな共同性を構築していくものである。

##### 2. 今年度の研究計画

本研究の特徴は、生前から死後の過程について、民俗学、文化人類学、社会学、宗教学、歴史学、考古学、医学、死生学等、学際的視点から統合的にとらえ、専門化によって分断された人生の過程を連続的に把握することである。

1年目 共同研究員が本研究の目的を共有化するため現状の実態の把握を行う。とくに高齢化と死にゆく過程についての生前の段階と、臨終から葬儀、埋葬、供養という死後の段階について分担を行う。必要に応じて研究者や専門家をゲストスピーカーとして招き実態の把握に努める。

生前：福祉・介護（松繁・浮ヶ谷・小谷・吉村）・死にゆく過程と医療（田代・井口）

死後：葬制・墓制（山田・関沢・土居・朽木・間芝）、供養と死の認識（徳野・上野・内田）

- ① 生前：現行の介護の基盤となる地域包括ケアシステムの成立とそれ以前の老人福祉制度，病院での終末期医療と死の自己決定の成立など
- ② 死後：病院施設等での死亡，葬儀の執行と葬祭業，家族墓と新たな葬法，永代供養と死者の追悼，死の認識と記憶など

### 3. 今年度の研究経過

今年度は3回の研究会を行った。第1回目は2023年6月3～4日に開催した。まず代表の山田から共同研究の趣旨を説明し、本研究の方向性について提示し、議論を行った。また各メンバーから、自己の研究について自己紹介を兼ねて行い、また本プロジェクトにおける研究の課題について検討を行った。

第2回目は2023年12月16～17日に開催した。ここでは、死にゆく過程を研究している田代志門氏が研究史を含めて報告を行った。また生前から死後の過程を検討する上で、自らの夫をその意思を尊重しながら看取り、またその想いを反映した葬送を行い、その体験を著書にした終活ジャーナリストでライフ・ターミナル・ネットワーク代表の金子稚子氏をゲストスピーカーに招いて報告を受け議論を行った。

第3回目は2024年2月25日に開催した。この日は日本初の公園墓地として開設された東京都の多磨霊園のフィールドワークを行った。そして多磨霊園脇に茶亭石材店として開業し、日本有数の墓石霊園業者となったメモリアルアートの大野屋、創業店舗である多磨支店において、社長の奥田実氏はじめ役員の方から、霊園における石材店の業務についてお話を伺った。さらに問芝志保氏からは多磨霊園について、また大場あや氏からは無縁概念の変遷について報告がなされ、議論が行われた。

### 4. 今年度の研究成果

今年度は研究会の初年度と言うことで、まずはいままで研究においても実践においても分断されてきた、看取りの関する研究と死後の葬送墓制に関する研究の架橋を行うために、双方の分野に関する理解を深めることに留意した。とくに、第2回では看取りから葬送までに過程を体験した金子氏の報告はその一貫性の必要性をあらためて認識した。そして看取り研究の研究史の確認もできた。さらに多磨霊園のフィールドワークにおいては、霊園の歴史を実際の施設と共に把握できただけでなく、霊園墓石業界について、業界大手の実践について何うことができたのは、研究上も大きな寄与となるものであった。

### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- 井口真紀子 祐ホームクリニック大崎・院長
- 浮ヶ谷幸代 相模女子大学・名誉教授
- 朽木 量 千葉商科大学政策情報学部・教授
- 小谷みどり シニア生活文化研究所・所長
- 田代 志門 東北大学大学院文学研究科・准教授
- 問芝 志保 東北大学大学院文学研究科・准教授
- 土居 浩 ものづくり大学教養教育センター・教授
- 徳野 崇行 駒澤大学仏教学部・准教授
- 松繁 卓哉 国立保健科学医療院医療・福祉サービス研究部・首席主任研究官
- 上野 祥史 本館研究部・准教授
- 内田 順子 本館研究部・教授
- 関沢まゆみ 本館研究部・教授
- 吉村 郊子 本館研究部・助教
- ◎山田 慎也 本館研究部・教授

## （5）死者への行為が形成する認識と社会変容 2023～2025年度 （研究代表者 上野 祥史）

### 1. 目的

死の扱いは、人間とはいかなる存在かという認知が反映されている。生と死が重層するなかで社会は形成され存続するため、死は社会を定義づける主要素だといえる。神への供犠や故人の神格化が象徴するように、死のとら



え方や人間のとらえ方は、死者とのかかわり—行為の実践—のなかで顕在化した。

死者とのかかわりは、葬送に限定してとらえることが多いものの、特定の時間には限定されない。行為（儀礼）や物証（遺品）を通じて、不可視な死者を実体化（物質化）させることも、死者とのかかわりの一つである。系譜・系統が権威を正統化する装置として機能したように、死者とのかかわりが生者の関係を新たに規定し、新しい社会を決定づけることは、家族から地域社会や国家に至るまでさまざまなレベルの共同体にみえている。死者とのかかわりが、社会の検討に重要な視点・論点を提供することは、言を俟たない。

死者をめぐる行為は、思想や信仰の体現・具現として理解される傾向が強いが、観念を先行させた理解のみでは不十分である。行為の実践や反復が認知や思考を形成し、その認知や思考が行為を決定づけるように、行為と観念の相互作用を動的にとらえる実践論の視点に立つことで、死者へのかかわりは社会を分析する有効な指標となる。

本研究では、死者をめぐる行為の実践に主眼を置き、神霊など不可視な存在の実体化（物質化）との比較を通して、認知や思考の形成と行為の実践・反復との関係を検討する。研究分野や対象時空間を横断した議論を展開し、人類史研究に有益な検討視点の確立を目指す。それは、長子相続や直系継承を自明の帰結とみるような、歴史のなかの変化を不可逆な発展や進化にとらえる現代的思考への人類学研究からの提言ともなる。

## 2. 今年度の研究計画

本研究では、日本列島を主たる対象としつつ、中国やラテンアメリカなど列島外を対照して、死者へのかかわりを実践論的にとらえる。多様な時空間での事例を対比することで、死者への行為の実践と認知の形成が社会の形成や維持・変革に果たした役割・作用を検討する。研究は、「日本先史（中村・松木・上野）」「日本歴史（仁藤・小倉・吉澤）」「中国古代中世（上野・八木）」「ラテンアメリカ（嘉幡・松本）」「現代社会（川村・山田）」の5つのカテゴリーで構成するが、以下を共通項目として分析と検討を進めてゆく。

死者をめぐる行為の分析から、「人をどのような存在と認識しているか」「死者が生者の関係をどう規定・媒介するのか」へと考察を進め、社会を生者と死者の複合体として評価し、それぞれの社会の特質を解明する。変化のプロセスに注目し、社会を動態でとらえることで、課題名に掲げた「社会変容」にも応える。

3年の研究期間は、前半と後半に二分して研究を推進する。前半では、上記の共通項目に沿い既存の議論や成果を整理し、共通の論点を形成する。後半では、前半に共有した論点をもとに、新たな分析の実践と成果の集約に取り組むことにする。今年度は第1年度にあたり、テーマに即した議論の整理や論点の集約を図ることに目的を置いた。

## 3. 今年度の研究経過

○第1回研究会（2023年5月13日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）

上野 祥史 「死者への行為が形成する認識と社会変容：研究視座と分担課題」  
松木 武彦 「ひとの身体でとらえた前方後円墳」  
共同検討 「各共同研究員の分担課題と展望」

○第2回研究会（2023年11月5・6日 於奈良国立博物館・オンライン併用）

吉澤 悟 「正倉院宝物と聖武天皇の葬儀」  
上野 祥史 「秦漢の皇帝陵とひとびとの意識」  
仁藤 敦史 「殯宮儀礼と「不改常典」法—古代前半期の「先代」意識—」  
小倉 慈司 「平安時代以降の皇位継承と没後の元天皇に対する行為（覚書）」  
正倉院展（奈良国立博物館）の見学及び討議

○第3回研究会（2024年2月3・4日 於国立歴史民俗博物館・オンライン併用）

川村 清志 「現代日本の震災犠牲者についてのモニュメントと遺構施設、あるいは記憶の形—宮城県気仙沼の事例より—」  
大西 秀之 「死の確定—技術と制度のイデオロギー—」  
八木 春生 「敦煌莫高窟の弥勒表現」

## 4. 今年度の研究成果

第1回研究会では、実践論の視点で死者へのかかわりを分析することが、社会の検討に重要な視点・論点を提供するという共同研究が掲げる問題意識とアプローチについて、共同研究員で認識を共有した。上野報告では、「人をどのような存在と認識しているか」「死者が生者の関係をどう規定・媒介するのか」という共通の枠組みを、各研究分担者の対象に合わせて提示した。松木報告では、前方後円墳を埋葬の場に限定してとらえるのではなく、造営、葬送、顕彰など多様な活動の対象としてとらえ、死者との直接、間接のかかわりがどのような認識を形成する

のか、予察をおこなった。古墳時代の研究実践をモデルとして、今後の議論の枠組みや方向性を整理した。

第2回研究会では、聖武天皇の遺品を収蔵した正倉院宝物を公開する正倉院展に関連して、貴顕・象徴的為政者の死をめぐる言説や所作、記録を対照した議論や討議を展開した。吉澤報告では、聖武天皇の造墓や葬送と遺品の扱いを対照してとらえ、遺品をめぐる後世の動きが如何に認識の形成に関与したのか、等について論を深めた。上野報告では、秦漢の皇帝陵を対象として、皇帝への奉仕は生前も没後も変わりなく、行為の継続が魂の永続を認識させる装置として機能したことを指摘し、行為が認識と相互に作用して形成される一例として紹介した。仁藤報告では、6世紀から7世紀の国家形成期を対象として、葬送儀礼と皇位継承の実践を検討した。世代継承が死を基点としており、殯が皇位継承に重要な機能を果たすことを指摘する。小倉報告では、古代から中世の天皇位の継承を総覧し、皇位継承において死者への認識（系譜）や行為の実践がどのように影響したのか通時的に検討した。天皇あるいは皇帝を対象として、「皇位継承」や「陵墓」造営や儀礼の実施、「遺品」をめぐる扱いなど、後世の社会が故人に対する行為・実践をどのように展開したのか、比較検討をおこなった。正倉院展の見学もふまえ、研究分野を横断した比較視点の形成に努めた。

第3回研究会では、慰霊や死者の顕彰、死を確定する認識、死後の世界の物質化など、人類学や美術史など様々な視点から、死をめぐる実践と物質化を横断的に比較検討した。川村報告では、東日本大震災の記念碑とその時系列変化、過去の災害の記念碑等を対照しつつ、モニュメント／記憶の共有／人のかかわりを連関してとらえ、死をめぐる行為と意識の相互作用を実践論的にとらえた。大西報告では、生と死の文化的イデオロギーに注目し、死は社会的事実であるという認識に立った上で、死者をめぐる行為や認識を評価すべきであるとの指摘をおこなった。八木報告では、中国の石窟寺院の揭示変化を追い、過去・現在・未来という時間軸の表現に注目し、信仰対象の変化を対照しつつ、生者と死者の世界観とその変容を概観した。分野により扱える対象は異なるが、死を実践論でとらえる際の有効視点について、認識の共有が図れた。

また、研究会の開催と併行して、関連資料の3Dモデルデータの作成に取組み、アウトプットの方法論的な模索に取組んだ。その一部は、2023年度企画展「歴博色尽くし」にてトライアルとして実践した。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者 ○は研究副代表者）

- 天野 真志 本館研究部・准教授
  - ◎上野 祥史 本館研究部・准教授
  - 大西 秀之 同志社女子大学現代社会学部・教授
  - 小倉 慈司 本館研究部・教授
  - 嘉幡 茂 京都外国語大学国際言語平和研究所・嘱託研究員
  - 川村 清志 本館研究部・准教授
  - 仁藤 敦史 本館研究部・教授
  - 松木 武彦 本館研究部・教授
  - 松本 雄一 国立民族学博物館人類文明史研究部・准教授
  - 八木 春生 筑波大学大学院人間科学研究群・教授
  - 山田 慎也 本館研究部・教授
  - 吉澤 悟 奈良国立博物館・学芸部長
- （五十音順）

## 【基盤研究】

### （6）秦漢時代の文字使用をめぐる学際的研究 2021～2023年度 （研究代表者 下田 誠）

#### 1. 目的

本研究は、中国秦漢時代の文字使用をめぐる人間活動を対象として、歴史資料の研究資源化・高度情報化を目的とする学際的研究である。東アジア歴史空間でひろく共有された、文書行政による社会運営システムの源流を探究する試みである。

中国では、戦国時代から秦漢時代にかけて官僚制の形成に伴い文書行政が発達した。それを支えたのは書写材料としての木簡・竹簡（あわせて簡牘と呼ぶ）と印である。秦漢時代の中国では、皇帝以下地方の下級役人まで、諸

官が印を文書行政に使用していた。中国古代史の解明では、出土数や情報量の多い簡牘に注目が集まり、出土数の限られる封泥への注目は少ない。しかし、当時の中国社会を支えた文書行政システムを総体としてとらえるためには、簡牘と印・封泥を含めて、文字を使用するさまざまな局面での人々の行為・所作をトータルに復元する必要がある。歴博総合展示第1室「先史・古代」で竹簡と共に筆や削刀、印や封泥を展示するように、こうした視点で秦漢時代社会をとらえることが本研究の目的である。

日本では、漢と交渉した弥生時代以降、木簡を使用した7世紀後半にも、封泥は存在していない。簡牘の日中比較研究はさかんであるが、存在しない封泥への関心は薄い。古代日本の交渉対象、あるいは行政システムの源流として中国を評価するには、日本に直接結びつくもの、日本にも存在するものだけでは不十分であり、本研究が取組む「総体としての文字使用環境」と比較してこそ、弥生時代の日中交渉や日本古代の簡牘システムを相対的に評価することが可能になる。本研究は封泥を中心にして、秦漢時代の文字使用をめぐる人間の活動や身体所作をトータルに復元することを、第1の目的とする。

印と封泥は、秦漢国家の管理・運営のシステムを象徴するモノである。本研究では、戦国末秦・統一秦期の封泥を対象として、封泥を用いた新たな情報・物資伝達システムの確立と実態を検討する。秦封泥の解明は、文書行政システムの端緒を明らかにし、その研究意義は大きい。同封泥に対する歴史学的分析、考古学的分析、理化学的分析を統合することによって、文書行政システムが帝国中国の全領域で確立してゆくプロセスを解明する。これが本研究の第2の目的である。

本研究は「文字使用」のツールにかかる議論を集約し「文字を使う環境」を総合的に復元・検討し、「文字使用をめぐる学際的研究」のモデルを提示する。それは、日本をはじめ、簡牘を利用した東アジア各地の古代史を評価する上でも有益な視点が提示できると考える。

## 2. 今年度の研究計画

資料の基礎分析は、令和4年度に取得した各種分析情報に基づき、各自が分担課題の検討を深め、成果の集約につとめる。X-CTスキャン装置を利用した調査は、関連資料を対象に補足調査をおこなう。なお、これまでに取得したX-CT情報の解析、鋳物学的検討を東北大総合学術博物館で実施する予定である。

封泥形態論については、使用痕跡情報をもとに、捺印所作の復元と類型化を進める。当年度はこれまでの分析と試行をふまえて、捺印の復元実験を実施する。また、再現文化財の製作にも取り組み、模擬実験を通じたさまざまな所作の検討をおこなう。

封泥システム論では、封泥を利用した社会システムを復元することに主眼を置く。2年目には文字使用の場での簡牘と封泥との関係、封泥出土遺蹟（地点）の評価、出土資料としての刀筆・簡牘・印章・封泥との相互関係、封泥（印章）文字情報に基づいた歴史地理環境の復元といった課題に取り組んでおり、形態論が提供する情報、及び提示された所作モデルを参照しつつ議論を深化させる3回の研究会を通じて、各分担課題の論点を整理し、封泥形態論と封泥システム論を複合した体系的な、研究成果の集約につとめる。研究成果は、オンラインにて開催予定の公開研究会（当初はフォーラム、国際研究集会を想定）を開催し、基礎資料の公開と研究の中間報告を意図した一般書を刊行することで、積極的に情報発信を進める。

## 3. 今年度の研究経過

### ○第1回研究会（2023年7月15・16日 於国立歴史民俗博物館）

上野祥史ほか「ワークショップを介した封泥にかかわる所作の検討」

下田 誠「秦封泥の歴史地理研究上の貢献—沿海部を中心に—」

鶴間 和幸「秦王朝の行政システムと理念—内史の県と関外の郡の変遷」

### ○X-CT装置を利用した分析（2023年8月8～10日 於東北大学）

分析・方法論の模索を目的として、東北大学学術資源公開センター（総合学術博物館）にて、高分解能CTスキャンシステムを利用し、秦漢封泥及び関連資料と模造実験試料等の調査をおこなった。

### ○第2回研究会（2024年3月28・29日 於国立歴史民俗博物館）

上野 祥史「「捺印」の所作とその史的評価」

松村 一徳「文字形体差異に依る秦封泥分期法」

青木 俊介「前漢・景帝期における県長の創設と「令」「長」の明示」

高村 武幸「秦漢官府の公文書処理補遺・附封泥と封検の使用事例」

初山 明「編むことと纏ること—伝送された文書のすがた—」

谷 豊信「東博所蔵秦漢封泥の調査成果および歴博研究班報告の構想」

島津 美子 「出土封泥資料からみえる封泥の素材と成形について—再現実験を通じて—」

#### 4. 今年度の研究成果

形態論とシステム論を両輪として、「文字使用環境」の体系的検討視点を確立した。封泥を共通の検討対象として、議論は4つの方向で相互に関連をもちつつ進行した。第1は印章の文字に着目した検討である。鶴間報告や下田報告、松村報告が該当し、歴史地理空間の復元や文字形体による断代が図られた。第2は封泥の形態に関する検討で、上野報告、谷報告が該当する。外面形態情報と内部透過情報を対照して、捺印に関わる所作を封泥に遺る諸痕跡から復元した。第3は、模造や実験をふまえた検討である。ワークショップや島津報告では、X-CTスキャン装置や実体顕微鏡観察等を利用して、捺印をめぐる一連の所作を多角的に検討した。第4は、捺印の所作を集約してとらえるもので、青木報告、高村報告、初山報告では、出土文字資料と典籍文献をもとに、行政官署を支えた文吏の動きを多角的に復元し、展望した。

第1の論点では、鶴間報告が、秦の統一戦争の進行過程に対照して、領域の拡大と秦郡の設置と変遷過程に言及した。統一後の秦郡は、三六郡と形容されるものの実態は未詳などところがあり、その実態の解明に向けて取組んだ。下田報告は、北方（遼寧省）出土の封泥を対象として、封泥がもつ歴史地理研究の史的意義について、評価に挑んだ。ともに、封泥を利用して物資や情報を伝送する社会基盤（ハードウェア）を明らかにすることに主眼がある。松村報告は、封泥を悉皆的に取り上げ、字形の微細な差異をより細かな編年指標としてとらえるべく、検討をおこなった。いずれも、封泥の「文字」を同時代の時間と空間のなかで評価した取組みである。

第2の論点では、上野報告は観峰館所蔵の封泥を対象に、谷報告は東京国立博物館所蔵の封泥を対象として、X-CTスキャン装置を利用した分析と検討の結果を示した。X-CTスキャン装置の利用は、高精細の外面形態情報を提供し、かつ内部透過情報も併せて取得できることから、さまざまな属性に基づいて秦代の封泥の特徴を抽出し、前後の時代との比較に取組んだ。

第3の論点では、上野と島津が共同してワークショップを実施し、報告をおこなった。封泥箔を復元製作し、各自の身体を通じて、どのような所作が可能であるか検討し、捺印をめぐる各所作の相互の関係について検討をおこなった。島津報告では、模造実験をふまえ、封泥の「土・泥」の分析の有効性や可能性について言及した。上野報告では、泥を利用し印を捺すことの必要性（必然性）に注目し、その歴史的意義をも展望した。

第4の論点では、青木報告が、封泥の印文にも関係する、地方長官である令長の区分が発生するプロセスについて検討をおこなった。高村報告は、官署内部での意思決定プロセスと捺印という所作が相互にどのような関係にあるのか、その関係に基づいて中央派遣の長官次官の性格を検討した。初山報告では、封泥に転写された痕跡から、「文書を編み、物品を纏る」所作について、出土文字資料を対照して、考証学的な検討をおこなった。

各報告では、3年間の分担課題を総括し、体系化が図られた。「文書を書き、印を捺し、物資・情報を送る」という一連の行為を、相互に視点を重ねながら復元し、その様式の特徴や推移、変遷を秦代から前漢時代にかけてとらえることを可能にした。

#### 5. 全期間の研究成果

文献史学、考古学、美術史学（古文字、書芸）、自然科学など異なる研究領域が協業して、封泥という共通の資料を対象とすることで、文字を利用して社会を管理・運営した秦漢時代の社会を多角的に描き出した。異なる研究領域が一つの資料を対象に協業する場合、同一位相の現象に注目することが多いが、本研究では、「文字を書き、印を捺し、物資情報を送る」という行為を、3つの次元でとらえることができた。一つは、「捺印」の所作や行為を復元することであり、一つは「捺印」が組込まれた一連の行動様式を評価することであり、一つは捺した印章の文字を評価することである。封泥を共通の資料とし、典籍や簡牘など出土文字資料、そして理化学分析を交差することにより、秦という社会を支えたシステムを「捺印」にクローズアップして多角的にとらえることができたのである。「封泥形態論」と「封泥システム論」と二つの柱をたてて研究は推進してきたが、「秦漢時代の文字使用」は3つの次元での評価を可能にしたのである。

それは、秦漢史という一時空を対象とする歴史研究を進展させただけでなく、文字の使用を実践論的にとらえ、古代日本あるいは他の時空を対象とした「文字利用の社会システム」としての比較を可能にする視座や論点を提供することになった。

また、理化学分析を併用して研究を進展させた意義は大きい。X-CTスキャン装置を利用した調査を展開したこと、封泥の復元実験と理化学分析を対照したこと、封泥箔を復元した身体所作の実践など、「印を捺す」という行為を身体所作の中に位置づけて実践論的に検討した意義は大きい。物証は客体としてとらえることが多く、所作・行為は観念論的に検討される傾向が強いが、身体所作の視点を交差することにより、実証性の高い検討を進めるこ

とができた。

その成果は、中間報告的な性格をもつ一般書を刊行することで、先行して公開した。『秦帝国と封泥—社会を支えた伝送システム—』では、「第一部 封泥の実態」「第二部 文字を書き印を捺す」「第三部 秦の封泥と秦の社会」に分けて諸論を掲載している。

本研究の取組みは、個別深化する研究を体系化して再構成するものでもある。封泥や出土文字資料の検討では、「情報」を対象とすることが多く、その情報を物質化したメディアや、そのメディアとひとつのかかわりに注目することは少ない。対象とした秦漢時代でも、情報の伝達は、簡牘に文字を書き、封緘をし、宛先を書き伝送することで実現したのであるが、簡牘を作成する木や竹の加工、文字を書く筆と墨、編綴する植物繊維、封緘に用いた梱包具や収納具、封印に用いた泥や印章、さまざまな「もの」とのかかわりの中で、文字を書き情報を伝えるという「行為」は実践された。だが、伝えるべき情報に比して、情報を物質化したメディアに目が向くことは少ない。内容や書式のみ注目したのでは、文字はあたかも透明で実体のないもののようにも映る。さまざまな行為を媒介して情報は伝達されたのであり、行為と物証との相互関係に注目することも必要である。ソフトウェアへの注目のみでは、社会の実態を充分にはとらえられず、そのソフトウェアを支えたハードウェアにも注目することが必要なのである。これを、文献史学、考古学、美術史学、文化財科学が共同して、実践論的にとらえることで推進したのが本研究であり、「文字利用の実態解明と歴史的評価」を多元的に評価することを可能にした。本研究では、日本列島や朝鮮半島など、簡牘を共有する古代東アジアなどとの比較には及ばなかったが、他の時空を対象とした研究と比較する基点は十分に確立したと認識している。

#### 6. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

- 青木 俊介 清泉女子大学・非常勤講師  
 島津 美子 本館研究部・准教授  
 瀬川 敬也 観峰館・学芸員  
 高村 武幸 明治大学文学部・教授  
 谷 豊信 東京国立博物館・客員研究員  
 鶴間 和幸 学習院大学文学部・名誉教授  
 箱崎 真隆 本館研究部・准教授  
 松村 一徳 シールロード研究所・所長  
 羽山 明 公益財団法人東洋文庫研究部・研究員  
 ◎下田 誠 東京学芸大学次世代教育研究センター・准教授  
 ○上野 祥史 本館研究部・准教授  
 (五十音順)

### (7) 映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討 2021～2023年度 (研究代表者 村上 忠喜)

#### 1. 目的

本研究の全体構想は、ここ20年あまりの間に全国で作成されてきた民俗文化財記録映像の成果を検証することを通して、「民俗を記録する」という営為、換言すれば「映像による民俗誌作成」とは何かを検討することを第一の目的とする。

民俗文化財の記録映像の方法論の検討は、関西の民俗文化財担当者や東京文化財研究所などが中心となって進められ、①普及啓発、②伝承支援、③民俗文化財を含む地域総体の記録の、大きく3つの目的に沿って作成すべきであるという結論に達し、その方法論が検討されてきた。しかしながらこの3つの中で方法的な検討がほぼ手付かずのまま放置されているのが、③民俗文化財を含む地域総体の記録のあり方の検討である。

そこで本共同研究において◎に関しての検討を進めることで、ここ20年ほどかけて進められてきた民俗文化財記録映像を総合的に活用し、その成果の共有と議論の場を創出し、映像を使った新しい民俗誌を叙述する試みの検討を行う。同時に、世界的にも先端的であることは間違いない日本の民俗文化の記録映像作成の方法等を、海外の研究者や担当者とは共有する場を最終年次に設けて、民俗学の国際化に貢献することを企画する。

具体的な手法としては、本研究会開始後のなるべく早い時期に、歴博内に、各地で作成された民俗文化財記録映像のアーカイブ・公開サイトを立ちあげるところからはじめる予定である。このサイトは、これはこれまで歴博が培ってきた全国の博物館との協力体制、関係性に加えて、文化財行政部局の民俗担当部門で働く行政内研究者との関係性の構築に資することは間違いない。

## 2. 今年度の研究計画

2023年度は、下記5つの指針をまとめる方向での研究会を開催、運営を行うこととした。

- ① 民俗文化財の映像記録の評価と総括：2022年度9月に行った研究会をもとにして、過去のHD型映像記録の意義と今後の課題を整理したうえで、ブックレットの作成を行う。
- ② ①と連動する形でのアーカイブスの方法論の研究：現在、共同研究者とそれに準じる研究者間に限定した運用を行っているHD型映像記録のホームページのアーカイブス化について討議し、これまでの議論をへて公開のための指針の策定を行う。
- ③ 映像による民俗誌の叙述の可能性の検討及び提言：今年度、開始した映像民俗誌への方法論の適用をさらに展開し、共同研究員の個別の問題意識に沿って、映像製作を含めたプレゼンテーションを実施する。また、純然たる記録映像から主体的なドキュメンタリーまで、より広い映像作品の検討も視野に入れる。
- ④ 民俗誌の映像記録に関する用語の検討
- ⑤ ①から④を踏まえての学会、及び国際研究会での報告・交流

## 3. 今年度の研究経過

上記のうち、①については下準備のみで実現はできなかった、②のアーカイブスの方法論について同様である。

③～⑤については下記の通りである。

- ・2023年7月22日（土）メンバーによる研究報告会：梅屋潔（神戸大学）「近代民族（俗）誌の成立と、映像媒体—その今日的課題」／川村清志（国立歴史民俗博物館）「シン・エスノフィルム—〈黒島、旅の途中〉構想についてver.2.0」於京都市職員会館かもがわ／その後祇園祭後祭宵山の会所飾り等見学、村上忠喜が解説。参加人数：14名（内2名オンライン）
- ・2023年10月29日（日）メンバーによる研究報告会：村上忠喜（京都産業大学）「民俗文化（財）の映像記録にかかる用語整理にむけて」於国立歴史民俗博物館 参加人数：8名（内5名オンライン）
- ・2024年2月27日（火）国際研究会での報告・交流：鄭宇伶（台南市政府文化資産管理處組長）「台南市の民俗文化遺産とその維持戦略」／俵木悟（成城大学）「日本の文化財保護制度における無形文化遺産の保護の推移」／謝國興研究員（中央研究院台湾史研究所）「民俗文化財の研究調査と映像記録」／村上忠喜「無形文化遺産の記録保存の方法」／川村清志「古写真、古映像の利用—能登の具体的な事例として—」／陳怡宏（台湾國立台灣歷史博物館）「全台湾：1930年代の台湾のドキュメンタリー」／ディスカッション：コーディネーターは村上忠喜・林承緯（國立臺北藝術大學文化資源學院）、通訳として今中崇文（京都市文化財保護課技師） 於台湾文化部文化資産局文化資産保存中心（台南市） 参加人数：20名

## 4. 今年度の研究成果

- ・2022年7月22日：梅屋潔（共同研究員）がこれまで撮影した研究映像の紹介と民俗誌の作成に映像をどう利用できるのかによる報告、続いて川村清志（副代表）から、2022年7月に行った研究会：篠原徹（国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授・滋賀県立琵琶湖博物館前館長）が1990年代に3年間の調査に基づき撮影された沖縄県黒島の民俗誌映像とその背景の成果を踏まえ、2023年1月に本共同研究会で再び黒島での調査検証を行った、その結果についての報告を行った。その後祇園祭後祭の会所飾りなどの見学、及び映像撮影を行った。
- ・2023年10月29日：村上忠喜が、民俗文化（財）の映像記録にかかる用語整理にむけての試論を報告し、同課題の用語の定義についての議論を行った。
- ・2024年2月23～26日に、台湾澎湖諸島における元宵節の各村落での実態調査と撮影を行った。27日には上記に記したように、日本側、台湾側からそれぞれ3名の研究報告を受け、フロアを交えてのディスカッションを行った。日本側からは文化財保護制度化における無形民俗文化財の映像記録の法的な位置づけやその方法論、そしてその活用に関する話題提供を行い、台湾側からは現在急ピッチで進められている無形文化遺産保護のための映像撮影や活用事例の最新の報告がなされた。

## 5. 全期間の研究成果

## (研究経過)

- ・2021年3月22日：共同研究準備会として村上忠喜（研究代表者）より共同研究の趣旨説明を行い、自己紹介を兼ねて議論へ。（オンライン 参加者13名）
- ・2021年6月12日：今石みぎわ（東京文化財研究所無形文化遺産部）「映像による記録作成とアーカイブにかかる実践的課題」（オンライン 参加者8名）
- ・2021年7月24日：川村清志（国立歴史民俗博物館）「文化の記述と記録—ポジショナリティと外延を巡って—」（オンライン 参加者5名）
- ・2021年9月26日：関孝夫（上尾市教育委員会）「webサイト「あげお文化遺産ガイド」といわゆる「HD型」映像記録について」（オンライン 参加者10名）
- ・2021年12月17日：本共同研究会の議論を基礎にして、東京文化財研究所無形文化遺産部において、全国の無形文化遺産の担当者及び研究者を対象にした協議会、第16回無形民俗文化財研究協議会「映像記録の力—危機を乗り越えるために」を開催した。本研究会からは、村上忠喜、川村清志、関孝夫、今石みぎわ、久保田裕道（東京文化財研究所）、森本仙介（奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課）が登壇した。（ハイフレックス 参加者153名）※同シンポジウムについては、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部『映像記録の力—危機を乗り越えるために』（第16回無形民俗文化財研究協議会報告書）2022年3月総頁数94、として刊行されている。
- ・2022年7月6日：民俗誌映像視聴「黒島民俗誌」（監督、篠原徹、菅豊1992年製作）の再検証、趣旨説明等：川村清志／コメント：梅屋潔、参加人数：17名（内11名オンライン）
- ・2022年9月10・11日（日）HD型映像記録の検証：趣旨説明等：村上忠喜・高濱雄介（CNインターボイス・プロデューサー）／報告：長谷川嘉和（元滋賀県教育委員会文化財保護課参事・現滋賀の食事文化研究会副会長）「近江八幡の火祭り（滋賀県・2003年）」コメント：政岡伸洋／報告：橋本章（京都府京都文化博物館学芸課課長補佐・主任学芸員）「長浜曳山祭り（滋賀県・2011年）」コメント：東城義則／報告：内田幸彦（埼玉県教育局市町村文化支援部文化資源課指定文化財担当・主幹）「毛呂のやぶさめ（埼玉県・2011年）」コメント：関孝夫／報告：福持昌之（京都市文化市民局文化財保護課・主任文化財保護技師）「久多の花笠踊り（京都府・2012年）」コメント：俵木悟／報告：蘇理剛志（和歌山紀伊風土記の丘・学芸員）「御坊祭（和歌山県・2014年）」コメント：小林稔／報告：長峰透（甲賀市くすり学習館館長）「大原祇園（滋賀県・2006年）」コメント：川村清志／報告：福田良彦（三重県総合博物館・主査）「伊賀のかんこ踊り（三重県・2012年）」コメント：梅屋潔／報告：神村和輝（舞鶴市産業振興部観光振興課・係長）「城屋の揚げ松明（京都府・2019年）」コメント：今石みぎわ／ディスカッション司会進行：村上忠喜参加人数：28名（内4名オンライン）
- ・2022年12月24・25日：『波伝谷に生きる人びと』映像視聴&報告：我妻和樹（映画作家／ピーストリー・プロダクツ）コメント：政岡伸洋、民俗誌映像作成についてのディスカッション 参加人数10名（内2名オンライン）
- ・2023年1月20-24日 歴博の民俗誌映像である「黒島民俗誌」（1992年製作）の監督をされた篠原徹（国立歴史民俗博物館名誉教授）とともに沖縄県先島諸島黒島を訪れ、黒島の社会変化とともに、調査者と被調査者の関係性についての民俗誌の可能性を探った。参加者：4名

※2023年度に関しては上記「3. 今年度の研究経過」参照。

3年間の共同研究期間を経て自己評価をするならば、以下に要約できる。

文化財担当者の映像記録撮影事業の最先端の知見を研究会で共有できたことに加え、東京文化財研究所と協業して、そうした議論のエッセンスを全国の文化財担当者に広く周知することができた点、さらに、そうした知見を含めて、台湾の研究者や文化遺産保護の担当部局とともに議論できたことは大きな収穫であった。前者については、ブックレット的なペーパーにして広く周知させる準備ができており、比較的速やかに実行したい。一方、映像による民俗誌の叙述に関する検討はまだまだ道半ばであった。期間前半は新型コロナ感染症下のため対面開催が難しく、研究員相互の意思疎通に苦慮するとともに、映像記録の実地撮影ができなかったことにも由来するだろう。さらにアーカイブスの課題については議論できないまま、研究期間が終了してしまったことは残念である。

## 6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

館外：今石みぎわ 東京文化財研究所・主任研究員  
 梅屋 潔 神戸大学大学院国際文化学研究所教授  
 久保田裕道 東京文化財研究所・無形民俗文化財研究室長  
 小林 稔 國學院大學研究開発推進機構・教授

- 関 孝夫 上尾市教育委員会学校教育部・参事兼次長  
 東城 義則 立命館大学OIC総合研究機構・客員研究員  
 俵木 悟 成城大学文芸学部・教授  
 政岡 伸洋 東北学院大学文学部・教授  
 ◎村上 忠喜 京都産業大学文化学部・教授  
 森本 仙介 奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課・主査  
 館内：内田 順子 本館研究部民俗研究系・教授  
 ○川村 清志 本館研究部民俗研究系・准教授  
 後藤 真 本館研究部・准教授  
 高科 真紀 本館研究部・特任助教

## (8) 近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究 2022～2024年度 (研究代表者 田中 祐介)

### 1. 目的

本研究では近世末期から近代にかけての日本およびアジア隣国で綴られた日記、手紙、作文、自伝などの個人文書(エゴ・ドキュメント)を題材に、有名無名の人々の書き綴る営みから歴史を描く可能性を探り、その方法論を練磨するとともに、発展的な研究を見据えた学際的・国際的な体制の基盤を構築することを目的とする。

近年、個人文書の総称であるエゴ・ドキュメントの名称を冠した研究が登場し、構築主義的な「自己」の語りの分析を通じて歴史を理解する機運が高まっている。本研究では先行研究の知見を踏まえながら、①個人文書の「自己語り」の内容(史料としての側面)、②「自己語り」の生成過程や習慣化・制度化(行為としての側面)、③綴る媒体の生産・流通・消費および商品化による多様性(モノとしての側面)の三点の視座から個人文書にアプローチする。

近代日本の「自己語り」の制度を浮き彫りにするためには、その成立過程や伝播の様態を考察する作業が不可欠である。本研究では、近世から近代への移行期に綴られた個人文書の分析を通じて、近代との連続および断絶を検証する。加えて視野を東アジアに広げ、朝鮮、台湾や旧満洲国の事例と比較するとともに、植民地時代に支配者の言語を用い、時に複数言語で綴る「自己語り」の意味を問う。

上述の主題を追求するために、本研究では歴史学および文学研究の方法論を中核に、教育史学、思想史学、メディア史学、社会学、文化人類学の知見も援用した学際的な研究体制を整備する。加えて個人文書研究を推進する韓国・台湾の研究機関と連携し、将来的な協働を推進するための国際的な研究体制の基盤を構築する。連携を図る中で、国内外のエゴ・ドキュメント研究および個人文書のアーカイヴ化の進展に関する情報を共有し、継続的に更新できるようなネットワークをおこなう。総括的に言えば、歴史の中の個人を見つめると同時に、個人が紡ぐ歴史の姿に迫ることを通じて、書記文化史の観点から日本を基軸として東アジアの近代経験を問い直すことが本研究の最大の狙いである。

### 2. 今年度の研究計画

共同研究員、研究協力者とともに、活動母体となる研究会を組織し、各々の関心に基づく研究発表をおこなう。

以後は3～4か月に一度の頻度で開催し、報告と討議を通じて、本研究の主題に基づく新たな研究成果を共有する。発表会場は国立歴史民俗博物館を基本とするが、主題により、「近代日本の日記文化と自己表象」研究会との共催とする。本計画の遂行に関わる国内機関の個人文書を調査蒐集し、翻刻と読解を進める新たな小班を設け、研究活動を促進する一助とする。加えて国際的な連携をはかるべく、個人資料の蒐集に取り組む台湾の研究機関を訪問し、シンポジウムの開催等を通じて学術交流を深める。

### 3. 今年度の研究経過

○第5回研究会(2023年度第1回) 2023年6月11日 明治学院大学(オンライン併用)

1. 「近世・近代の日記を旅する～東北と沖縄についての読み解きを中心に」(青柳周一、滋賀大学経済学部教授)
2. 「もう一つの「満洲」ツーリズム——戦前に書かれた中国人の「東北」旅行記から」(高媛、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授)

主題が重なる2本の研究報告により、近代東アジアにおける「移動」が孕む諸問題について学び、討議により



理解を深めることができた。

○第6回研究会（2023年度第2回） 2023年10月7日（月） 明治学院大学（オンライン併用） 参加者15名

1. 【講演】「再読という方法 アーカイブプロジェクトAHA!の実践」（松本篤，AHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]世話人）
2. 「共同研究「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメントの学際的・国際的研究」の中間総括と諸課題」（田中祐介，明治学院大学教養教育センター専任講師・国立歴史民俗博物館特別客員准教授）

松本氏の講演では、日記を読み直して想起することを語るという自己の再説の意義について知見を得ることができた。田中の中間総括では、当プロジェクトの成果と課題を共有することができた。

○台湾における日記の資料調査と研究交流会 2023年10月31日～11月2日 参加者7名

10月31日：国立故宮博物館（台北市）

11月1日：国立台湾歴史博物館（台南市）

展示見学，貴重資料閲覧および撮影，研究交流

11月2日：国立台湾博物館（台北市）

日本の統治時代を中心に，台湾で綴られた個人文書（日記や書簡）を熟覧し，撮影することができた。

○第7回研究会（2023年度第3回） 2023年12月9日 明治学院大学（オンライン併用） 参加者25名

（「近代日本の日記文化と自己表象」研究会と共催）

1. 「日記体の小説を書く／読むこと——水野葉舟『響』および「北村の日記」における回想と忘却の自己語り」（石川かれん，早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）
2. 「空爆下の日々を綴る—アジア太平洋戦争末期・空爆下の兵庫/神戸—」（長志珠絵，神戸大学国際人間科学部教授）

日記体小説の分析からは，真実性を帯びた自己語りを以下に物語（虚構）の中に組み込むかについて熟考する機会となった。戦時下の空爆日記の分析からは，当事者不在の将来に向けた戦争経験の継承のあり方を考えるとともに，自己語りの並べよみの可能性を検討することができた。

○第8回研究会（2023年度第4回） 2023年3月9日 明治学院大学（オンライン併用） 参加者19名

1. 「国家と理念の境界上で：崔徳信の冷戦キャリアと自叙伝執筆」（申棟一，国立慶北大学校講師）
2. 「中国における近年のエゴ・ドキュメント研究及び研究機関について」（王羽萌，立教大学大学院博士後期課程）
3. 「第二次世界大戦直前の帝国日本への「まなごし」の比較——タイとポルトガルの旅行記の並べ読みから」（西田昌之，東北学院大学専任講師）
4. 「朝鮮時代の日記と日記をつける人々」（金貞雲，国立慶北大学校専任研究員）

韓国，中国，タイをフィールドにしたエゴ・ドキュメント研究についての理解を深めた。

#### 4. 今年度の研究成果

・高媛「『満洲』というファンタジーの創出と空転——宝塚少女歌劇『満洲より北支へ』（一九三八年）」山口みどり・中野嘉子編著『憧れの感情史』（作品社，2023年6月）

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

柿本 真代 京都華頂大学・准教授

河内 聡子 東北工業大学・講師

高 媛 駒澤大学・教授

金 貞雲 韓国国立慶北大学校・専任研究員

宋 恵媛 大阪公立大学・准教授

徳山 倫子 京都大学・研究員

橋本 繁 韓国国立慶北大学校・HK研究教授

吉岡 拓 明治学院大学・准教授

横山百合子 本館・名誉教授

◎田中 祐介 明治学院大学・専任講師

樋浦 郷子 本館・准教授

○三上 喜孝 本館・教授

## (9) 中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究 2022～2024年度

(研究代表者 田中 大喜)

### 1. 目的

本研究は、中世の文献資料上に「宿」・「津」・「湊」・「泊」といった言葉で現れる、地域社会において恒常的な物流が行われた集散地を都市と把握し、その存立と機能のあり方を具体的に明らかにすることを目的とする。地方に成立したこれらの中小都市は、相互に結びつくことで流通ネットワークを形成し、12～15世紀においては荘園領主が集住する京都や鎌倉への求心的な流通構造をともなう荘園制という社会体制を、16世紀においては地域国家の様相を呈した大名の領国体制を下支えした。したがって、地方の中小都市は中世社会のなかで一貫して大きな位置を占めていたといえ、その存立と機能の究明は中世社会の実態と構造の解明にも直結する重要な課題となる。

都市は単独では存立できない。規模や役割の異なる都市が水陸の交通路によって結びつけられ、単独の都市としては不足する機能を相互に補完する形で、都市のネットワークを形成することで存立しえたのである。そこで本研究では、地域社会に形成された都市ネットワークの実態を追究することで、地方都市の存立の様相を究明する。その際、留意すべきは、そこには近郊の村落も組み込まれたという事実である。

そもそも都市自体、村落と未分化だったと指摘されている。すなわち、地方都市の住人には近郊村落の百姓を兼ねる者がいた。また、地方都市は、近郊村落の百姓にとって交易の場であるとともに、労働力の提供＝稼ぎの場、情報収集の場、そして逃亡（抵抗）の場でもあった。先行研究が明らかにしてきた、このような都市と村落との有機的な結びつき＝共存・補完関係にも留意して、地方都市の存立の様相を究明する。そして、この作業を通して、地域社会における都市の機能についても、民衆の生活実態と関わらせながら明らかにする。

なお、地方都市の多くは、その地域の領主層の開発によって成立し、その交易機能は領主権力による「平和」保障のもとで維持された。地方都市の存立と持続には領主の介在も不可欠だったのであり、都市と領主権力との関係も本研究の重要な課題となる。戦国期になると、領主（大名）は先行する地方都市に寄生する形で城下を形成することが知られており、この課題は戦国期城下も射程に入れて進めたい。

本研究では、以上の課題を、文献・考古両資料と先行研究の蓄積に恵まれた東国と西国の具体的な地域の事例に即して追究する。すなわち、東国では上野国世良田宿を、西国では安芸国沼田市をフィールドに設定し、①中世の文献・考古両資料の精査による基礎データの収集・分析、②近世・近代資料（地誌・絵図等）の精査と現地調査による地理的景観の復元および領主拠点との関係の分析を行い、①・②の成果の総合化によって目的にアプローチする。

### 2. 今年度の研究計画

#### (1) 研究会

- ①国立歴史民俗博物館で研究会を開催し、都市と流通に関する論点について中島が報告する。また、今年度の沼田荘での現地調査の成果について田中が報告し、本研究参加者全員で共有する。
- ②群馬県太田市で研究会を開催し、本研究参加者全員で世良田宿故地と金山城下故地を踏査する。また、世良田宿および新田荘の開発に関わる研究の到達点について田中が報告し、金山城下に関わる研究の到達点について小野が報告する。

#### (2) 調査

- ①天野・荒木・田中が担当者となって沼田市に関わる中世・近世・近代の文献資料を収集・精査する。
- ②松田・田中・土山が担当者となって①の情報を手がかりに現地調査を実施し、沼田市の地理的景観の復元および領主拠点との関係の分析に必要な情報を収集する。
- ③小野・佐々木・鈴木・村木・池谷初恵（研究協力者・中世考古学）が担当者となって、沼田市と沼田荘内集落および小早川氏城館の出土遺物を調査し、基礎データを収集する。

### 3. 今年度の研究経過

#### (1) 研究会

- ①第4回研究会（国立歴史民俗博物館、8月24日）中島圭一「中世の流通」
- ②第5回研究会（群馬県高崎市・太田市、11月17日～19日）  
小野正敏「金山城と城下」

田中大喜「新田荘の2つの宿―世良田宿と金井宿―」

世良田宿・金井宿・新田荘故地，金山城跡の踏査

③第6回研究会（国立歴史民俗博物館，3月2日）

村木二郎・池谷初恵・小野正敏・佐々木健策・鈴木康之「三原市三太刀遺跡出土陶磁器調査報告」

田中大喜・土山祐之・貴田潔（研究協力者）・金久保拓未「2023年度沼田荘水利灌漑調査報告」

(2) 調査

①第8回現地調査（5月18日～20日，広島県三原市）

沼田荘船木郷故地の水利灌漑調査と沼田本郷・船木郷・真良郷故地の聞き取り調査

②第9回現地調査（9月6日～8日，広島県三原市）沼田荘梨羽郷故地の水利灌漑調査と聞き取り調査

③第4回出土遺物調査（9月14日～15日，三原市教育委員会・広島県教育事業団）

三太刀山遺跡の出土遺物調査

④第10回現地調査（10月26日～10月28日，広島県三原市）

沼田荘梨羽郷故地の水利灌漑調査

⑤第11回現地調査（11月9日～11日，広島県三原市）

沼田荘梨羽郷・安直郷故地の水利調査と聞き取り調査

⑥第12回現地調査（2月8日～10日，広島県三原市）

沼田荘安直郷故地の水利調査と聞き取り調査

⑦第13回現地調査（2月25日）

世良田宿・金井宿故地の踏査

⑧第14回現地調査（3月14日～16日）

沼田荘安直郷故地の水利調査，萩博物館・山口県文書館所蔵「中国行程記」の調査・撮影

4. 今年度の研究成果

沼田本荘における沼田市の存立形態・機能を明らかにするべく，調査対象地を沼田本荘全体に拡大することとし，水利灌漑調査・聞き取り調査を実施した。調査対象地を拡大したことで，調査は次年度も継続して行うことになったが，調査データはデジタル化して記録・管理することができた。また，沼田市近傍の消費地である三太刀遺跡の出土遺物の調査を実施し，遺跡の消長と出土遺物の特色を明らかにすることができた。

世良田宿について検討し，世良田郷におけるその立地範囲について先行研究に再考の余地があることを確認できた。また，太田宿に先行する金山城下と目される金井宿について検討し，これまで明らかでなかったその場所を特定することができた。

5. 研究組織（◎は研究代表者，○は研究副代表者）

荒木 和憲 九州大学大学院人文科学研究院・准教授

小野 正敏 本館・名誉教授

佐々木健策 小田原市文化財課・副課長

鈴木 康之 県立広島大学地域創生学部・教授

中島 圭一 慶應義塾大学文学部・教授

三枝 暁子 東京大学大学院人文社会系研究科・准教授

天野 真志 本館研究部・准教授

土山 祐之 本館研究部・テニュアトラック助教

松田 陸彦 本館研究部・准教授

○村木 二郎 本館研究部・准教授

◎田中 大喜 本館研究部・准教授

(10) 高度情報化による古代中世の寺院および荘園の総合的研究―額田寺伽藍並条里図と栄山寺寺領文書を中心に―  
2021～2023年度

（研究代表者 下村 周太郎）

1. 目的

本館が所蔵する「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」は、奈良・平安時代の寺院および寺領荘園に関する同時代史料として知られ、前者は国宝、後者は重要文化財に指定されている。本研究ではデジタル技術も活用することで、両史料に関する研究基盤の構築・高度化を図るとともに、古代史・中世史双方の研究者が参画することで、古代～中世における寺院・寺領荘園の総合的・多角的研究の推進を目指す。

前者は現在の奈良県大和郡山市に所在する額田寺（現・額安寺）の境内地および周辺の寺領を、麻布に彩色で描いた絵図で、天平宝字年間（757～765）の作成とされる。奈良時代の寺院や寺領を描出する史料として極めて貴重であり、史料の乏しい当該期の寺院史・荘園史研究において積極的に活用されるべきである反面、退色や朽損が進んでおり、保護・保全への適切な配慮も求められるものである。そこで、本研究ではデジタル撮影により得られた高精細画像の公開を推進するとともに、高精細画像を活用しながら、現物では視認が困難化している記載内容の検討、絵図に用いられた顔料や麻布の自然科学的な分析、記載内容と現地景観との突合による歴史的景観の遡及的復元などに取り組む。

後者は現在の奈良県五條市に所在する栄山寺の平安期の寺領に関する史料で、特に11～12世紀（摂関・院政期）のいわゆる王朝国家段階における古代荘園から中世荘園への転換状況を示すものとして著名である。中でも、条里の坪ごとに租税の免否を確定するためになされた栄山寺と国司とのやり取りに関する一連の史料（栄山寺牒）は、古代中世移行期の荘園史研究における基本史料となっている。ただし、やはり経年の劣化が進んでおり、文字の判読に困難な箇所も生じており、特に細字の注記や朱書きなどについては改めて厳密に解説・確定していく必要がある。また、錯簡ないし断簡が疑われている史料もあり、接続関係についての慎重な検討も望まれる。本研究では、前者と同様に、デジタル撮影により得られた高精細画像の公開を推進するとともに、高精細画像を活用しながら、記載された文字・数字の分析とデータ化および記載内容と現地景観との突合による歴史的景観の遡及的復元などに取り組む。

前者は奈良時代の絵図史料、後者は平安時代の文書史料という別はあるが、いずれも古代～中世における寺院および寺領荘園の実態にアプローチしうる稀有な史料である。文化財としての適切な保存と研究資源としての積極的な活用の両立という観点から、デジタル技術を駆使した高度情報化研究による研究基盤の構築を図り、その上で古代史・中世史双方の研究者が参画し、古代から中世における寺院・寺領荘園の変容過程を断絶・連続の両面から追究することで、寺院史・荘園史研究の新段階を招来したい。

## 2. 今年度の研究計画

これまで栄山寺寺領文書の熟覧調査を実施し、朱書き・注記・合点・重ね書き・擦り消しなどについて細かく確認してきた。こうした作業を継続しつつ、その成果を踏まえ、記載内容の確定・データ化や刊本の厳密な校訂をさらに推進していきたい。

特に栄山寺寺領文書については、従来の研究で、料紙の接続関係に錯綜がある可能性や記載内容が補筆・改竄されている可能性が指摘されている。こうした点は、単に記載内容の真偽判定の問題にとどまらず、栄山寺領の形成・展開の背景にある政治的・社会的動向と連動している。高精細画像の活用や共同研究のメンバーによる熟覧調査などを通じて、料紙の接続関係や補筆・改竄の状況について改めて慎重に検証を行い、王朝国家段階の土地制度や社会経済状況を追究したい。

そして、再度現地調査を実施することで、記載内容と現地の景観・環境・地形との比較照合を一層深化させ、古代から中世における寺院・寺領荘園の変容過程の多面的な解明につなげていきたい。

## 3. 今年度の研究経過

2023年7月23日（日）、ハイブリッド形式で研究会を開催し（対面会場は早稲田大学戸山キャンパス）、三上喜孝「宇智川磨崖碑について」、坂本亮太「栄山寺領紀伊国東屋荘をめぐる諸問題」、山崎竜洋「近代栄山寺の官有地境内編入について」の3報告を得た。

7月25日（火）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を実施し、重ね書き箇所の文字の確認などを行い、新たに作成中の積文の校訂を進めた。

8月12～14日（土～月）、古代から中世にかけて栄山寺の寺領や関連史跡のある奈良県五條市および和歌山県橋本市・かつらぎ町・紀の川市において現地調査を実施した。特に紀和国境の真土山や相賀荘・隅田荘故地、栄山寺領に関連する笠田荘・洪田荘故地や東屋荘故地を踏査した。

9月24日（日）、ハイブリッド形式で研究会を開催し（対面会場は当館）、西尾知己「室町期興福寺の本末関係に関する一考察—栄山寺・久米田寺・和泉松尾寺の事例から—」、鷲森浩幸「額田寺伽藍並条里図作成頃の額田地域」、山口英男「古代荘園図のランドマーク記載—額田寺伽藍並条里図の事例を参考に—」の3報告を得た。

9月25日（月）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を実施し、重ね書き箇所などの文字の確認などを行い、新たに作成中の積文の校訂を進めた。

12月14日（木）、オンライン形式で研究会を開催し、似鳥雄一「室町後期の和国宇智郡と興福寺—大乘院尋尊の周辺史料から—」の1報告を得た。

12月22・23日（土・日）、古代から中世にかけて栄山寺の寺領が展開していた奈良県五條市において史料調査および現地調査を実施した。市立五條文化博物館にて明治期の地籍図の熟覧調査を行い、その上で、地籍図を調査した栄山寺の所在する旧小島村の現地において、小字名・地形・土地利用などの調査を行った。

2024年2月28日（水）、ハイブリッド形式で研究会を開催し（対面会場は当館）、後藤真「歴史資料・成果の可視化とその活用の課題—荘園資料を中心に」、島津美子「印影のもつ情報について—栄山寺文書の調査事例から—」、早稲田大学下村ゼミ（沼尾和輝・高砂大成）「栄山寺牒の翻刻について」、中島皓輝・公家怜亮「RA作業成果報告」の4報告を得た。

2月29日（木）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を実施し、重ね書き箇所などの文字の確認などを行い、新たに作成中の積文の校訂を進めた。

3月3日（日）、栄山寺周辺から宇智川沿いにかけて古代班が踏査し、小字名と現地景観との対応関係を確認した。

3月16・17日（土・日）、古代から中世にかけて栄山寺の寺領が展開していた奈良県五條市において現地調査を実施し、特に室町期に「栄山荘」を構成した三ヶ村（旧小島村・旧六倉村・旧牧村）を踏査した。

3月18日（月）、当館にて栄山寺寺領文書の熟覧調査を実施し、重ね書き箇所などの文字の確認などを行い、新たに作成中の積文の校訂を進めた。

#### 4. 今年度の研究成果

「額田寺伽藍並条里」については、昨年度までの科学的な分析や、他の古代荘園絵図との比較検討などを踏まえながら、絵図の記載内容について考察を進めた。

「栄山寺寺領文書」については、熟覧調査を継続して実施し、その中で理化学的な分析手法を用いた観察・分析も推進した。特に印影に関しては、デジタルの実体顕微鏡や蛍光X線分析、可視分光分析計による色計測などを使用して顔料分析を行い、水銀や鉄を含む赤色顔料が用いられていることを明らかにした。その上で、これらの使い分けにどのような意味があるのか否かについて検討を進めた。また、細かな注記や朱書きがなされている箇所について、デジタル顕微鏡を用いた観察を行い、墨書きと朱書きの先後関係を検討した。こうした作業を踏まえ、全ての条里について坪ごとに記載内容をデータ化するとともに、既刊本と比べて一層正確な積文の作成を進めた。こうした史資料の分析と並行して現地調査を行い、栄山寺境内周辺の旧小島村を中心に、条里地割・土地利用・水利・地形・小地名などの調査を実施した。

#### 5. 全期間の研究成果

本共同研究は、本館が所蔵する「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」の2点の史料を研究対象とし、古代と中世の寺院史・荘園史・村落史・制度史などを専門とする研究者が参画して通時的な検討を目指すとともに、文献史学だけでなく、歴史地理学や分析化学、情報学の研究者の参画も得て、高度情報化に対応した総合的・学際的な調査・研究を推進するものである。

そうした分析化学や情報学の手法も取り入れた調査成果としては、以下のような諸点が挙げられる。

「額田寺伽藍並条里図」については、過去の共同研究「古代荘園絵図と在地社会についての史的研究」（『研究報告』第88集、2001年）においても、顕微鏡やX線写真による分析や、復元複製を用いた検討がされている。今次の本共同研究では、先年の成果を踏まえつつ、近年の理化学的分析手法も導入してさらなる検討を行った。その結果、以下のような知見を得ることができた。第一に、型紙に付着した絵図の糸片を使用して、炭素14年代測定法による分析を行い、サンプルの四つがいずれも八世紀第三四半世紀よりも以前であるとの結果を得た。これにより、従来よりも高い精度で四字年号期の作成であることが示唆されたものと考えられる。第二に、絵図の左右端について高解像度の顕微鏡による観察を行い、布の織り方および印影の調査をおこなった。その結果、印影が左端にはみ出していることが確認でき、本来は現状よりも左右に展開していた可能性があることが確定的となった。

「栄山寺寺領文書」については、荘園史研究において著名な史料であるにもかかわらず、これまで本館の共同研究などにおいて本格的な調査・分析がなされてこなかったことから、今次の共同研究においては、基本的な情報の集約から着手した。第一に、デジタル実体顕微鏡や、蛍光X線分析や可視分光分析計による色計測などによって、記載されている文字の調査を行った。朱書部分については顔料分析を行い、水銀や鉄を含む赤色顔料が用いられていることを客観的に示すことができた。また、墨書と朱書とが重なっている箇所を詳細に観察することができ、墨

書と朱書とのいずれが先に書かれているのか、擦り消しや重ね書きがされている箇所にも本来何と書かれていたか、料紙の継ぎ目がどのような状態にあるのかについて、精度の高い観察・検討を行うことができた。栄山寺牒の研究において従来一般に使用されている『平安遺文』や『五條市史』の積文は、印刷技術上の都合や編纂方針もあって必ずしも原本通りとはなっていない。本共同研究では上記のような詳細な観察の結果を踏まえ、より原本に忠実な積文の作成に取り組んだ。第二に、10点以上が現存する平安期の栄山寺牒に捺された「大和倉印」の印影を網羅的に採取し、その形状をコンピューター上で比較・検討を行った。当該大和倉印については、印文にいくつかのパターンがあり、一部は印そのものが偽造された可能性も指摘されているが、本共同研究の調査では同じ印文であっても、牒により若干の異同を見出すことができた。第三に、栄山寺牒をはじめ栄山寺文書に見られる栄山寺領の条里坪付ごとの田畠の面積について、すべての数値をエクセル上に入力し、坪ごと／年次ごとに一覧化できるようにした。そして、これら数値をGIS上でグラフとして表現することも行った。こうした作業によって、坪ごとに面積の増減がいかに変遷したのか、年次ごとにいずれの坪の免除申請／認定がなされたのかなどが、視覚的に容易に把握できるようにした。

以上のような、基礎的な調査・分析と並行して、現地調査を複数回にわたり実施し、「額田寺伽藍並条里図」および「栄山寺寺領文書」の記載内容と現地景観との照合などを行った。具体的には、2021年度に栄山寺境内と額田寺（現・額安寺）周辺（「額田寺伽藍並条里図」記載範囲）、2022年度に栄山寺領大和国宇智郡河南三条・佐味条・重坂条故地、2023年度に栄山寺領大和国宇智郡真土条・紀伊国東屋荘および宇智郡小島村で現地調査を行い、条里遺構や水利、小地名などについて調査を行った。また、これら現地調査とあわせて、栄山寺所蔵栄山寺文書や五條市役所所蔵地籍図などの熟覧調査も行った。こうした活動により、史料の記載内容をより正確に解釈・考証することが可能となった。特に、栄山寺の所在する大和国宇智郡については、岡田隆夫氏により条里復元がなされているが、上に述べてきた史料分析と現地調査、数値データの整理やGIS上での可視化といった作業を通じて、佐味条や重坂条、真土条などの条里復元について、補正や精緻化ができると考えている。

以上のような種々の作業・活動を踏まえ、共同研究参加者個人による研究も進め、毎年数回の研究会を実施した。そこでは、「額田寺伽藍並条里図」や「栄山寺寺領文書」を古代・中世の荘園史・寺院史の上に位置付ける報告や、額田寺や栄山寺に関係する諸史料を様々な視点から収集・分析した報告が行われた。

研究期間中、館内代表者で研究副代表者である仁藤敦史は「額田寺伽藍並条里図」に関して「額田寺伽藍並条里図」（『文部科学教育通信』540, p1, 2022年9月刊）を、「栄山寺寺領文書」に関連して『藤原仲麻呂』（中公新書, 2021年6月刊）を発表した。そして、今後、上記の諸活動に基づいて『研究報告』を刊行する予定である。共同研究者各人による古代・中世の荘園史や寺院史に関する論考を収録するほか、「額田寺伽藍並条里図」や「栄山寺寺領文書」に関する基礎的な分析データなども収録し、研究資源として広く活用していただけるものを目指したい。

## 6. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- 赤松 秀亮 別府大学文学部・講師
- 坂本 亮太 和歌山県立博物館・学芸員
- 高木 徳郎 早稲田大学教育・総合科学学術院・教授
- 服部 光真 元興寺文化財研究所・研究員
- 山崎 竜洋 五條市教育委員会事務局・学芸員
- ◎下村周太郎 早稲田大学文学学術院・准教授
- 鈴木 景二 富山大学学術研究部人文科学系・教授
- 山口 英男 東京大学史料編纂所・教授
- 鷲森 浩幸 帝塚山大学文学部・教授
- 三河 雅弘 専修大学文学部・准教授
- 西尾 知己 関東学院大学・准教授（R4.4.1～）
- 似鳥 雄一 高千穂大学商学部・准教授（R4.4.1～）
- 服部 一隆 明治大学・兼任講師（R4.4.1～）
- 中島 皓輝 明治大学・博士課程（R5.3.1～, R3.4年度RA）
- 公家 伶亮 慶応大学・博士課程（R5年度 RA）
- 仁藤 敦史 本館研究部・教授
- 三上 喜孝 本館研究部・教授
- 島津 美子 本館研究部・准教授
- 後藤 真 本館研究部・准教授

## (11) 小渡遺跡を中心とする十腰内文化の研究 2021～2023年度 (研究代表者 阿部 昭典)

### 1. 目的

本研究は、館蔵小渡遺跡出土品を中心に、東北北部に展開した「十腰内文化（十腰内I式文化）」の実態を解明することを目的とする。「十腰内文化」は、北東北から北海道西南部に広がる縄文時代後期前半期の文化で、世界遺産に登録された環状列石の造営や多様な儀器が発達するなど独特の文化であり、配石や再葬など縄文後・晩期を特徴づける精神文化の初源として重要な意味を持つ。しかし、これらの文化の内実については、分かっていないところが多い。十腰内文化には、土器装飾・儀礼具の種類や有無、環状列石の有無などいくつかの点で地域差が想定されるが、小渡遺跡資料は、周辺遺跡の実態が不明瞭な五戸地域において有数の資料数を誇る。

本研究は、「十腰内文化」の実態解明のために、地域間の併行関係、植生・生業の解明、モノや人の動き、儀礼行為の復元の4つの研究視点から研究を構成する。

### 2. 今年度の研究計画

年度当初に歴博で小渡遺跡資料を実見しながら全体会議を行い、その後小渡遺跡周辺の比較資料に関する合同調査を4回程度実施する。北東北の十腰内I式土器と前後の土器編年を、共伴資料から再検討する（阿部）。さらに、関東地方の堀之内式土器・加曾利B式土器との対比を行う（中村）。これと並行して、食性分析・年代測定（國木田）や土器圧痕・炭化種子（佐々木・山下）、赤色顔料・胎土分析等（建石・菅頭）などの採取・分析を進める。石器担当の吉川、中島、上條は小渡遺跡の資料を観察し、分析の方向性を検討し、実際の分析を行う。土製品については、主に佐賀が担当し、小渡遺跡出土の皿形土製品を中心に分析を進める。小渡遺跡の現地踏査ならびに五戸町周辺の未報告資料を図化・報告する（村本ほか）。

### 3. 今年度の研究経過

【第1回研究会 4月29日～30日 国立歴史民俗博物館 全員】

代表者からの趣旨説明、研究員の自己紹介などの後、全員で小渡遺跡出土品を見学し、具体的な調査研究方法や比較のための調査など、研究計画について協議した。土器付着炭化物や赤色顔料、土器圧痕などは調査対象資料候補を抽出した。

【七戸町鉢森平（7）遺跡・八戸市松ヶ崎遺跡の調査 6月22日（佐々木・菅頭）】

小渡遺跡との比較のため、現在調査中の2遺跡を訪れ、試料サンプリング・分析などの打ち合わせを行った。

【第2回研究会 7月7日～9日 阿部・中島・上條・佐賀・佐々木・國木田・建石・菅頭・村本・中村】

小渡遺跡の所在地である五戸町や、6月に調査した2遺跡をはじめ、青森県南部～岩手県北部の博物館等を訪問し、小渡遺跡との比較資料を抽出し、今後の調査協力について各機関と打ち合わせを行った。

【小渡遺跡および比較資料の資料調査・分析】

4月30日：國木田による小渡遺跡土器付着炭化物のサンプリング（歴博）→年代測定・同位体分析の実施

7月21日：上條による小渡遺跡石皿のデンプン粒分析のためのサンプリング（歴博）→デンプン粒の観察

8月14～15日：吉川による小渡遺跡石器の分類・図化対象候補の抽出（歴博）

11月：上條・大学院生等による八戸市松ヶ崎遺跡の土壌洗浄による微細遺物回収（弘前大学）

1月：山下・大学院生等による小渡遺跡土器圧痕調査（歴博）→佐々木による同定

【第3回研究会 3月6日～8日】

小渡遺跡との比較のため、鉢森平（7）遺跡および過去に県埋蔵文化財調査センターが発掘した資料を調査し、土器の観察のほか、付着炭化物・圧痕レプリカを採取した。また、菅頭・國木田・上條から本年度の分析結果の中間報告があり、今後の方針を協議した。

### 4. 今年度の研究成果

館蔵小渡遺跡資料の調査・試料採取・分析については、土器付着炭化物・残存デンプン粒・剥片石器の器種・形態・石材分類および赤色顔料・胎土分析候補の抽出が行われた。また、比較対象資料については、6月・7月の調査によって、五戸町および周辺地域の比較研究対象を絞り込み、各所蔵機関との打ち合わせを実施した。現地調査中の鉢森平（7）遺跡では菅頭による地磁気分析のためのサンプリングを実施した。同じく調査中の松ヶ崎遺跡については、

6月・7月の調査時に遺物の取り上げ方法を協議し、土壌水洗による炭化種子の抽出を行った。3月に実施した青森県埋蔵文化財調査センターでの調査は鉢森平(7)遺跡の整理中の資料や酪農(3)遺跡、泉山遺跡など同時期の県内各地の資料調査を実施した。

本年度の研究は、構成員全員で集まり、小渡遺跡の資料を観察しながら、分析の方向性を決めることができたことで、共通認識をもって初年度の調査研究に入ることができた。さらに、五戸町教育委員会と周辺地域の調査、加えて、青森県埋蔵文化財調査センター・八戸市教育委員会が調査中の遺跡を見学し、分析に関わることができたことも当初の想定外の成果である。五戸町周辺地域は、遺跡数が少ないわけではなく、調査事例が少ないため、調査された良好な資料に乏しいことが明らかであり、そのなかで、鉢森平(7)遺跡の資料は、非常に良好な資料と言える。遺跡出土の炭化材や炭化種子のサンプルを得たことも成果である。加えて、周辺自治体の資料調査から、県埋文センターに、調査資料が所蔵してあることが分かり、これらも併せて資料調査を計画することができたことは前進である。加えて、理化学分析では、國木田氏が行った小渡遺跡の土器付着炭化物の炭素・窒素同位体分析で立地を反映した成果が得られており、この時期や地域を考える上で、重要なデータが示されたと言える。今後も、分析データを増やしていく必要がある。

#### 5. 研究組織 (◎は研究代表者 ○は研究副代表者)

- ◎阿部 昭典 千葉大学大学院・教授  
 吉川耕太郎 秋田県埋蔵文化財センター・副主幹(兼)資料管理活用班長  
 中島 将太 井草文化財研究所・研究員  
 上條 信彦 弘前大学人文社会教育学系・教授  
 佐賀 桃子 山梨県埋蔵文化財センター・文化財主事  
 佐々木由香 金沢大学古代文明・文化資源学研究所・特任准教授  
 國木田 大 北海道大学大学院文学研究院・准教授  
 建石 徹 東京文化財研究所保存科学研究センター・センター長  
 菅頭明日香 青山学院大学文学部・准教授  
 村本恵一郎 五戸町教育委員会・教育課課長補佐  
 ○中村 耕作 本館研究部・准教授  
 山下 優介 本館研究部・テニュアトラック助教

### (12) 歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に 2022～2024年度 (研究代表者 春日 聡)

#### 1. 目的

本研究は、歴博が1988年以来実施してきた研究映像制作の成果および共同研究「歴博研究映像の制作・保存・活用—苧麻文化の映像記録化を中心に」(2019～2021年度、研究代表：春日聡。以下、「前共同研究」とする)の成果に基づき、①歴博研究映像のアーカイブ映像を新規のテーマで研究活用するほか、②前共同研究において実施した福地唯方8ミリフィルムコレクション(以下、福地コレクションとする)のデジタル復元を推進し、③これらの映像を活用しながら現地調査・撮影等を実施して新たな映像記録を蓄積するとともに、④これらの成果を、上映・展示での活用のほか、オンラインでの提供など、総合的な利活用を推進することを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

年3回実施する。初回の研究会で、初年度に実施した宮古・八重山・沖縄地域の民俗宗教行事・生活文化における植物利用に関する調査、福地コレクションに関する調査について報告し、アーカイブとしての映像活用についての計画を検討する。その計画に基づき調査・研究・撮影を進め、年度後半に実施する研究会で報告する。これらの研究活動をふまえ、令和5年度の歴博映像フォーラムを実施するほか、令和6年度の映像フォーラムを計画する。また、歴博研究映像のオンラインでの提供に関する課題の解決を目指し、提供の試行を実施する。

#### 3. 今年度の研究経過

##### 【研究打ち合わせ】

- ① 7月29日10時～12時、オンライン、3名参加



歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事—門開きと神年頭—』（1996年）に関連し、今年度、糸満での調査・撮影を実施するための打ち合わせを実施した（春日・山田・内田）。

- ② 8月16日13時～18時、歴博第2会議室にて、3名参加  
昨年度の歴博映像フォーラムで歴博研究映像『ブーンミの島』を上映し実施した意見交換に基づき修正した映像を確認し、さらなるブラッシュアップをはかった（春日・分藤・内田）。

【調査・研究打ち合わせ】

- ① 8月7日～10日、宮古島市、1名参加  
歴博研究映像『ブーンミの島』の宮古島市での上映について、日程、開催方法、開催場所等について、宮古島市教育委員会と調整したほか、宮古島市歴史文化資料館にて宮古苧麻績み保存会の活動の映像記録の作成、宮古伝承文化研究センターにおいて関連する聞き取り調査と研究打ち合わせを実施した（春日）。
- ② 10月20日～23日、糸満市、3名参加  
歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事—門開きと神年頭—』（1996年）に基づく研究のため、糸満市糸満の門中行事の映像記録化に関する調査・研究打ち合わせを実施し、赤比儀腹門中の行事「9月ウハチ」、幸地腹門中の行事である「菊酒・真壁ムスメー」の調査・撮影撮影を実施した（春日・山田・内田）。
- ③ 11月4日～6日、那覇市、1名参加  
研究映像『ブーンミの島』について、那覇市で開催された「宮古の自然と文化を考える会」において上映し、質疑応答をおこなった（春日）。
- ④ 11月11日～12日、糸満市、3名参加  
幸地腹門中・赤比儀腹門中の門中墓のロケハン等、事前調査を実施したほか、歴博研究映像『沖縄・糸満の門中行事』の映像チェックをし、撮影項目を整理した。また、幸地腹門中・赤比儀腹門中の門中墓にて、清掃作業（草とり等）の様子や、25年忌香盆に向けた準備作業（雨風除けのシート設置、供物の確認等）を調査・撮影した（春日・山田・内田）。
- ⑤ 11月18日～19日、2名参加  
幸地腹門中・赤比儀腹門中の門開きの行事について調査・撮影した（春日・山田）。
- ⑥ 11月24日～26日、糸満市、4名参加  
幸地腹門中・赤比儀腹門中墓にて「25年忌香盆祭」の調査・撮影を実施した（春日・山田・川村・内田）。
- ⑦ 11月27～28日、宮古島市、2名参加  
宮古島市狩俣にて、1970年代初めに狩俣で撮影された福地フィルムの活用の可能性について聞き取り調査を実施した（春日・内田）。
- ⑧ 12月2日～4日、宮古島市、2名参加  
未来創造センターで開催された「第16回宮古伝承文化研究センターシンポジウム」に参加し、池間地区における祭祀環境を守るための取り組み、野原地区における祭祀伝承の取り組み等についてパネラーによる報告を聞き、シンポジウムの様子を映像で記録した。  
また、宮古島市前里添多目的共同利用施設において開催された「第28回 宮古島の神と森を考える会」に参加し、佐良浜地区の祭祀場所のエクスカッションによる場所や伝承の調査を実施して、その様子を映像で記録した（春日・内田）。
- ⑨ 1月20日、歴博、4名参加  
歴博映像フォーラム17「地域文化の再構築における映像の活用」を実施・参加したほか、今後の研究計画について打ち合わせをおこなった（春日・外間・川村・内田）。
- ⑩ 2月9日～10日、糸満市、3名参加  
幸地腹門中宗家にて、旧正月2日の神年頭行事の準備の様子を調査・撮影した。赤比儀腹門中宗家では、旧正月元旦の川拌み・若水取りの調査・撮影をおこなった。幸地腹門中宗家及び赤比儀腹門中宗家にて、神年頭行事の調査・撮影、また、赤比儀腹門中宗家にて、神アシビー行事の調査・撮影を実施した（春日・山田・内田）。
- ⑪ 2月23日～26日、宮古島市、2名参加  
狩俣集落センターにて開催された「狩俣の声が聞こえる—狩俣の音風景—」（ウブグフムトゥファーマー会主催、狩俣集落センター）にて、内田による講話・福地フィルム上映会を実施し、福地フィルムに撮影されている人物等について聞き取り調査をおこなった。また、宮古島市内のギャラリー「ばんびんの木」で予定している『からむしのこえ』『ブーンミの島』上映会の打ち合わせを同会場にておこなった。さらに、宮古島市役所にて、嘉数登氏（宮古島市副市長）・大城裕子氏（宮古島市教育委員会）を表敬訪問し、3月15日・16日に宮古島市教育委員会と共催で実施する『ブーンミの島』上映会について説明し、宮古テレビ・宮古毎日新聞等の

地元メディアの取材に応じた（春日・内田）。

- ⑫ 3月14日～17日、宮古島市、3名参加  
宮古島市総合博物館にて、芭蕉布の黒朝衣の調査を実施した。また未来創造センターにて、『ブーンミの島』の上映会・鼎談を実施した。ぱんびんの木にて、『からむしのこえ』『ブーンミの島』の上映会を実施した（春日・内田、ゲストスピーカー：仲間伸恵）。

#### 4. 今年度の研究成果

- ① 沖縄県の民俗文化に関する歴博研究映像のうち、『沖縄・糸満の門中行事―門開きと神年頭―』（1996年）を対象に調査・撮影・研究を進める方向性が定まり、幸地腹門中・赤比儀腹門中の関係者へ研究の目的等説明し、了解を得ることができた。1996年の歴博研究映像の中心的な撮影対象であった門中墓の清掃、門開き、神年頭のほか、「25年忌香盆祭」を調査・撮影することができた。
- ② 歴博研究映像『ブーンミの島』の宮古島市上映会を、宮古島市教育委員会との共催により開催することができた。2日間にわたり、4回の上映をおこない、延べ303人の来場があったほか、アンケートの回収率も69%（アンケート用紙：202枚、Googleフォーム：10件、合計212件）と高かったばかりでなく、両日上映後に実施した鼎談の際には、来場者から多くの発言があり、活発な意見交換をおこなうことができた。また、宮古テレビのほか、『宮古新報』（2024年3月16日、17日）『宮古毎日新聞』（2024年3月16日）などの地元メディアに取り上げられるなど、高い関心が寄せられた。
- ③ 福地唯方8ミリフィルムコレクションについては、共同研究における編集方針の検討、11月27日の宮古島市狩俣における活用方法についての地域のかたがたとの打ち合わせを踏まえて編集し、歴博映像フォーラム17「地域文化の再構築における映像の活用」で報告・上映したほか、2月24日に「狩俣の声が聞こえる―狩俣の音風景―」において地域の人びとに向けた上映を実施し、写っている人物等について聞き取り調査を進めることができた。地元メディアの『宮古毎日新聞』（2024年2月27日）でも上映会の様子が報じられた。
- ④ 令和6年度の歴博映像フォーラムとしては、歴博研究映像『黒島民俗誌』（1993年）をテーマとすることとし、おもに現代との比較の観点から研究・再編集をするものと、撮影素材の活用の観点から研究・再編集をおこなうものの、2通りの映像作品を制作する方向で計画した。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎春日 聡 多摩美術大学・非常勤講師  
分藤 大翼 信州大学全学教育機構・准教授  
外間 正明 那覇市市民文化部・文化財課・担当副参事  
大湾ゆかり 沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員
- 内田 順子 本館研究部・教授  
川村 清志 本館研究部・准教授  
澤田 和人 本館研究部・准教授  
山田 慎也 本館研究部・教授

### 【共同利用型共同研究】

#### (13) 『年中行事』の基礎的研究 2023年度 (研究代表者 堀井 佳代子)

##### 1. 目的

平安時代の内裏には、月日順に一年間に行うべき恒例の宴会・政務・神事・仏事を記した「年中行事障子」が置かれていた。宗教的儀式と政務とを区別することなく月日順に並べるスタイルは、その後の儀式書の枠組となり、この項目に儀式次第を書き加えるという形式で『九条年中行事』『小野宮年中行事』『年中行事秘抄』をはじめとする儀式書が成立する。また「年中行事障子」はその時々々の儀式の変更を反映するものであり、適宜、記載内容の加除も行われたという。

これまでの研究では『続群書類従』所収『年中行事御障子文』を、11世紀頃の「年中行事障子」に書かれていた

本文と見なし、その伝来の意義や後の儀式書への影響を論じてきた。しかし『続群書類従』の底本は明確ではなく、またその記載内容も11世紀には置かれていた国忌が記載されていない、細注が削られている等の、ある段階の「年中行事障子」の本文そのものとは言いがたい部分を含んでいる。そこで注目されるのが『年中行事』という書名で複数の家に伝来する写本である。『国書総目録』によると90余りが確認される。正月から十二月の年中行事を列挙しており、『年中行事御障子文』と同様の形式を示している。訓点を施すものもあり、これまで公家の諸家における有職故実の学習の跡を示すものとされ、内容が『年中行事御障子文』に比して少ないことから「抄出本」と見なされてきた。しかし11世紀以前の「年中行事障子」の姿を示している可能性が考えられる。まずは諸本の調査・翻刻を進めて、その異同を明らかにすることで、『年中行事』写本の系統をある程度確定することが必要である。その上で、儀式書の項目と対照させ、検討することで、記載内容の年代を確定させることができる。この作業を通して、『年中行事』という史料の性格を明らかにするとともに、「年中行事障子」との関わりを検討する。

## 2. 今年度の研究計画

- ①『年中行事』諸本の所蔵状況を調査し、各所蔵先に照会を行う。それとともに平安時代の儀式書に記載された儀式名称について対照表を作成する。
- ②国立歴史民俗博物館の所蔵する『年中行事』にかかわる以下の史料の調査・検討を行う。
  - 『年中行事・北山羽林抄』（田中穰氏旧蔵典籍古文書H-743-83）
  - 『年中行事 一条院当時』（広橋家本H-63-330）
  - 『年中行事秘抄』（広橋家本H-63-333-1・2）
  - 『年中行事（三条家年中行事）』（高松宮家本H-600-31）
  - 『年中行事（三条家年中行事）』（高松宮家本H-600-36）
 これらについてはすでに画像データが公開されているものも含まれているが、原本調査を行い、後の追記などの状況を確認するとともに、翻刻を行って諸本間の異同を確認する。
- ③上記の史料の他、宮内庁書陵部蔵の『伏見宮本年中行事』『葉室本年中行事』も調査対象とする。また天理図書館をはじめとする他の所蔵先に照会を行い、可能であれば閲覧・写真撮影または複製（コピー）を行う。調査結果をもとに分析を行う。先に作成した儀式書の項目の対照表をもとに、古記録などから復元される個別の行事の消長を踏まえ、記載内容の年代を確定させ、各写本の性格を明らかにする。

## 3. 今年度の研究経過

上記の計画を進め、『九条年中行事』『小野宮年中行事』『年中行事御障子文』と『年中行事』との年中行事項目の対照表を作成するとともに、歴博の所蔵する『年中行事』にかかわる史料について実見調査・検討を行った。またこれらの調査を踏まえて、大東急記念文庫本『年中行事秘抄』の原本調査を行った。ただしこれ以外の子定した原本調査については取り組むことができなかった。成果の一部は2023年12月2日に同志社大学で行われた文化史学会大会において「年中行事障子の再検討」として報告した。

## 4. 今年度の研究成果

国立歴史民俗博物館蔵史料について以下の知見を得た。

『年中行事 一条院当時』（広橋家本H-63-330）は、年中行事に付属する規定部分の位置が「十月」の前に置かれるという、宮内庁書陵部蔵『年中行事御障子文』（509・60）（奥書に甘露寺親長筆とある。以下甘露寺本とする。）と同じ形態を持つ。字句の異同について確認したところ、甘露寺本と共通する細字注が複数確認された。広橋家本と甘露寺本とはきわめて近い関係にあり、同系統と見なせる。

『年中行事（三条家年中行事）』（高松宮家本H-600-31）／『年中行事（三条家年中行事）』（高松宮家本H-600-36）はともに三条公忠自筆本をその子孫である実香が書写したものを元にしており祖本は同一のはずである。しかし必ずしも訓点は一致せず、この相違の背景を検討する必要がある。

『年中行事・北山羽林抄』（田中穰氏旧蔵典籍古文書H-743-83）は、『年中行事秘抄』に類するものである。なおこの見える注記は群書類従本『年中行事秘抄』とほぼ一致し、本文の年中行事の項目については群書類従本『師元年中行事』に一致することが看取される。

『年中行事秘抄』（広橋家本H-63-333-1・2）は、1は罫線を引き、二段組みで年中行事の項目名のみを列記し、朱書で訓点を示す。2は罫線を引いて年中行事とそれに関する注記を載せる。1と2とで項目名は一致しておらず、もとは別の来歴を持つものと考えられる。『年中行事秘抄』には複数の系統が存在するが、そのなかでも大東急記念文庫本は中原師元（1109～1175）による追記を残した良質の写本とされる。本写本はこの大東急記念文庫本とそ

の内容が類似し、師元によるものとされる注記の形態も同じく確認されることがわかった。大東急記念文庫における当該資料の実見により、大東急記念文庫本の裏書が、広橋家本では表に記載されるなどの相違はあるものの、項目の多くが一致することが確認された。『年中行事秘抄』諸写本において広橋家本が重要な位置を占めるものである可能性は高い。今後、さらなる両本の比較検討が必要である。

以上の調査と併せて各機関の所蔵する『年中行事』の基本情報をリスト化する作業を行った。まだ検討すべき点が多いものの、『年中行事』諸本及び『年中行事秘抄』について以下のことが判明した。

『年中行事』は本文が微妙に異なるいくつかの系統が存在し、以下の3系統があることがわかった。

- a) 甘露寺本系 甘露寺親長筆とされるものと関わるもの。三条家本とその記載内容はほぼ一致するが、若干の項目の異同が見られる。
- b) 三条家本系 三条公忠筆とされるものと関わるもの。
- c) 御障子本系 今回十分に検討することができなかったが、宮内省書陵部蔵伏見宮本『年中行事(御障子本)』(伏・276)及び国立公文書館蔵『<御障子本>年中行事』が該当する。項目がa)・b)に比べて極端に少なく訓点を伴わない。

またa)・b)の項目について、平安時代中期の状況を示すとされ『年中行事』よりも豊富な内容を持つ『続群書類従』所収『年中行事御障子文』と対照させる作業を行った。もちろん『年中行事御障子文』にしかない項目も多いのではあるが、逆にa)・b)にはあるのに、『年中行事御障子文』にはない項目も複数確認された。それは平安時代中期以降に新設された儀式でもなく、「四月朔 視告朔事」のような律令制以来行われているようなものも含まれる。『年中行事御障子文』と『年中行事』の関係については引き続き検討を続けたい。

また広橋家本『年中行事秘抄』の性格解明についての手がかりを得たことも成果の一つである。大東急記念文庫本と関係する可能性が高いことがわかった。

## 5. 研究組織 (◎は研究代表者、○は研究副代表者)

◎堀井佳代子 京都精華大学国際文化学部・専任講師

○小倉 慈司 本館研究部・教授

## (14) イソガネの形状と機能に関する研究

2023年度

(研究代表者 瀬川 渉)

### 1. 目的

本研究は、館蔵資料群「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」のなかからイソガネ134点を対象とし、各資料の形状を分類整理し、館外各地の資料群とも比較をおこなうことで、形状の差と類似の生じる要因を、海女・海士個人が得意とする漁場や海洋環境、他地域からの伝播、歴史的変遷という視点で明らかにするものである。

イソガネはアワビなどを捕採するために必要不可欠な道具であり、鹿角製のアワビオコシが古墳時代の遺跡等から発掘されるなど、歴史的にも裸潜水漁撈の基本となる道具である。しかしながら、本研究の対象であるイソガネ134点は、大きさや形状は同一県内でも一様ではない。研究代表者は、2022年度共同利用型共同研究で館蔵「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」のイソガネを対象とし、長崎県や神奈川県を中心に館外各地のイソガネも含め実測・撮影した。長崎県で多く見られる短銃型のイソガネは他と一線を画す形状であるが、それ以外でも、アワビだけでなくウニの捕採も可能なように先端部が鉤状になっているもの、イソガネ自体に重量があり潜水する際のオモリの役割があるもの、先端部の反りが違うものなど様々な形状が存在することが2022年度の共同研究で明らかになった。2023年度は地域を限定せず、収集範囲が全国に及ぶという資料群の特徴を生かし、それらイソガネの形状の差や類似を全国規模で地域別に整理し、海女・海士の移住や出稼ぎによる影響、文献資料や考古遺物との比較による形状の歴史的変遷を検討する。

### 2. 今年度の研究計画

本研究は、館蔵「裸潜水漁撈および蛸漁関係用具」のうちイソガネ134点(25都府県と韓国済州島で収集)と館外コレクションのイソガネを研究代表者が実測・撮影し、先行研究や各地の報告書・水産誌を参照する。館外コレクションの実測・撮影にあわせて、各地での聞き取り調査も実施する。また、各地の発掘報告書等でイソガネとされる遺物も参照しながら(縄文~中世期までと近代とを安易に連続性をもつものとして語らないよう留意する)、歴史的変遷を検討する。

### 3. 今年度の研究経過

館蔵コレクション「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」のイソガネを実測・撮影した。また、以下の館外コレクションの実測・撮影を実施し、あわせて、岩手県久慈市小袖、三重県志摩市あづり浜、福井県坂井市雄島において聞き取り調査を実施した。

- ・国指定重要有形民俗文化財「八戸及び周辺地域の漁撈用具と浜小屋」のイソガネ
- ・国指定重要有形民俗文化財「伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁撈用具」のイソガネ
- ・国指定重要有形民俗文化財「蒲江の漁撈用具」のイソガネ
- ・久慈市歴史民俗資料室のイソガネ
- ・志摩市観光協会海女資料館のイソガネ
- ・佐田岬半島ミュージアム所蔵のイソガネ
- ・越廼ふるさと資料館所蔵のイソガネ

### 4. 今年度の研究成果

本研究は、館蔵資料群「裸潜水漁撈及び蛸漁関係用具」のなかからイソガネ134点を対象とし、各資料の形状を分類整理し、館外各地の資料群とも比較をおこなうことで、形状の差と類似の生じる要因を、海女・海士個人が得意とする漁場や海洋環境、他地域からの伝播、歴史的変遷という視点で明らかにするものである。以下では、イソガネの形状と機能に分けて研究成果の詳細を述べる。なお、各地域で呼称が違うが本報告ではイソガネに統一する。

#### ○イソガネの形状

イソガネが主に対象とする捕採物はアワビであるが、トコブシ、ウニ、魚を対象とするものもある。アワビを対象とする場合、その多くはヘラ状である。ヘラ状の部分をアワビと岩との間に差し込み、テコの原理で岩からアワビを剥がし捕採する。そのヘラ状の部分に反りをつけているイソガネが館蔵コレクションにも館外コレクションにも複数あり、反りの強弱も一様ではない。志摩市あづり浜での聞き取り調査では「個人の好みで反りをつける」とされ、坂井市雄島での聞き取り調査では「アワビが岩に密着しているときには反りがあった方が差し込みやすい」とされていたことが分かった。また、志摩市観光協会海女資料館にはイセエビ用の先端がヘラ状で二股になっているイソガネが展示されていた。岩穴に潜むイセエビが逃げないように押さえつけるために使われていたイソガネで、現在は使われていないとのことであった。

ヘラ状ではなく鉤状のイソガネは岩手県と青森県に多く分布し、その形状は見突漁で使用するカギの一種と類似している。もちろん、見突漁のカギは数mの竹木の先端に付け、しならせて捕採するため完全に同形状ではない。岩手県洋野町種市では、昭和50年代前半頃までカギ獲り漁（見突漁）で使用していたカギの柄を短くして裸潜水漁に使用していたが、傷がつきやすいため先端部を薄く平面にし湾曲を浅くする改良がなされた。ただし、岩手県で収集された館蔵コレクションはすべて鉤状のものであるが、先端部は平面ではない。久慈市歴史民俗資料室所蔵の鉤状イソガネも先端部が平らなものはない。同じく青森県で収集された館蔵コレクションは3点あるうち1点（F-13-125、昭和47年収集）の先端が平らになっているが、資料データではウニ採集用となっている。洋野町種市（旧種市町）での改良前に同形状のものがウニ用として使用されていたことになるが、館蔵コレクション数も少なく今後の課題としたい。久慈市小袖での聞き取り調査で実見したアワビ用の鉤状イソガネも先端部は平らではなかった。小袖の海女の主な捕採物はウニで、アワビはほとんど捕らないという。少なくとも岩手県と青森県では見突漁での主な捕採物がウニやアワビであることが、この地域でのイソガネの形状に影響を与えていることは確かである。

八戸市博物館が所蔵している「八戸及び周辺地域の漁撈用具」のイソガネは8点あり、そのうち6点が鉤状のものである。残りの2点は先端がヘラ状のイソガネであり、そのうち1点が館蔵コレクション F-13-127のような朝鮮系の海女が使用する形状のものであった。同館の調査によると、昭和30年頃には朝鮮系の海女がいて、何かの事情で潜れない家の助っ人として活動し道具も朝鮮系のイソガネだったという。愛媛県伊方町の佐田岬半島ミュージアム所蔵のイソガネにも朝鮮系のイソガネがあった。同館の調査によると、佐田岬でも朝鮮系の海女がおり朝鮮系のイソガネを使用していたという。館蔵コレクションでは韓国で収集された4点のイソガネがあり、3点がアワビ用である。そのほかにも、鹿児島県1点（F-13-1）、大分県1点（F-13-7）、愛媛県3点（F-13-28～30）、鳥取県1点（F-13-44）が朝鮮系イソガネである可能性が高い。朝鮮系の海女が各地でどのような役割や生活をしていたのか、朝鮮系のイソガネがどのように各地で受容されたのかは今後の課題としたい。

考古遺物との比較として、岡山県倉敷市の塩生遺跡で検出された中世土壙墓の副葬品のイソガネと思われる遺物

と飯蛸壺が出土した例を述べる。イソガネと思われる遺物の長さは約20cmで先端は折れ曲がっているため、現在の小型のイソガネ（例：館蔵コレクション F-13-80）に近いものと思われる、木柄の部分を手のひらで覆い隠すように握りながら使用していた可能性がある。先端部の片側は張り出したようになっており、先端部でも張り出し部でもアワビと岩との間に差し込めるよう工夫されている可能性などが考えられる。張り出しがある例としては館蔵コレクション F-13-31が類例として挙げられるが、張り出しの位置・方向が違う。F-13-31が館蔵コレクションの収集地が徳島県であるため、塩生遺跡の「イソガネ」との歴史の変遷を検討できる余地はあるが、考古遺物の例・数量が少なく現状は難しい。ただし、現在は裸潜水漁がなされていない岡山県において、中世の海士と思われる人物の副葬品から「イソガネ」と飯蛸壺が見つかったことは、示唆に富むものである。近世近代も含め、館蔵コレクションの収集地ではない地域であっても何らかの資料が出てくる可能性がある。もちろん、近代までは干鮑での流通が主で、捕採による傷が商品価値にあまり影響しない点や自家消費用の可能性も考慮してイソガネの形状を検討しなければならない。

#### ○イソガネの機能

イソガネの機能は対象物を傷つけずに捕採することである。また、ガンガゼを除去したりアワビを見つけるために岩を裏返したりなど、捕採の障害を取り除く機能もある。それら機能を1つのイソガネに付与する場合にはその両端を使用することは、2022年度共同研究「裸潜水漁撈用具の地域差と伝播」で明らかにしたとおりである。ただし、両端のどちらを主として使用するかは地域や時代によって異なる。大分県佐伯市教育委員会所蔵「蒲江の漁撈用具」のイソガネで持ち手のところにビニールテープを巻き、滑り止めをしているものが2点あった。いずれもヘラ側に寄せてビニールテープが巻かれており、カギ状の部分の主として使用していたと考えられる。

本研究で新たに明らかになった機能として、「ウニ割り」がある。福井県坂井市雄島では、ウニを割り中身を出す際に、イソガネで1分以上かけて1つのウニを叩いていた。雄島ではウニの捕採にイソガネを使わないため、ウニを叩くのはアワビ用のイソガネであった。聞き取り調査によると、館蔵コレクション F-13-47が収集された昭和50年頃はイソガネを使用してウニを割っていた。イソガネが裸潜水漁にのみ使用されるわけではないとすれば、先述の塩生遺跡の「イソガネ」の張り出しもウニ割りなどの作業に使用されていた可能性もあり、検討する必要がある。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎瀬川 渉 横須賀市自然・人文博物館 学芸員

○松田 陸彦 本館研究部 准教授

### (15) 雑誌『SOGI』から見る近年の葬儀の変化についての研究 2023年度 (研究代表者 宮澤 安紀)

#### 1. 目的

本研究は、これまで日本の研究者によって「第二の近代化」「第二の個人化」などとして捉えられてきた近年の日本の葬送をめぐる状況の変化を、1991年から2016年まで刊行された葬儀の専門誌から具体的に跡づけようとするものである。

日本では高度経済成長期以降、都市化や家族の個人化によって葬送が急激な変化を遂げてきた。葬儀については従来葬祭を担っていた地域共同体が解体したことでそれに代わる葬儀社が進出し、葬儀の商品化や消費者意識の高揚を背景に、無宗教葬や小規模化を含む多様化が進んだ。一方で墓のあり方をめぐっても、特に1990年代以降は父系による継承を前提とした一般的な「家の墓」を相対化することで、散骨や樹木葬、また手元供養などの墓を作らない選択肢も普及した。このような死と葬送をめぐる変化は、これまで日本の研究者によって「近代化」や「個人化」などの言葉で捉えられてきたが、特に1990年代以降の、伝統や慣習を否定し自己の選択の自由を重視するような傾向は、「第二の近代化」（森謙二 2010）や「第二の個人化」（村上興匡 2018）などの言葉で表現されてきた。

しかし、こうした議論は具体的なデータから立ち現れたものと言うよりは、葬送の動向全体を抽象的に捉えたもので、「近代化」「個人化」といった言葉で表現される意味内容も曖昧である。また、1990年代以降の状況は、どちらかと言えば散骨や樹木葬などの、新たな葬法に着目した研究が多く（金セツピョル 2019, Boret 2014など）、葬儀自体の変化を跡付けた実証的なデータはいまだに乏しい。

そこで本研究では、1990年代以降に行われた葬儀の様子を、多数写真資料として残している唯一の雑誌である

『Sogi』を分析対象とすることにより、この変容が実際にどのようなものであるのかを、実証的かつ具体的に跡付けることを目的とする。

## 2. 今年度の研究計画

本研究で主な資料とする雑誌『Sogi : the magazine for funeral service』（表現文化社）は、葬送ジャーナリストとして広く知られる碑文谷創氏が編集長を務め、1991年1月から2016年9月まで隔月で刊行された死と葬送について扱う専門誌である。本誌には1991年から2004年まで、毎号4,5件の葬儀を紹介する「最新葬儀レポート」や、その他の記事で使用された葬儀の取材写真が収録されており、当時実際に行われていた葬儀を、著名人の葬儀が中心ではあるが、具体的に知ることができる。

本研究では歴博に所蔵されているこの「表現文化社『S O G I』葬儀記録写真」(F-542)を用いて、葬儀の変容が指摘されていたこの時期に、具体的にどのような葬儀が行われ、またそれがどのように変容していったのかを、個々の葬儀事例を質的に分析することで検討する。歴博所蔵の資料には雑誌に掲載されていない大量の写真があるため、雑誌だけでは窺えない事例の詳細を把握する。

## 3. 今年度の研究経過

まずは歴博にて、資料のリスト化と必要なデータ調査を行う。この間、葬儀研究を専門とする山田慎也教授（民俗学）とも意見交換を行い、データベースにはない1980年代以前の葬儀との違いについても検討した。また『Sogi』の編集長であった碑文谷氏にインタビューを行った。そして『Sogi』の廃刊後や新型コロナウイルス拡大後の最新の動向も捕捉する。10月以降は得られたデータの分析と成果物の執筆の期間に充てた。

## 4. 今年度の研究成果

この資料の分析によって、「無宗教の葬儀」の場合、僧侶が介在しないため、引導により死者を仏道に導きあの世に送り出すという宗教的な意味を持った儀式が丸々省略される。その代わり、遺族や参列者が故人を偲び、別れを告げる時間に重点が置かれることになる。宗教者に委託することで死者をあの世界へ位置付けるのではなく、自分たちの力や意思で死者に別れを告げようとする意識が見える。

つまり「無宗教」の本義は仏教そのものに対する反発というよりは、宗教的な形式によって課される制限を取り払い、式次第、音楽、演出などにおいて、故人や遺族が自分たちの自由にできる範囲を広げる試みであると言える。その意味で、まさに「自己」を中心とした葬儀のあり方であると言える。

しかしながら、無宗教葬には決まった形式がないため、故人、あるいは残された遺族や友人たちが、細部にわたって準備を重ね、作り上げていく必要がある。故人の意思に同調し、実現してくれる家族や友人がいてこそ無宗教葬は可能となっていることが判明した。

## 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎ 宮澤 安紀 國學院大學・ポスドク研究員
- 山田 慎也 本館研究部・教授

# (16) 近代日本農村における家事科教育に関する歴史的研究 2023年度 (研究代表者 徳山 倫子)

## 1. 目的

本研究では、農村における家事教育に着目し、教育者が掲げる理念や教育実践と地域住民の要望のズレについて、当時の教育雑誌や郷土史料の分析から明らかにすることを目的としている。

分析方法としては、家事科および裁縫科教員の投稿が掲載された雑誌『家事及裁縫』や、地域社会で家事科教育を担った教員たちが執筆を担った教育資料を中心に、学校教育に着目して分析を行う。こうした史料の分析を通して、教科書の示す指導内容が農村の生活実態と合わない中で、いかに現場に即した教育を行うべきかと苦戦する教員の姿を描き出したい。ただし、学校教育に関する史料の分析のみでは、初等教育の就学率や実業補習学校への進学率が男子と比較して低調であった農村の女子教育の全体像を見通すことができない。そこで、関連史料として社会教育団体であった処女会の機関誌『処女の友』やその後継誌を閲覧し、社会教育と学校教育の教育内容や理念の比較も行いたい。かかる史料には裁縫塾などの他の女子教育施設との協力／対立関係に関する記述が散見されるこ

とから、これらの分析により農村における未婚女性への教育のありようの全体像を見通すことも期待できる。

## 2. 今年度の研究計画

4～6月は国立歴史民俗博物館にて、雑誌『家事及裁縫』（家事・家庭科関連資料H-2046-1、東京家事講習所、1927～1945年）、並びに郷土史料として福島県石城郡の女性教員による『郷土に立脚せる農村方面の家事科教授細目』（家事・家庭科関連資料H-2046-10）や、山梨県西山梨郡の教育史料である『家事科協議会々員名簿その他』（甲府教育関係資料H-851-12-6）を閲覧する。『家事及裁縫』は他機関でも所蔵されているが、申請者が調べた限りでは国立歴史民俗博物館は国内で全巻号を所蔵している唯一の研究機関である。限られた調査日数において、特に申請者の所属・居住地がある関西圏で閲覧することが困難な巻号や、紙質の劣化が懸念される戦時期の巻号を優先し、デジタルカメラやスキャナーなど、資料にダメージの少ない方法を用いつつ調査を実施する。また、年間を通じて、奈良女子大学等の同雑誌を所有する関西圏の研究機関での史料調査や、郷土史料の収集を継続する。8月と9月には、雑誌『處女の友』（處女會中央部、1920～1941年）の史料調査を日本近代文学館にて行う。可能な限り年度の前半年の間に調査を進め、10月以降は調査結果の分析を開始する。『家事及裁縫』に掲載された裁縫・家事科教員による投稿や郷土史料から、農村の未婚女性に学校教員がどのような教育を行おうとし、地域住民との間にいかなる摩擦が生じていたかを具体的に考察する。加えて、『處女の友』の分析から社会教育と学校教育の相違点や共通点を考察し、農村の未婚女性への教化・啓蒙がいかに行われようとしたかを包括的な観点から検討し、結果をまとめる。

## 3. 今年度の研究経過

『青年学校・青年訓練所関係書類』（甲府教育関係資料H-851-12）には、1919年にそれまで理科に含まれていた家事が教科として独立し、高等小学校で「家事裁縫」が必修、「家事」が選択科目となった翌年の1920年に実施された、山梨県内の初等教育研究会家事科協議会における研究発表の内容が綴られた冊子が含まれている。この段階ですでに教員は家事教育の「地方化」を大いに意識し、いかなる方針で家事教育を実施すべきかを活発に議論していたことが窺える。また、同資料に含まれている朝日青年学校の『家事科教授細目』からは高等小学校より年齢層が上の生徒に向けての家事教育の内容が明らかとなり、『青年学校ニ関スル調査表綴』からは甲府地域の青年学校の概況が、『在籍生徒名簿』から生徒の保護者職業が判明することから、製糸業が盛んであった同地域の地域性をふまえながら農村における家事教育の実態の分析を進めることが可能であると考えている。

『郷土に立脚せる農村方面の家事科教授細目』（家事・家庭科関連資料H-2046-10）は、福島県石城郡における高等小学校の家事科教授案であり、「郡内統一した家事科細目を作り歩調をそろえ」、「最も適切なる家事の教授」を行うことを目的として1935年に発行された。同資料からは教員が郷土教育を強く意識し、各地の産業・経済・生活様式に適した衣食住の管理方法の教授が目指されたことがわかる。

『家事及裁縫』については、国立歴史民俗博物館において第1巻～第18巻が所蔵されていることを確認したが、全ての巻号を熟覧する時間がなかったため、報告者の所属先のある関西地区の大学等に所蔵がない巻号やインターネット上で公開されていない巻号を優先し、第13巻（1939年）・第15巻（1941年）～第18巻（1944年）の熟覧と撮影を行った。同誌には全国の家事科及び裁縫科教員や教育関係者から幅広く原稿が寄せられ、初等教育から中等以上の教育段階、また、都市及び農村といった様々な立場から家事及び裁縫教育に関する種々の情報が発信されていた。こうした記事においては美談や理想論ばかりではなく、教育現場で教員が直面した問題が率直に綴られたものが少なくなく、詳細な検討により本研究が課題としている農村の家事教育の実態に迫ることができると考えている。国立歴史民俗博物館では他機関では認められていない資料の複写が可能であったため、非常にスムーズに調査を進めることができた。今年度中に調査が完了しなかった巻号については、次年度以降も当館にて調査を継続したいと考えている。

## 4. 今年度の研究成果

本研究課題では、対象とする資料の分量が想定よりも膨大であったため、年度内に内容の分析を完了し研究成果を公にすることができなかった。今後は『家事及裁縫』の資料調査を完了させるとともに、研究成果を学会等の学術集会で報告し、学術論文を執筆する予定である。

## 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎徳山 倫子 京都大学農学研究科・研究員

○樋浦 郷子 本館研究部 准教授



## (17) 『頼資卿改元定記』の利用とその伝来に関する研究 2023年度 (研究代表者 中島 皓輝)

### 1. 目的

本研究は、広橋家旧蔵記録文書典籍類『頼資卿改元定記 嘉禄・安貞・寛喜』(H-63-239, 以下、「歴博蔵本」)の利用とその伝来の考察を目的とする。本史料は勘解由小路頼資の日記から改元定に参加した際の記事を子の経光が抄出したものとみられている。当該期における改元定の状況を詳細に知ることができるのみならず、同家家祖である頼資がどのような点に留意して改元定に参加していたかが判明し、藤原北家日野流からの分家時の当主がどのように公事情報収集を行っていたかが明らかとなる。しかし、本史料は巻首部分を欠き、前半部分に多くの欠損箇所がある。『大日本史料』における翻刻でも同様の状態となっている。本史料と同内容の記載は宮内庁書陵部蔵柳原家旧蔵『改元御元服并御幸等部類』(柳・1140)にも収められているが、こちらでは歴博蔵本で欠失する巻首部分の内容を備え、また欠損箇所も少ない。従って、両本を比較検討することでより正確な内容を復原することが可能となる。このことは抄出元であり現存しない頼資の日記本文を復原する試みでもある。また、柳原家旧蔵本の同記載にかかる奥書によれば、当該部分は戦国期の当主広橋兼秀による書写本を親本としている。現在のところ広橋家旧蔵記録文書典籍類内に該当の兼秀書写本は確認されないが、戦国期においても頼資の作法が参照されていたことをうかがわせるものであり、他の兼秀書写本との比較から書写時期などを検討する。両本の比較により鎌倉期から戦国期に至る時期における『頼資卿改元定記』の伝来や書写・利用状況を把握することが可能となり、朝廷の実務に関わっていた貴族家中世を通じた公事学習の様相が明らかとなることが見通される。

### 2. 今年度の研究計画

#### ①歴博蔵本の原本調査および宮内庁書陵部蔵柳原家旧蔵『改元御元服并御幸等部類』との比較検討

歴博蔵本の書誌的事項(構成, 法量, 紙数)を確認する。これらの情報および本文の欠損箇所を柳原家旧蔵『改元御元服并御幸等部類』と比較・検討する。柳原本については宮内庁書陵部にて原本を閲覧(および紙焼写真の入手)する。

#### ②『頼資卿改元定記』の本文復原, 柳原本の周辺調査

歴博蔵本と柳原本との本文比較から、欠損の相似する箇所、相違する箇所をそれぞれ特定する。相違箇所から本文の復原を行い、相似箇所から欠損発生の順と各本の書写時期との関連を検討する。また広橋兼秀の『兼秀公記』や柳原紀光の『愚紳』における関連記事の有無を調査する。後者については宮内庁書陵部の他、西尾市岩瀬文庫においても調査を行う。

#### ③歴博蔵本・兼秀書写本作成の背景

各本書写時期における書写者の立場や時代背景から書写の必要性が高まった状況を考察する。

### 3. 今年度の研究経過

本研究では、①歴博蔵本書誌情報の整理、②経光の部類時期・背景の解明、③宮内庁書陵部蔵柳原家旧蔵『改元御元服並御幸等部類』所載の同内容(以下、「柳原本」)との比較による頼資日記本文の復元、④柳原本親本の兼秀本の書写時期・背景の解明、⑤紀光の書写背景の解明、を検討課題に掲げた。

まず①・②について歴博蔵本の体裁や本文および紙背文書の調査を行った。最初に法量などの調査を行い、各紙に付された朱字の数字と実際の紙数とのずれなどを整理した。次に紙背文書について検討し、翻刻および内容の解釈を進めた。

続いて③について、歴博蔵本と柳原本とを比較し、歴博蔵本の欠損部のうち168字(本文119字・細字49字)を復元した。また④について、現存の『兼秀公記』のうち大永五年・六年の3巻(H-63-636~638)、兼秀が奉行として参加した改元定の史料である『享禄度改元申沙汰愚記草』(H-63-176)と『天文度改元愚記草』(H-63-206)、兼秀の改元関連史料である『菅大府記 改元部』(H-63-182)と『改元部類記 平戸記 範輔卿記 中光記 寛喜・貞永』(H-63-164)の調査を行い、柳原本が広橋兼秀自筆本を親本としている点について、戦国期の兼秀が鎌倉期の頼資の改元記録を書写することはあり得るのか、という点から検討を行った。

最後に⑤について、柳原紀光の日記『愚紳』、広橋家旧蔵記録文書典籍類『後鳥羽院日吉御幸記』(H-63-50)、京都府立京都学・歴史館蔵柳原家旧蔵『日野大福寺流改元勘進字』(特/927/647)、西尾市岩瀬文庫蔵柳原家旧蔵『名目鈔』(103-162)の調査を行い、兼秀本をどのようにして紀光が手に入れ、書写したかという点について検討した。

#### 4. 今年度の研究成果

まず歴博蔵本の調査では、本文を大日本史料所収の翻刻と比較し一部を修正した。また紙背文書に暦仁～仁治ごろのものが含まれることを確認、本史料を経光の作成とする従来の見解を踏まえ、任参議直前の時期の作成と推定した。また紙背には経光による書き入れとみられる箇所が確認され、曾孫の兼綱の日記に頼資の日記として引用される内容に合致した。本文に組み込まれていない点は頼資日記の原形態に通じる可能性がある。

次いで宮内庁書陵部蔵柳原家旧蔵『改元御元服並御幸等部類』収載の同内容（以下、「柳原本」）との比較を行い、歴博蔵本の欠損部のうちおよそ170字を復元した。これにより歴博蔵本の前欠部が少なくとも一紙分であることが判明した。なお、柳原本には歴博蔵本にはない頼資日記とみられる内容が含まれており、これが前欠部に入っていたものかについてはなお検討が必要である。

最後に柳原本の親本である広橋兼秀本について調査を行った。現存の『兼秀公記』からは書写の様子を確認できないものの、『享禄度改元申沙汰愚記草』（H-63-176）、『天文度改元愚記草』（H-63-206）では改元定において頼資や経光と同様に行動することを重視しており、兼秀が先例把握を目的として歴博蔵本の書写を行った可能性が高いと判断した。享禄改元時にはすでに頼資の作法を把握しており、書写時期は大永年間以前と考えられる。なお、柳原紀光による兼秀本の入手・書写の経緯は確認できていないが書写翌月の日記に嘉禄改元記事の一部が引用されていることを確認した。

本研究により頼資・経光・兼秀の改元定への関わり方や公事情報の継受が明らかとなり、広橋家にとっての改元定の位置づけの解明に迫りうる成果となった。さらに分析を進め、学術論文として発表する予定である。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

- ◎中島 皓輝 明治大学大学院・文学研究科・史学専攻・博士後期課程3年
- 田中 大喜 本館研究部・准教授

### (18) 「三大考」論争関係資料の調査研究 2023年度 (研究代表者 三ツ松 誠)

#### 1. 目的

『古事記』の記述と西洋天文学知とをつなぎ合わせ、宇宙の成り立ちを図解した服部中庸「三大考」は、本居宣長によって『古事記伝』の附巻とされ、世に広がった。そして文献注釈を旨とする学者からは批判的となり、『古事記伝』本編とは異なり、現代の上代文学研究者から先行研究とはみなされていない。他方、尊王攘夷思想の一流流として知られる平田篤胤の出世作『靈能真柱』は、「三大考」を先行研究としつつ、宇宙の成り立ちそして死後世界の在り方について代案的解釈を提示する作品であり、復古神道の立場に基づく神道国教化政策にもつながるものとして、画期的な意味を持った。「三大考」は、国学の文献学的展開と宗教的展開の分かれ目に位置する作品なのだ。

こうした「三大考」批判派と篤胤をはじめとする継承派との間での論争は、「三大考」論争と呼ばれて古くから研究者の注目を浴びてきた。近年の議論としては金沢英之『宣長と『三大考』』（笠間書院、2005）があり、服部中庸の草稿を紹介し、論争関係書目録を付すなど、研究の今日的水準を示している。しかし残念なことに、国立歴史民俗博物館所蔵平田篤胤関係資料の閲覧の途が幅広い研究者に開かれたのは、当該書の刊行より後の時点でのことだった。論争の一方の極であった平田篤胤とその後継者に関する資料には、この問題に関する一次史料が少なからず含まれており、研究をさらに進める可能性が秘められていると見込まれる。

本研究の課題は、金沢氏らの先行研究を踏まえ、平田篤胤関係資料から「三大考」や国学宇宙論に関する著作・草稿・書簡について、資料情報の整理また紹介を行うことで、「三大考」論争研究をさらに発展させる基礎を築くことにある。

#### 2. 今年度の研究計画

まず、『平田篤胤関係資料目録』を手掛りに、平田篤胤やその家塾気吹舎の関係者が、「三大考」や宇宙の在り方について論じている史料、あるいは議論の参考にしたと思われる他者の議論を平田篤胤関係資料中から抽出し、閲覧・調査する。その上で、知られていない情報が記された資料だと判明したものについて、詳細な検討を加える。現時点では平田篤胤関係資料のインターネット画像公開はなされておらず、館蔵資料の現物または複製を館内で閲

覧・調査するかたちになる。新型コロナウイルス禍の今後の状況次第であるが、研究期間中に三度の訪館を予定している。

平田篤胤関係資料のうち、書簡・草稿類についてはおおむね撮影が済んでおり、即日閲覧可能な画像が用意されている。基本的にはこれらを利用して研究を進める。

他方、版本類に関しては、未撮影のため史料現物の閲覧（ものによっては撮影）が必要になることが見込まれる。予定している検討対象は、『靈能真柱』（H-1615-10-3-10・11, H-1615-10-4-9）、『鳥おとし』（H-1615-10-1-34）、『しりうこと』（H-1615-10-1-80）、『古事記伝』十（H-1615-10-4-32-11）、付箋書入れ付き『三大考』（H-1615-10-4-32-46）になる。

研究の途中経過をふさわしい学会・研究会で報告することによってフィードバックを得て、作業の方向性を修正する。必要に応じて、他機関での文献調査によって情報の不足を補うこととする。

### 3. 今年度の研究経過

『古事記』の記述と西洋天文学知とを結び付け、太陽・地球・月の成り立ちを図解した服部中庸「三大考」は、本居宣長によって『古事記伝』の附巻とされて世に広がると、平田篤胤『靈能真柱』のような後続作品を生む一方、宣長の後継者である本居大平などから批判を招いて、論争になった。本研究の課題は、先行研究を踏まえ、国立歴史民俗博物館所蔵平田篤胤関係資料を調査して、そこに存在する「三大考」論争・その後の国学宇宙論に関する資料の情報を整理・紹介することにつなげ、当該テーマに関する研究のさらなる発展の基礎を築くことにある。

本研究ではまず、デジタルデータ化が済んでいなかった写本・版本を調査した。その後デジタル化が済んだ写本・書簡類の撮影データを時間の許す範囲で確認するとともに、他機関所蔵の関連資料との比較調査・校合を進めた。その結果、次のようなことが分かってきた。

### 4. 今年度の研究成果

「三大考」論争をめぐる現在の研究水準を示す議論として、詳細な文献目録や関係年表を備えた金沢英之『宣長と『三大考』』（笠間書院、2005）が挙げられる。しかし同書は国立歴史民俗博物館所蔵平田篤胤関係資料が広く研究利用できるようになる以前の時期の作品であった。そこで以下、この資料群の中に確認された関係資料を紹介していく。

最初に、平田篤胤関係資料の一般公開後、既に紹介がなされている新出資料について整理しておく。

まず、研究代表者自身が既に取り上げている（拙稿「学者と講師のあいだ——平田篤胤『靈能真柱』における安心論の射程」『死生学研究』13, 2010）、未完の講釈台本である「靈能真柱講本」が挙げられる。同書の内容から、篤胤が『靈能真柱』は自身の学者としての力量を示すものであり、大衆向けとしては難しすぎると認識していたことが明らかになった。これによって『靈能真柱』を神道の立場から民衆に宗教的救済を与えようとした書として位置づけた既存の議論の限界が示されたと言える。

『宣長と『三大考』』の段階では知られていなかった論争関係資料として次に指摘すべきものとしては、新政府が神道国教化政策を採り、宣教使周辺の国学者が神学論争を起こした際の資料が挙げられる。「今説弁の事に付思ひ得つる事共少々左に記す」「落合直澄が天地異説の略図に付論説」「今説弁中改められたき事どもを述る条々」などは、既に存在は知られていた落合直澄『三大考後弁（今説弁）』とそれに対する批判である平田鏡胤「撞木のまにまに附録」、あるいは矢野玄道『予見国考証』といった論争書が、どういう文脈で著されたものであったのかを、よく明らかにしてくれる資料だと言える。これらについては、遠藤潤「平田国学における〈霊的なもの〉」『スピリチュアリティの宗教史』下（リトン、2012）、小林威朗『平田国学の靈魂観』（弘文堂、2017）が既に取り上げている。

次いで、管見の限りこれまであまり注目されていなかった資料を紹介する。

まず、著作としては既に知られているものの、平田家本に固有の特徴があるものとして、「三大考」それ自体の版本、『古事記伝十七附巻』が挙げられる。平田家本には、「三大考」にも登場する天の柱等その他についての伴信友の説を詳しく紹介した別紙が二点、張り込まれていた。これが「三大考」論争の代表的論者である篤胤と信友の直接的やり取りを反映したものなのかどうかについては、現段階での判断を避けたいが、注目に値しよう。

また、服部中庸自身が「三大考」の説を放棄・更新して著した「七大（旋）考」の写本も発見された。同書は「三大考」が示した太陽・地球・月だけでなく、水星・金星・火星・木星・土星についても神話的な意味付けを与えており、当時の天文学的知識の広がりに対応する形で説明できる範囲を広げた作品なのだが、文献学的に見れば『古事記』の注釈書という枠組みを大きくはみ出したものになってしまい、本居派の内部での反応も薄く、未完成に終

わったと考えられてきた。そして服部家と本居家に残る写本が知られていただけであった。篤胤も見てみたいと書簡中で言及してはいたものの、その後これを確認して自説に組み込んだ様子はなかった。

今回確認できた「七大考」の写本は、筆跡の類似する他の写本から推定するに、紀州藩の平田／本居門人である参沢明が作成したものと考えられる。「気吹舎日記」にも、天保十二年の末に、明から「七大考」が届いたという記事が発見できた。これは篤胤の秋田追放期の話になる。篤胤がより若い時期、「三大考」論争を戦っていた頃には、「七大考」を入手できていなかった可能性が高い。明はこの時期、「三大考」論争関係書を気吹舎から入手している。論争が盛り上がった頃から時代を下っても、興味を持つ門人は居たのである。

さらに、嘉永年間に篤胤の婿養子である鏡胤が相馬地方の門人高玉安兄に宛てて出した手紙の中に、「七大旋考」は「三大考」と違って不出来なので、他人に見せるべきではないとあって「先人」がこれを焼失させた、という一節が確認できた。明から得た写本は焼き捨てられていなかったのだが、当時の平田塾にとって、『靈能真柱』に影響を与えた「三大考」を否定した「七大旋考」は、なかったことにされなければいけなかったのである。

それにもかかわらず、興味深いことに、高玉安兄とその周辺の門人たちは、「三大考」の説を更新して他の惑星を議論に組み入れた「七大考」同様の天文＝神話を考案して、平田塾に送っていた。そして、平田塾と安兄との書簡のやり取りを追ってみると、天が回転する方向や、惑星の動きと異常気象との関わりについて、真剣に問題にしている様子がうかがえる。神職を中心にした相馬地方の平田門人たちにとっては、大平周辺の本居派とは異なり、天体の動きを神々の世界と結びつける形で説明し尽くせることの方が、文献に即した神話解釈に集中することよりも、選び取るべき方向性だったのである。

なお、第96回民衆思想研究会では「民衆宗教史の範囲を問い直す」と題した報告を行ったが、それは、必ずしも既存の民衆宗教イメージには合致しない、こうした民衆の信仰と復古神道的宇宙観との接点を今後の課題とするものになった。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者、○は研究副代表者）

◎三ツ松誠 佐賀大学地域学歴史文化研究センター・准教授

○天野真志 本館研究部・准教授